

日本語禁止表現の性質と類義関係についての研究

著者	李 楠
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	11301甲第17778号
URL	http://hdl.handle.net/10097/00121764

博士論文

日本語禁止表現の性質と類義関係につ
いての研究

李楠

2017年

目次

第1章 はじめに.....	1
1.1 禁止表現の多様性.....	2
1.2 研究課題と目的.....	4
1.3 分析対象.....	5
1.4 まとめ.....	7
第2章 研究の枠組み.....	8
2.1 データの収集方法.....	8
2.2 語用論.....	8
2.2.1 発話行為の語用論.....	9
2.2.2 意味と含意.....	10
2.2.3 ポライトネス	12
2.3 文法化.....	12
2.4 モダリティ	14
2.4.1 モダリティとは何か.....	14
2.4.2 モダリティの文法化.....	16
第3章 禁止表現の意味	19
3.1 「するな」の意味.....	19
3.1.1 語用論的機能	19
3.1.2 「しないで」との比較.....	29
3.1.2.1 語用論的機能.....	29
3.1.2.2 「ね」との共起.....	32
3.1.3 まとめ.....	34
3.2 「してはいけない」	34
3.2.1 「してもいい」との比較	34
3.2.2 「してはいけない」の意味	37
3.2.2 禁止の成立条件	38
3.2.3 望ましさ	39
3.2.4 高梨（2002）の事態評価に対する主観性と客観性の規範.....	41

3.2.5	禁止表現における望ましさの規範.....	43
3.2.6	「してはいけない」形式の禁止.....	44
3.2.6.1	禁止における私的望ましさ	47
3.2.6.2	禁止における社会的望ましさ	47
3.2.7	「してはいけない」形式の使用実態.....	48
3.2.7.1	「するな」	48
3.2.7.2	「してはいけない」(「しちゃいけない」)	52
3.2.7.2.1	話し手が上位である場合	52
3.2.7.2.2	話し手が上位でない場合	54
3.2.7.3	「するな」と「してはいけない」の違い.....	59
3.2.7.4	「しちゃだめ」	61
3.2.8	まとめ.....	67
3.3	不可能形式の意味.....	67
3.3.1	分析.....	67
3.3.2	不可能の条件.....	68
3.3.3	ポライトネスと望ましさ.....	70
3.3.3.1	Brown & Levinson (1987) によるポライトネス理論.....	70
3.3.3.2	能力不可.....	71
3.3.3.3	状況不可.....	72
3.3.3.4	「ほのめかし」としての禁止.....	73
3.3.4	話し手の知識	75
3.3.5	発話機能.....	77
3.3.6	まとめ.....	78
3.4	否定形式の意味.....	78
3.4.1	否定文の諸側面	79
3.4.2	「しない」	81
3.4.3	「するんじゃない」	83
3.4.4	「しません」	90
3.4.5	まとめ.....	91

3.5 第3章まとめ	92
第4章 文法化の度合いとプロセス	96
4.1 文法化	96
4.2 「するな」形式	100
4.2.1 「するな」形式の史の変遷	100
4.2.2 「するな」の文法化の度合い	102
4.2.3 まとめ	103
4.3 「してはいけない」の文法化の度合い	104
4.3.1 「してはいけない」形式の歴史的成立	104
4.3.2 「してはいけない」の文法化の度合い	105
4.3.2.1 花園（1999）の条件形複合用言形式の認定	108
4.3.2.2 条件形の複数出現	108
4.3.2.3 倒置の可能性	109
4.3.2.4 程度副詞の挿入	110
4.3.2.5 肯定形式の取り替え	111
4.3.2.6 時制の取り替え	112
4.3.2.7 丁寧体	113
4.3.2.8 連文における省略	113
4.3.2.9 まとめ	114
4.3.3 「しちゃだめ」形式の文法化の度合い	115
4.3.3.1 条件形の複数出現	120
4.3.3.2 倒置の可能性	120
4.3.3.3 程度副詞の挿入	121
4.3.3.4 否定形の取り替え	122
4.3.3.5 過去形の取り替え	123
4.3.3.6 丁寧体	123
4.3.3.7 連文における省略	124
4.3.3.8 まとめ	124
4.4 不可能形式	125

4.4.1	不可能形式の文法化経路	125
4.4.2	不可能形式の史的変遷	127
4.4.3	不可能形式の文法化の度合い	130
4.4.3.1	文法化に関する基準	130
4.4.3.2	意味の希薄化	132
4.4.3.3	脱範疇化	132
4.4.3.4	文脈の制限	133
4.4.3.5	時制の取り替え	136
4.4.3.6	丁寧体の取り替え	137
4.4.4	まとめ	138
4.5	否定形式	138
4.5.1	否定形式の史的変遷	138
4.5.2	文法化の度合い	143
4.5.2.1	意味の希薄化	146
4.5.2.2	脱範疇化	147
4.5.2.3	文脈による制限	147
4.5.2.4	過去形の取り替え	149
4.5.2.5	丁寧体	150
4.5.2.6	まとめ	150
4.5.3	「するんじゃない」の文法化の度合い	151
4.5.3.1	「の」形の複数回使用	153
4.5.3.2	倒置の可能性	153
4.5.3.3	程度副詞の挿入	154
4.5.3.4	形式の取り替え	154
4.5.3.5	時制の取り替え	155
4.5.3.6	丁寧体との交替	155
4.5.3.7	連文における省略	156
4.5.3.8	まとめ	156
4.5.4	まとめ	157

4.6 第4章のまとめ.....	157
第5章 結論.....	160
5.1 語用論的な違い.....	161
5.2 文法化の度合い.....	162
5.3 今後の課題.....	164
参考文献.....	165
参考資料.....	171

第1章 はじめに

日常生活において他人との摩擦を避けようとするならば、相手のパーソナル・スペースにずかずかと踏み込むようなことはしてはならない。とはいえ、命令や禁止のような、相手の行動を制限しなければならないこともある。そのため、無用な摩擦を回避しつつ自分の希望を叶えるためには、できるだけ相手に対する配慮を示す必要がある。

日本語の文法体系には、相手や話題、場面などに対する配慮を表す表現が多く組み込まれている。敬語がその代表的な例である。しかし全ての配慮が文法的に固定されているわけではない。冗談を言ってその場を和ませるのも、何かを頼む前に「お忙しいところ大変申し訳ありませんが」と前置きするのも配慮である。また、完全に形式化されているとは言えないまでも、かなり固定化された言い方もある。「～しないか？」という否定疑問文は、形式上、相手の断る自由を与えているという点で配慮を示しているが、すでに定型化した勧誘表現である。言い換えれば、表面上は間接的な発話行為なのであるが、定型化されているために、その意図が直接伝わる表現は珍しくない。

では、命令や禁止ではどうであろうか。火事のような緊急時であれば、配慮なしに「走れ」のような直接的な命令がふさわしい。しかし、日常生活であれば、「走ってくれ」「走って下さい」「走って」などのように、定型化した命令文を使うことが多いであろう。このように、配慮を重視する社会において、命令や禁止がいかに使用されているかを考察することで、その言語の特徴が見えてくるのではないだろうか。そこで本研究では日本語の禁止表現に着目し、典型的な禁止やそれに代わって使用される様々な形式を見ていくことにする。

禁止表現に注目すべき理由は、その機能と表現の多様性にある。それらの形式を包括的に捉え、記述的に分析することで、各形式の社会的機能も見えてくる。また、定型化との関係では、内容語から機能語への変化は言語学的には「文法化」として捉えられる。文法化のレベルを厳密に計ることで、言語変化の度合いをみることができる。さらには、日本語の変化プロセスの方向性についてその特異性と通言語的な共通点を究明することができ、形式と意味の対応関係を明解にすることで、さまざまな意味的要因と変化の関係や、意味の生成、解釈に関わる認知の型などが明らかになることが期待される。

また、禁止表現の記述的分析により、どのような表現をどのような文脈で使うのが適切かわかれば、自然な会話ができるよう指導することにも役立ち、日本語学習者にとっても有益であろう。また、文法化のレベルと言語習得の順序について、文法化の度合いが低いものから教え

たほうがよいのか、高いものから教えるべきなのか、という応用言語学的な研究にも貢献できるであろう。

本章では、1.1 節で禁止表現の多様性を確認した上で、1.2 節で本研究の研究課題と目的を提示し、1.3 節で分析対象となる「禁止」表現を提示する。1.4 節ではまとめと本論文の構成を述べる。

1.1 禁止表現の多様性

日本語の禁止の最も基本的な表現は「するな」である。しかし、現代日常会話ではこの形式を使うケースは少ない。『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』での使用は「もう来るな」、「二度と来るな」、「どこへも行くな」など定型的な使用しかなかった。そのかわりに、以下の表現がよく用いられている。

- (1) 「家からあまり遠く離れたところへ行ってはいけない」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス、『アンの愛の家庭』)

- (2) 「食べられません」

(乾燥剤の注意書き)

- (3) 「授業中はおしゃべりしない」

(日本語記述文法研究会 2003 : 81-82)

このほかにも、「～してはダメだ」「～するんじゃない」なども、禁止表現として使われる。このように、典型的な禁止表現が使われない一方、評価などの形式が禁止として現代日本語の日常会話において、頻繁に使われる傾向が観察される。これらの換用がなぜ起こるのであろうか。そして、これらの換用形式と「するな」との間にはどのような違いがあるのかという問題も解決する必要がある。

禁止表現はその機能も多様である。ここでは「するな」に絞ってみていくことにしよう。

村上(1993)は、命令文の意味を考察し、その一環として、「するな」命令文の分析をしている。村上(1993)によれば、「しろ」のかたちが、聞き手に対する動作の実現への要求を表すものとすれば、「するな」のかたちは、その動作の禁止・制止を表すもので、「しろ」の否定の形である。さらに村上(1993)はこの形式は、聞き手に対して動作の実行を要求しないという意味ではなく、「動作を行わないこと」を要求しているとし、こうした聞き手への「さそいかけ性」を持つという点は「しろ」と同じもので、マイナスの方向への命令であるという。また、この形式の使用場面は、「しろ」の命令形式と変わらないとし、積極的に聞き手の動作の

実現と非実現に要求する性質においても命令形式と同じであるとしている。村上（1993）はさらに、場面状況に応じて、(4) のように行為がまだ実行されていない場合の「予防的禁止」と、(5) のようにすでに実行されている場合の「制止的な禁止」の二つに分類している。

(4) 「さあ、約束だから途中まで送っていこう」羊飼いは、麻袋の中から、破れた中国服の上衣を出して、沢田に投げかけていった。「人と会っても口を利くな」羊飼いは歩き出すとはやかった。
(村上 1993 : 97、『望郷』)

(5) 男はぎょっとした顔をした。……考えに窮したのか、無闇やたらと車を押した。「おい、あんまり押すな」前からそう声がかかってくると、その男は、押す手をゆるめて、沢田に眼くばせをした。
(村上 1993 : 94、『望郷』)

このように村上（1993）は、「するな」形式の禁止を「予防的禁止」と「制止的な禁止」に分けて分析しているが、これ以外にも、「するな」形式には励ましや否定的な態度・評価になる場合があるとも述べている。この「するな」形式の非禁止の用法については、尾崎（2007）に具体的な意味と用法についての分析がある。

尾崎（2007）は、村上（1993）の「予防的な禁止」と「制止的な禁止」以外の場合も考えられるとして、次の (6) (7) のような、すでに完了している行為に対する「するな」の例を挙げ、これらの行為は、過去の行為であり、しないように要求することがもうできない以上、これらの例は「非命令」の文となり、話し手の「不満の表明」や「当為的判断」になると尾崎は主張している。

(6) 青島「小学校の傷害容疑の男を見つけて、緊急逮捕しました」（中略）
袴田「（青島に）勝手なことするな！」
(尾崎 2007 : 69)

(7) 青島「お早うございます！」
和久「朝からでかい声出すな」
(尾崎 2007 : 69)

また、意志性の要因も一つの大きな要因であり、尾崎（2007）は、非情物を相手とした禁止文は、命令の内容を相手が自分の意思によって実行することができないから、「非命令」の文となるとしている。これらの例文では、(8) は「降らないこと」を望む「願望」、(9) のような例は話し手の「不満の表明」を表すという。

- (8) (そらを見上げて) 明日は降るなよ。
- (9) (旅行に出かける日の朝、窓を開けると雨が降っている) こんな日に降るなよ。

以上、禁止表現は表現自体も多様であるが、その意味機能も多様であることを見た。次節では、本研究で解決する課題と目的を具体的に示す。

1.2 研究課題と目的

本研究は、日本語の禁止表現の典型的な形式と、換用されている形式を語用論、文法化理論に基づいて分析することを目的とする。具体的には以下の課題を設定する。

- I 日本語の禁止表現はどのような状況で使用されているのか。
現代語における禁止表現の意味と使用条件とそれぞれの相違を明らかにする。
- II 「するな」に換用される形式にはどのような禁止を表しているか。
換用形式を使用することによって、話し手は何を伝えようとしているのか。
- III 日本語の禁止表現はどのような文法化プロセスで禁止表現になるのか。

話し手はなぜ典型的な禁止を表す「するな」形式があるにもかかわらず、あえて他の形式を使用するかを明らかにするためには、これらの形式の背後にある情報や発話の前提、話し手と聞き手の関係などから見ていく必要がある、話し手が換用形式を選んだということは、話し手には「するな」で表す禁止とは別にほかの意志を伝えたいという気持ちが含まれているからだと考えられる。このことを明らかにするために、禁止表現として用いられている形式間の相違、それぞれの意味、使用実態を明らかにする必要がある、そのためには、語用論的観点が必要とされる。

また、各形式における禁止表現がどのような過程を経て成立したのかを明らかにするためには、それらを通時的に概観し、それらの発達過程を見た上で、共時的にも意味が幾つかあることから、それらが言語変化のプロセスの途中段階にあることがわかる。そのため、通時的把握と同時に、現在も進行しつつある言語変化の側面についても考察し、それぞれの文法化の度合いを明らかにする。

1.3 分析対象

「するな」が使われなくなり、ほかの形式が代わりに使われることは、「するな」形式が直接的で、あからさまに相手の行動を縛るからであると考えられる。そのため、「するな」形式よりも間接的ではあるが、同じように行為要求の拘束力の強い表現が必要とされ、これらの換用が発達してきたのであろう。本研究では、これらの換用形式と「するな」形式を比較しながら、それぞれの機能、使用条件、文法化の程度を明らかにするため、先行研究を参考に、本研究の分析対象を以下の二つの条件を同時に満たすものとする。

- (10) a. 強い拘束力のもとで聞き手に行為を行わないよう指示するという発話意図を満たす
- b. 間接発話行為で、かつ、「てくれる」などの受益表現を用いない形式

まず、安達（2002）は、「命令は、依頼と違って、行為の実行者である聞き手にその要求を受け入れるかどうかという判断の余地を与えない」とし、行為要求の機能のある文の中でも、命令文はもっとも強制力が強いとしている。

仁田（1991：7）は、「働き掛けとは話し手が相手たる聞き手に話し手自らの要求の実現を働きかけ、訴えかけるといった発話・伝達的態度を表したものである」とし、そのうち、「対他命令」と「自己包括命令」があり、対他命令のうちでは「命令」「依頼」「禁止」があり、自己包括命令は、「誘いかけ」であるとしている。以下、(11)が命令、(12-13)が依頼、(14)が禁止、(15-16)が依頼的な禁止、(17-18)が誘いかけの例である。

- (11) 「つまらん心配はしないで早く行け。」
- (12) 「一谷くん、それ、うちの県版に書いてくれよ。」
- (13) 「あなた早く帰ってきてちょうだい。」
- (14) 「そういうことに、やたら興味を持つな。」
- (15) 「あまり高価な薬を使ってくれな。」
- (16) 「どうか私に恥をかかせないでください。」
- (17) 「やりましょう。松田さん、熊谷さん。」
- (18) 「一緒に行こうか、いま。」

(仁田 1991：7)

この定義にしたがえば、「てくれ」「てちょうだい」「くれるな」などの受益表現は依頼であって、禁止表現「するな」の換用表現と見ることは難しい。益岡（2001）も「しないで」は聞き手の意向に反して行為を強要する性格と違い、話し手と聞き手の意向が一致するとの判断を表す性格のある「ね」が付加できるため、依頼であるとしている。

「依頼」と「(否定) 命令」はどちらも「働きかけ」のモダリティを持つという点で、非常に近い関係にあることは間違いない。しかしながら、本研究では、「依頼」を研究の対象とはしない。これは、ここでは本来「働きかけ」の機能を持たない表現が、どのようにして禁止の意味を持つようになったのかを考察することに焦点を絞るためである。そのため、「しないで」の形式は、2.1.2 節で少し触れることにするが、文法化の経路については考察しない。

以上の定義に基づいて、本研究では、以下の4つの類の形式を研究対象とし、それぞれの意味、使用条件、文法化の度合いを考察することで、禁止表現の全体図と各形式間の相違、文法化の経路を明らかにする。

(19) 研究対象の形式：

- | | |
|----------|-----------------------------|
| a. するな | 動詞終止形+な |
| b. 否定の評価 | 動詞連用形+ては／ちゃ+いけない／だめ |
| c. 不可能文 | 動詞連用形+られません／られない／できない／できません |
| d. 否定文 | 動詞未然形+ない／動詞連体形+のではない（んじゃない） |

また、宮崎ほか（2002：44）は、行為要求の機能をもつ文には以下の三種類があるという。

- (20) a. 本来的に行為要求の機能をもっているもの
- b. 本来は別の機能をもっていたが、行為要求の機能に移行し、その機能が定着したとかんがえられるもの
- c. 状況に依存して行為要求の含意を派生するもの

（宮崎ほか 2002：44）

本研究では、「するな」形式が（20a）に、「してはいけない」、「しない」「するんじゃない」形式が（20b）に、「られない」や「ことができない」などの不可能形式が（20c）に属すると仮定して検証していきたい。

1.4 まとめ

1.1 節で述べたように、禁止は必ずしも否定命令ではなく、禁止には命令文とは違う特性が備わっている。また、先行研究においても、肯定と否定においてのずれが叙述の形式において観察されるという指摘がある（宮崎ほか 2002 : 79）。命令文に関しても、両者の違いについて尾崎（2007）の研究がある。

したがって、禁止表現は命令文の一種としてだけではなく、禁止表現を単独の意味カテゴリーとしてみていく必要があると考える。さらに、このカテゴリーの全体図を明らかにすることを目指したい。

本論文は以下のように構成される。

第1章では、日本語の禁止表現を総合的にとらえる必要があることを提示した上で、語用論と文法化理論の観点から、記述的に分析することを述べた。

第2章では、データの採集方法と理論について概観する。特に語用論と文法化理論について詳しく見ていく。

第3章では、語用論的観点から、ドラマとコーパスから抽出した例文をデータとして、典型的な「するな」形式による禁止と、その他換用されている形式と比較しながら、現代日本語の禁止表現の各形式の意味、使用条件、それぞれの相違を明らかにする。

第4章では、文法化の観点から、まず歴史的流れを概観し、それから現代語の各形式の文法化の度合いをテストしながら分析する。これらの文法化の度合いと歴史的流れを照らしながら、禁止表現の発達の経路を見る。

最後に、第5章では、本研究のまとめを行い、今後の研究の課題について述べる。

第2章 研究の枠組み

本研究では、先行研究の指摘を踏まえ、コーパスデータの分析をもとに、文脈を考慮に入れつつ日本語の禁止表現を記述することによって、実際の言語現象における使用条件の実態とそれぞれの違いを考察する。

通時的変化については、主に先行研究のレビューと用例の実態記述を行う。上代から現在までの禁止表現の史的変遷過程を明らかにすることで、今までの文法化経路が明確になる。また、文法化の観点からそれぞれの形式をテストの適用から考察して、それぞれの文法化の度合いを明らかにする。

そのため本章では、2.1 節でコーパスを中心とするデータの収集について、2.2 節で発話行為と含意、ポライトネスに関する語用論を概観する。2.3 節で文法化理論について、2.4 節ではモダリティについて見ていく。

2.1 データの収集方法

データの採集方法として、主に電子化されたコーパスから、対象の形式を検索し、提示された結果から禁止の機能を持つ文を抽出して、それらの使用実態を明らかにする。使用するコーパスとして、主に、テレビドラマ『スペック〜翔〜』（2012年4月1日放送）の中から「するな」形式の禁止表現を収集した。また、無料公開されている『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』（国立国語研究所）を用い、この中で主に「するな」に換用されている分析対象の形式を検索し、得られた結果の中から、禁止表現の用法のものを抜き出した。『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』（国立国語研究所）は、簡単にターゲットの形式が検索できるサイトで、前後の文脈も見ることができ、言語機能や使用条件の調査にとって、使いやすいコーパスである。第3章では、主にこの二つのコーパスから収集したデータを用いる。

2.2 語用論

語用論とは、「言語使用に関わる意味を扱う言語学の部門」（加藤 2004 : 2）である。「意味論」が「文（sentence）」という「コンテキスト情報を伴わない抽象物」が持つ「文字通りの意味」を対象とするとすれば、語用論は「実際にあるコンテキストで誰かが誰かに対して使用した文」である「発話（utterance）」の意味を対象としている（加藤 2004）。

- (1) 発話 (utterance) = 文 (sentence) + コンテキスト (context) (加藤 2004 : 2)

加藤 (2004 : 2) は、「コンテキスト (context)」という概念を、文脈 (linguistic context=text) と背景情報 (non-linguistic context=situation) に分けて考えている。「文脈 (text)」とは、「ある発話の前後の発話をさすもの」であり、「背景情報 (situation)」とは、「その発話を取り巻く状況をさすもの」で、「背景情報 (situation)」の中にはさらに、「話し手と聞き手の間の個人情報や文化情報など発話の解釈に必要とされる各種の情報が含まれる」としている。

第 3 章では、以上で紹介した文脈、話し手と聞き手の背景情報から、それぞれの禁止表現形式の意味を考察する。そのための理論的枠組みとして、発話行為理論 (2.2.1 節)、含意 (2.2.2 節)、ポライトネス理論 (2.2.3 節) について、簡単にみていく。

2.2.1 発話行為の語用論

第 1 章で禁止表現の用法が多岐にわたることを見た。しかし、禁止表現の核となる機能が命令であることは間違いない。そこで、ここではまず Searle (1969) による命令の語用論的条件からみていくことにする。

Searle (1969) によれば、命令を含む発話行為が成立する条件として、以下の 4 つの適切性条件が挙げられている。

(2) Felicity condition

命題内容条件 (propositional content condition) : 発話の内容が満たすべき条件

準備条件 (preparatory condition) : 発話の状況に関する条件

誠実性条件 (sincerity condition) : 話し手の意図に関する条件

本質条件 (essential condition) : 特定の発話ない行為の遂行に本質的な条件

(Searle 1969 : 66)

命令の適切性条件は以下の通りである。

(3) 命題内容条件 : 命題は聞き手による未来の行為である。

準備条件 : a. 聞き手は行為を行う能力を持ち、話し手は聞き手がその能力を持つことを信じている。

b. 話し手・聞き手の両方にとって、聞き手が自然の成り行きで自発的に行為を行うかどうかは自明ではない。

c. 話し手は聞き手より権威ある地位にいる。

誠実性条件：話し手は聞き手に行為の遂行を求めている。

本質条件：話し手が聞き手に行為を実行させようとする試みであると見なされる。

上記の語用論的条件に基づいて、山岡（2006）は「もし話し手から見て、条件（3）の準備条件（c）が聞き手に共有されていないと判断されれば、話し手は「命令」の前に、条件充足のための予備発話を行おうとする」という。山岡（2006）は、準備条件（3c）に関して以下のような予備発話を設定して、命令を発する場合の前置きを定義している。

(4) 「今日から私が君の上司だ。私の指示に従ってもらいたい」 （山岡 2006 : 3）

山岡（2006）は、一般的には、命令文を発話する前提として、こうした「話し手、聞き手の双方が語用論的条件を互いに共有」していなければ、その発話は適切ではなく、その場合には命令としての発話機能がはたせなくなるとして、上のような予備発話をしていなければ、聞き手は「あなた、いったい何の資格があって私たちに指示しているんですか」と聞き返すなどして、発話の溝ができてしまうという。

狭義の禁止に関してもこのような条件を満たさなければならないと考えられる。そのため、話し手と聞き手の上下関係以外に、背景情報として文脈から両者の認識の共有を考えていくことにする。

2.2.2 意味と含意

一般に、自然言語による伝達内容を問題にする場合には、発話のどの部分が文脈から独立した文字通りの意味であり、どの部分が間接的な推論にもとづく伝達であるかを厳密に区別する必要がある（山梨 1986 : 151）。この推論に基づいて導き出された意味を「含意 implicature」と名付けたのが Grice（1975）である。

Grice（1975）は発話の伝達内容を分類し、それには文字通りの意味と含意があるとして、以下のように区分している。

(5) 発話の伝達内容

- A. The speaker says
- B. implicature
 - i. conventional implicature
 - ii. conversational implicature
 - (a) particularized conversational implicature
 - (b) generalized conversational implicature

このうち、conventional implicature とは、以下の (6) の例が表すように、言語規約に基づいた含意であり、コンテキストに依存せずに常に決まった意味である。例えば (6) の therefore は、he is brave という命題が He is an Englishman という命題の帰結であることを含意している。

(6) He is an Englishman, and, he is, therefore, brave. (Grice1975:49)

これに対して、conversational implicature とは、協調の原則に従って算出される含意であるとしている。協調の原則については、以下のように定義されている。

(7) 協調の原則

- a. Quantity Maxims:
 - Make your contribution as informative as is required (for the current purposes of the exchange).
 - Do not make your contribution more informative than is required.
- b. Quality Maxims:
 - Do not say what you believe to be false.
 - Do not say that for which you lack adequate evidence.
- c. Relation Maxim:
 - Be relevant.
- d. Manner Maxims:
 - Avoid obscurity of expression.
 - Avoid ambiguity.

Be brief(avoid unnecessary prolixity).

Be orderly

(Grice1975:45-46)

conversational implicature はさらに particularized conversational implicature と generalized conversational implicature に分けられる。particularized conversational implicature とは、特定の文脈における意味で、命題以外の意味が含まれている。generalized conversational implicature は、発話内においての語句によって派生する意味であり、特定の文脈における情報を必要としない。

グライスのこのような会話の意味と含意について、Thomas (1995) はさらに、これらの意味は恒常的なものではなく、時間とともに変わっていくものであるとして、ある語句の会話の含意が、次第に最終的に意味論の意味となるという。本研究では、文法化という観点から、様々な禁止表現の含意から意味への変化にも着目して、分析を行う。

2.2.3 ポライトネス

Brown & Levinson (1987) によれば、人にはポジティブ・フェイス (positive face) とネガティブ・フェイス (negative face) という二つの欲求がある。ポジティブ・フェイスとは自分のありかたや行為を積極的に他人に認められたいという願望である。それに対して、ネガティブ・フェイスとは、自分のありかたや行為を他人に束縛されたくないという願望である。これらのフェイスを脅かす行為は FTA (face Threatening Act) といい、人は日常のやりとりの中で、できるだけ FTA を避けたり緩和させたりする。ポライトネス表現というのは、話し手が相手のフェイスを脅かす危険がある時に、相手のフェイスを守るための表現である。

さて、相手の行動を制限する禁止は聞き手のネガティブ・フェイスを脅かす典型的な FTA のひとつである。したがって、FTA を緩和するためのポライトネス表現が必要となる。例えば直接的な「来るな」に比べれば、「来ないで」には押しつけや不快感が減少する。「するな」形式を避けて他の表現が用いられる理由のひとつが、FTA を緩和することにあることは間違いないであろう。

2.3 文法化

日本語の禁止表現の各形式が、語用論的な原因からどのようにして禁止表現として使用されるようになり、どれほど意味として定着しているのか、また、それらの定着における拡張の

過程がとうなっているのか、という問題を明らかにするためには、文法化理論が有効である。

秋元（2004）によれば、語用論的推論が強まることによって、上で述べたような会話の含意がある文脈に頻繁に現れるようになり、その頻度によって含意が慣習化し、あるいは意味化して、多義が生じ、やがて一方の意味が優勢になる。例えば、(8) の例では、「所有＋目的語を表す付加詞」という構造だったのが、所有の意味が弱まる（漂白化という）ことによって、義務の語用論的推論が強まるという。さらにこの文が語用論的推論によって、次第に義務の含意が「意味化」し、(9) のような義務を表すモダリティ表現となるという。

(8) have a letter to write. (秋元 2004 : 5)

(9) have to write a letter. (秋元 2004 : 5)

本研究で分析する「するな」形式の換用形式も、このように、会話による含意であったものが、次第変化して、禁止の含意が定着し、文法化されていると考えられる。文法化とは、形式がある範疇から他の範疇へ移動する際に、突然起こる変化ではなく、各段階を経て徐々に変わっていく過程を指す (Traugott 2003 : 6)。文法化は、形態論からも、統語論からも観察することができる。例えば、形態論的には、大きな開いたクラスから、閉じたクラスに変わっていくなど、統語論的には、統語構造が変化するなどの変化がある。またその際には音韻的な変化も伴うことが一般的に確認されている。本研究では、これらの、形態的な、意味的な、統語的な変化、さらに音韻的な変化に触れながら、それぞれの文法化の度合いを見ることで、典型的な禁止表現と換用されている表現の違いを考察する。

しかし、文法化は必ずしも通時的な研究ではない。共時的な観点からの文法化の意義もある。Heine & Narrog (2010 : 409) は、言語は、変化の途中段階として古い構造 A と新しい構造 B が重複して併存することがあるとして、共時的に (10) で示す状態が観察されるという。

(10) The overlap model

- i . There is a linguistic structure A.
- ii . A acquires a second structure B in specific contexts (=A/B).
- iii . In some other context, A is lost, with the effect that there is only B.

(Heine&Narrog 2010 : 409)

つまり、(10 ii) という段階があるように、通時的だけではなく、共時的にも文法化の変化を捉えることが可能であり、共時的研究においても、文法化の視点は有効である。三宅 (2005) は、共時的研究における文法化の研究の意義には、次の二つがあると述べている。

一つは、同一の形式が、内容語的な用法と機能語的な用法を合わせ持つ場合、その用法間の連続性、及び有機的な関連性を捉えることが可能になるということ、もう一つは、「有機的な関連性が捉えられる」ということの帰結として、文法化により作られた機能語の抽象的な意味、あるいは文法機能を説明しようとする際に、文法化される前の内容語としての意味からの類推が可能になるということである (三宅 2005 : 66)。

本研究では文法形式としての変化には度合いがある、つまり禁止表現における各形式をそれぞれ文法化の過程の途中にあると考える。この仮説にそって、禁止表現における「評価・判断・説明」が、ある程度、意味化、文法化が進んでいるものとして捉えることができ、その現段階における度合いも確認することができる。これに基づいて、様々な禁止表現のそれぞれの違いを明らかにする。

2.4 モダリティ

本研究において取り扱う形式はそれぞれの基本的意味があり、その基本的意味のカテゴリーが禁止のカテゴリーへ変化をするのである。つまり、モダリティの変化である。これらの変化を捉えるためには、モダリティの文法化という視点が必要である。

モダリティの文法化には一般に普遍性があると認められている。例えば、玉地 (2008 : 61) は、文法化研究は、単に記述的な文法変化を明らかにすることにとどまらず、モダリティの分類によって通言語的な言語変化のパターンが存在するかを明らかにすることができると述べている。また、Heine & Kuteva (2002) は、500 言語を分析し、様々なモダリティの文法化経路を見出している。

2.4.1 モダリティとは何か

モダリティは、日本語記述文法研究会 (2010 : 47-50) によれば、文の述べ方を表すものである。つまり、命題内容である事態に対する把握の仕方や、先行文脈への関係づけのあり方、話し手の発話・伝達的な態度のあり方を表し分ける分類である (日本語記述文法研究会 2010 : 47-50)。その詳しい分類の仕方は、以下の表にまとめられる。

事態に対するとらえ方	認識のモダリティ 評価のモダリティ
説明のモダリティ	<div></div> 叙述 意志・勧誘 命令 疑問 丁寧さ 終助詞で表されるもの
表現類型のモダリティ	
伝達のモダリティ	

表 1 日本語記述文法研究会 (2010) によるモダリティの分類

それぞれのモダリティに対応する例文は以下の通りである。

- (11) 認識：息子はもしかしたら合格するかもしれない。
- (12) 評価：人が話しているときは、静かにしなくてはいけない。
- (13) 説明：間に合いませんでした。道が混んでいたのです。
- (14) 叙述：昨日佐藤さんに偶然会いました。
- (15) 意志・勧誘：今年こそ頑張ろう。
- (16) 命令：まあ、そこに座れ！
- (17) 疑問：鈴木さんもここに来ますか。
- (18) 丁寧さ：東京で会議がある／あります／ございます。
- (19) 終助詞：雨になるね。

(以上、日本語記述文法研究会 2010)

Palmer (2001) は、モダリティを、対命題モダリティ (propositional modality) と対事象モダリティ (event modality) があるとしている。対命題モダリティは Epistemic と Evidential に、対事象モダリティは Deontic と Dynamic に、という四つのモダリティに分けられる。Lyons (1977) の定義によると、Epistemic modality は、話し手の命題の事実性に対する判断を、Evidential modality は、話し手の命題の事実性に対する証拠性を、Deontic modality は、道徳的に責任のある行為

者によって遂行される行為の必然性や可能性に関するものを、Dynamic modality は、文中の主語とされる人物の行動を規制する要素が内部に存在するものを表すとされている。

本研究と深く関わるのは、deontic modality である。また、本研究で考察する各形式について、「してはいけない」形式は、評価のモダリティに属するもので、これは一般的には、deontic modality の下位分類に属するとされている。不可能形式については、ability を表すから dynamic modality にである。英語においてこれらのモダリティには連続性があることはすでに多くの研究で指摘されている。例えば、一つのモーダル動詞が、dynamic、deontic、epistemic の三つのモダリティとして機能することが可能で、(20) の例では epistemic modality と deontic modality の意味で解釈することができ、(21) では deontic modality と dynamic modality の意味で解釈することができる（玉地 2005）。

(20) He may come tomorrow.

- a. 彼は明日来てもよい。(deontic)
- b. 彼は明日来るかもしれない。(epistemic)

(21) He can come in now.

- a. 彼は今入ることができる。(dynamic)
- b. 彼は今入ってもよい。(deontic)

(玉地 2005 : 24)

このように、一つのモダリティのカテゴリーから他のモダリティのカテゴリーに連続的に変化することは一般的に見られる現象である。例えば、英語におけるモダリティの文法化は、dynamic modality > deontic modality > epistemic の順に連鎖が起こるとされている。本研究においても、日本語の禁止表現を見ることで、日本語の変化に普遍性があると主張したい。また、一般的な普遍性については、先行研究で取り上げられてきた現象と、日本語の各形式における禁止表現への変化にこのような普遍性が見られるかどうかを考察していく。

2.4.2 モダリティの文法化

モダリティ表現の文法化はその意味カテゴリーの文法化である。これらの経路をまとめることでこの意味カテゴリーの文法化の経路が分かる。また、ほかの言語とのモダリティの変化経路を照らし合わせることによって、普遍的な文法化の経路が分かるようになるので、そこから

それぞれの言語の一般性と個別性を分析することができる。この一般性を分析した先行研究には、Heine & Kuteva (2002) がある。これは、500 の言語を分析し、400 以上の文法化の経路をまとめたものである。それらの経路は、半分以上の言語において見られるものであり、この研究によって、通言語的に文法化の一方向性仮説を検証することができた。以下ではこの研究でわかった経路から本研究と関係するものを取り出して、紹介する。

Heine & Kuteva (2002) は、モダリティ表現において、(22) のような経路が普遍的なものとしている。

(22) DYNAMIC MODALITY (ABILITYのみ) > DEONTIC MODALITY

DEONTIC MODALITY > EPISTEMIC MODALITY

(Heine & Kuteva 2002:116)

この経路は、「力のダイナミックス (force-dynamics) が物理的な世界 (Dynamic) > 社会的な世界 (Deontic) > 認識的な世界 (Epistemic)」という方向への拡張を反映する (Bybee 1985, Palmer 1986, Nordlinger & Traugott 1997 など)。

また、Heine & Kuteva (2002) は、(22) よりも具体的なモダリティの文法化の経路の例として、(23) のような経路を挙げている。

(23) ① SUITABLE > OBLIGATION

(Heine&Kuteva2002:285)

② ABILITY > PERMISSIVE

(Heine&Kuteva : 27-28)

③ CIRCUMSTANTIAL POSSIBILITY > POSSIBILITY

(Bybee1994:193-194, Narrog2012:121-122)

④ DO > OBLIGATION

(Heine&Kuteva2002:285)

本研究においても禁止表現への変化に、これらの経路がみられるかどうかを検証する。

さらに、赤塚 (1998 : 78-81) によれば、日本語は許可の概念を基本として、その延長線上に、義務、禁止、免除 (不必要) の概念が現れるとしている。これは、本研究で考察する「してはいけない」の禁止への文法化の経路であると考えられる。

これらの経路が普遍的であるように、禁止への文法化のプロセスにも普遍性があるのではないだろうか。例えば、「してはいけない」のような評価のモダリティから、禁止や命令のよう

な speech act 的な用法が生じるという経路があるが、この経路についての分析は第4章第2節で述べる。また、一般的に不可能形式は ABILITY > PERMISSIVE への変化があるが、日本語においても、この経路があるということを主張したい。詳しくは、第4章の3節で分析する。最後に、否定形式から禁止への文法化プロセスとして、「しない」から否定の断定、そこから禁止の意味へのプロセスは、Heine & Kuteva (2002) で主張されている「DO > OBLIGATION」の経路と似ていおり、また、この経路は Bybee が主張している「prediction > imperative」の経路にも似ている。これらの変化については、第4章第4節で述べることにする。

第3章 禁止表現の意味

本章では、禁止の基本表現である「するな」のほか、禁止表現として用いられる「してはいけない」、「できない」などの不可能表現、「するんじゃない」などの否定表現の意味と、禁止の語用論的な成立条件を検討する。

3.1 「するな」の意味

3.1.1 語用論的機能

禁止は、否定の命令文であり、ある行為をしないように要求する命令である点では、命令文と同じ成立条件が成り立つ。蔣（2010）によれば、仁田（1991：238-240）、王（2001：41-42）、安達（2002：47）の命令と依頼の成立条件は次のようにまとめられる。

(1) 命令と依頼の成立条件：

- a. 話し手が聞き手に行為を実行させようと企てる。
- b1. 命令の場合：話し手が行為の課し手である。しかも、話し手が聞き手を凌ぐ権力や権威のある地位にある。聞き手に拒否の選択権を与えない。
- b2. 依頼の場合：話し手が行為の課し手である。しかし、話し手が聞き手を凌ぐ権力や権威のある地位にない。聞き手に拒否の選択権を与える。
- c. その行為が聞き手のこれから先の一連の行為である。
- d. 聞き手がその行為を実行することができる。
- e. 話し手が聞き手にその行為を実行させたいと願ったり、望んだりする。

（蔣 2010：49）

蔣（2010：49）は、ここで挙げた成立条件を Vanderveken（1990）の言語行為論の用語で言えば、(1a) が発語内目的、(1b) が達成の様式、(1c) が命題内容条件、(1d) は予備条件、(1e) が誠実条件に相当するという。さらに、命令の成立条件は禁止の成立条件と見なすこともできるので、命令の論理式が「命令（行為）」になるとすると、禁止の論理式は「命令（一行為）」になる（“一”は否定を表す）（蔣 2010）。つまり、禁止は否定の行為に対する命令であるため、命令の成立条件が禁止にも適用できると主張している。

しかし、この定式化にはいくつか問題点がある。第一に「命令」と「禁止」の範囲が狭すぎ

ること、第二に、「命令」と「禁止」の違いを説明できない、すなわち、「禁止」は単なる否定命令ではないという点、「禁止」の多義性と「禁止表現」の多様性において、「命令」と「禁止」が全く異なるという二点である。

第一の「命令」と「禁止」に共通する問題点として、まず(1b)のいうような、「話し手が聞き手を凌ぐ権力や権威のある地位にある。聞き手に拒否の選択権を与えない。」という条件は成り立たないということ、次に「聞き手がその行為を実行することができる」とは限らないということが挙げられる。

「話し手が聞き手を凌ぐ権力や権威のある地位にあり、聞き手に拒否の選択権を与えない」というのは、命令・禁止の条件ではなく、ポライトネスの問題である。相手の行為に制限を加える際には、相手のフェイスを守るするために、何らかのストラテジーを用いるのが普通である。FTAを緩和せずに命令・禁止という発話行為を行うのはこの原則に反してしまう。しかしながら、相手のフェイスを保持する以上の利益が相手に与えることができるのであれば、その限りではない。例えば非常事態であれば、相手が誰であれ、「逃げろ」「外に出るな」などの命令・禁止の直接発話行為はむしろ有益である。従って、話し手と聞き手の間の上下関係や社会的距離は命令・禁止の成立条件から外して差し支えない。なお、「聞き手に拒否の選択権を与える」かどうかは、命令と依頼を区別する重要な点であるので、これは保持する。

「聞き手がその行為を実行することができる」とは限らないというのは、聞き手にその行為を行う意図がなくても構わないということである。例えば病人に「早くよくなれ」と命令しても、本人にそれが意図的に実行できるわけではない。無生物である植物の種に「早く芽を出せ」と命令することもできる。これは禁止についても同様である。眠っている相手に「起きるなよ」といっても、目が覚めるかどうかは、本人の意志とは無関係である。収穫前のリンゴに対して、「落ちるなよ」ということも可能である。

次に、「命令」と「禁止」の違いについて、考えてみよう。第1章で触れたように、「するな」という形式は、(1)の条件を満たしているとき、聞き手に動作をしないように命令する最も一般的な禁止表現であり、この場合、村上(1993)の言う「予防的禁止」に相当する。

「予防的禁止」はまさに「命令(一行為)」で表されるべきもので、聞き手への配慮なしにその行為を強制的に止めさせることを意図した発話である。このような典型的な「禁止」には、以下のような用例がある。

- (2) 「とまれ、泥棒、逃げるな」と通訳が叫んだ。 (大江健三郎『死者の奢り・飼育』)
- (3) 「そうさ。だから、エディさんのことはもう気にするな。」 (沢木耕太郎『一瞬の夏』)
- (4) 「吉川さん。驚くなよ。いいか、驚くなよ」 (村上 1993:99)

これ以外に、「するな」形式の禁止は、緊急時や危険なものの告示としても使用されるが、このようなものは、近頃では見かけられなくなる傾向にある。

- (5) 「やけどの恐れあり！ 触れるな！」 (風呂場の告示)

しかし、現代日本語の日常対話では、特に「予防的禁止」の機能として、「するな」を使うことは少ない。『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』には「もう来るな」、「二度と来るな」、「どこへも行くな」など定型的な使用しかなかった。

次に「禁止」の多義性について検討しよう。第1章で触れたように、典型的な禁止の「するな」には、村上(1993)のいうように、「予防的禁止」と「制止的な禁止」がある。「予防的禁止」は、聞き手がまだ行為を実現していない、または行為を実行しようとしている寸前である場合、行為をあらかじめ禁じる予防的な禁止である。それに対して、「制止的な禁止」は聞き手がすでに実行している行為に対して、それをやめるように命じるものである。以下の(6)は予防的な禁止の、(7)は制止的な禁止の例である。

- (6) a. 何を聞かれても喋るな。
b. 「吉川さん。驚くなよ。いいか、驚くなよ」 (村上 1993:99)
- (7) a. こら、授業中は喋るな。
b. そんなに驚くなよ。

同様に、「廊下を走るな」「携帯電話を使うな」など、状況によって、「予防的禁止」にも「制止的な禁止」にもなり得る。

これに対して「命令」は常に未然の行為であり、已然の行為には用いられない。すでに来て
いる人物に「来い」というのは不自然である。走っている相手に「走れ」と言うことはできる
が、それは「そのまま走り続けろ」という意味であって、「走り続ける」という行為自体は未
然である。逆に、禁止であれば、すでに来てしまった相手、走り始めている相手に「来るな」

「走るな」と言うことは「制止的禁止」として可能である。

尾崎（2007）は、「予防的な命令」では事態の実現が予測され、特定の肯定的な事態となるとして、例えば（6a）の例では、話し手は発話する前に「相手が喋る」という肯定的な事態を予測しているので、この予測を受けて、「喋るなよ」という文を予防的に発しているという。この例を図で示すと以下の通りになる。

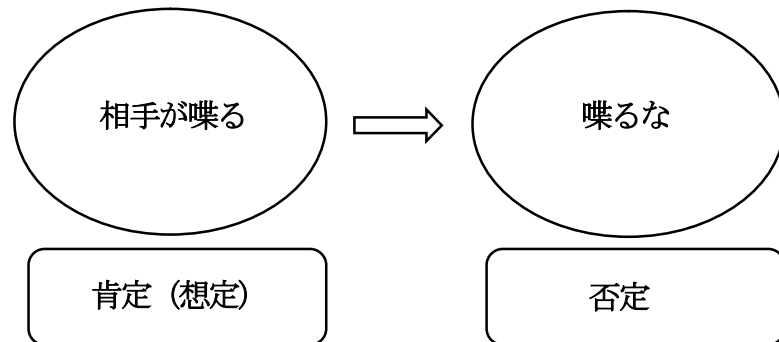


図1 予防的な禁止

村上（1993）のいうもう一つの「制止的な命令」について、尾崎（2007）は、肯定的な事態としてすでに実現されているのに対して、それをやめさせるものであるとして、廊下を走っている相手に対する「廊下を走るな。」（尾崎 2007：67）という例を挙げている。この例では、すでに実現されている「走る」という事態が特定の肯定の事態に当たるものである。これを図式にすると以下のようになる。

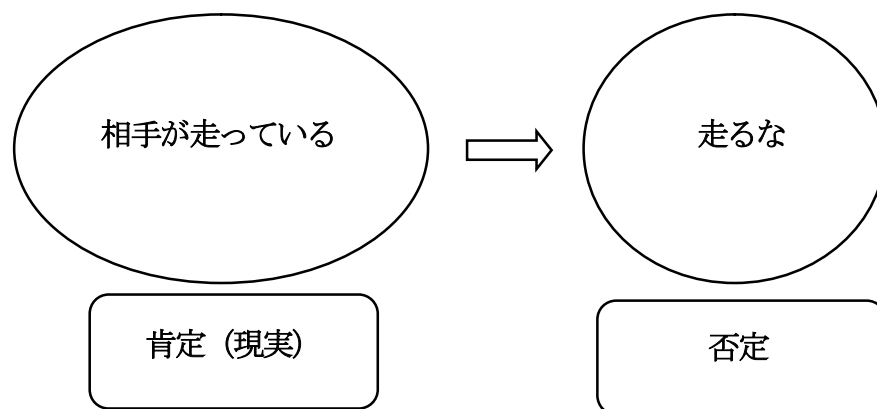


図2 制止的禁止の命題の前提

以上のように、否定命令文は叙述の否定文と同様、先に特定の肯定的な事態があった上で使用される（尾崎 2007：68）。「予防的な禁止」においても、「制止的な禁止」においても、この特定の肯定的な事態は存在するので、本研究ではこの二つの区別をしないで、尾崎（2007）の研究に従い、特定の肯定的な事態（「走るな」であれば「走ること」）を「（命令文の）対象となる行為」と呼ぶことにし、実現が求められている事態（「走らないこと」）を「命令（の）内容」と呼ぶことにする。

本研究は「禁止」に焦点を絞っているので、命令に関する考察には深入りせず、ここでは（1）を「命令」「依頼」「禁止」の成立条件としてつぎのように再定式化すると定める。

（1'） 命令と依頼の成立条件：

- a. 聞き手が行為を実行するよう、話し手が企てる。
- b1. 命令の場合：話し手が行為の課し手である。聞き手に拒否の選択権を与えない。
- b2. 依頼の場合：話し手が行為の課し手である。聞き手に拒否の選択権を与える。
- c. その行為が聞き手のこれから先の一連の行為である。
- d. 話し手が聞き手にその行為が実現して欲しいと願ったり、望んだりする。

（8） 禁止の成立条件：

- a. 聞き手が行為を実行しない（一行為）よう、話し手が企てる。
- b. 話し手が一行為の課し手である。聞き手に拒否の選択権を与えない。
- c1. （予防的禁止）一行為は聞き手がまだ実行していない。
- c2. （制止的禁止）一行為は聞き手がすでに実行している。
- d. 話し手が聞き手にその一行為が実現して欲しいと願ったり、望んだりする。

命令文の成立条件の中には、「聞き手が実現する事態」があり、これは話し手にとって「都合のよい、望ましい、好ましいものである」という条件である。仁田（1991）は、この「実現を望ましく思う」という話し手の事態のとらえ方を「待ち望み」と呼び、この「待ち望み」は「働きかけ」の文に潜在的に備わっているものとしている。この「待ち望み」に対して、尾崎は、否定命令文の場合、この「待ち望み」の現れ方が肯定の命令文よりも複雑であると述べている。例えば、例えば「走るな」という文の場合、命令の内容つまり「走らないこと」が待ち望まれる事態になる。反対に言えば、「走ること」は望ましくないことであるということを意味すると尾崎は述べている。この概念は以下の図で示すことができる。

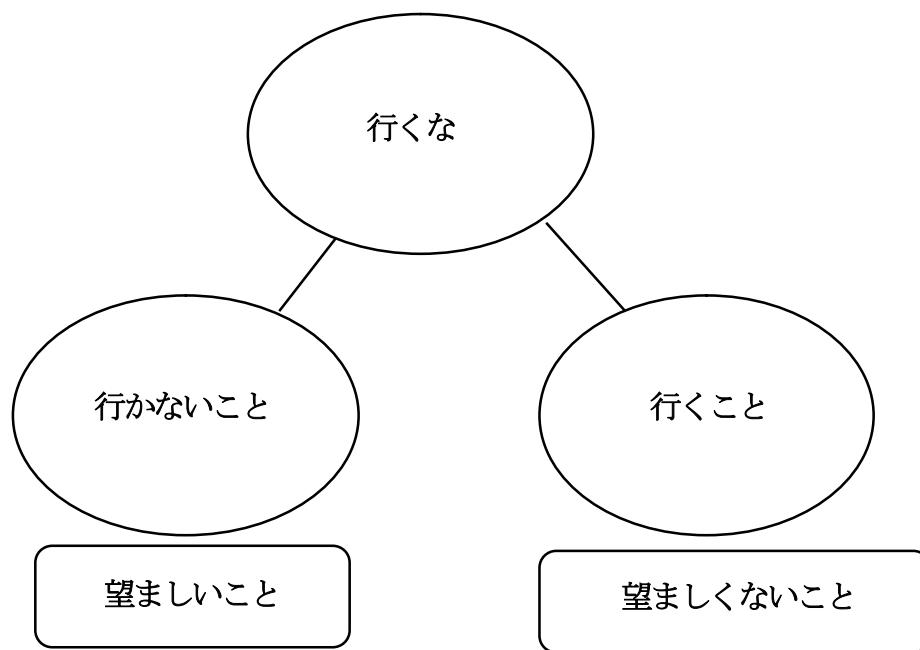


図3 禁止の望ましさ (尾崎 2008 : 68)

本研究ではこれらの先行研究で言う「待ち望み」や「望ましい」、「望ましくない」というとらえ方の価値付けを「望ましさ」と呼ぶことにする。

しかし、問題はこれだけではない。次に、禁止表現が実際使われる場面での語用論的な含意を含めた機能について考えてみよう。

山岡 (2000 : 92) は、禁止を命令の一種として見るのならば、「するな」は、否定形命令であり、(9) のように否定に対応する肯定形の命令が常に存在するはずである。このように、否定命令に対応する肯定の命令文があることは多いが、山岡 (2000) は、次のように、否定と肯定の意味と機能が必ずしも対応しているわけではなく、(10~12) のように、否定形に対応する肯定形がない場合があることを指摘している。

- (9) a. 走るな。
b. 走れ。
- (10) a. おい、心配するな。
b. * おい、心配しろ。
- (11) a. くよくよするな。
b. * くよくよしろ。

- (12) a. 勝手なことをするな。
b. * 勝手なことをしろ。

(以上、山岡 2000 : 92)

確かに、これらの禁止文に対応する肯定の命令文は、以下のように、文脈によっては言える場合もあるが、禁止のように文脈に限らず言えるほどではない。これらの肯否が非対称になる(10~12)の「するな」形式は、いずれも動作の実行に対する禁止ではなく、「はげまし」や「不満」を表すものである。つまり、「するな」のほうが、肯定命令よりも使用場面や人間関係など様々な要素によって、「禁止(命令)」という行為要求機能を失いやすいのである。例えば、否定命令つまり禁止表現が行為を止めることができない場合、文の機能は当該事態を禁止する命令から、聞き手に対する、または聞き手の行為に対する評価(不満)に変化し、また、聞き手が行為を意志的にコントロールできない場合、あるいは聞き手がいけない場合は、行為に対する禁止ではなく、話し手の願望などに変化するのである。こうした語用論的意味について、詳しく分析することにしよう。

- (13) a. まず自分のことを心配しろ。(作例)
b. 見城社長が、『小さなことにくよくよしよ』と言っていました。
(見城徹、藤田晋『憂鬱でなければ、仕事じゃない』)
c. まずはその借金男を立て直してから勝手なことをしろ。(Yahoo!知恵袋)

これらの他の使い方として、使用場面や人間関係など様々な要素により、狭義の「禁止」行為要求機能を持たなくなるものが多々ある。例えば、以下のように、文末表現は「するな」の形式であるが、その直後のことば「大きな気持でやれ。勝負は時の運だ」という文脈から考えると、励まし、勇気づけの「激励」という発話機能を果たしている。

- (14) くよくよするな。大きな気持でやれ。勝負は時の運だ。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『青春の蹉跎』)

無生物主語に対する文、あるいは独り言などでは、話し手の「降らないこと」を望む「願望」を表している。

(15) (空を見上げて) 明日は降るなよ。

(尾崎 2007 : 74)

次の例でも、「文句」という後続する文脈からみて、この「するな」は、話し手の「不満表明」を表している。

(16) 「克平だけを特別扱いするなよ」とアルさんが文句をつけた。

(村上 1993 : 99)

お互い気軽に言い合っている場合、「冗談」の機能を果たすといってもよからう。

(17) (家族や親しい友達の間で笑いながら) 笑うな。

これらの「非禁止」の機能を持つ「するな」文は、実際の会話では、尾崎 (2007) によれば、「するな」形式の使用において、全体の 40% 以上という高い割合を占めている。また、本研究で考察したドラマの中でも、禁止とされるものでも、定型的なものが多い。本研究で考察した中では、それらは話し手の強い態度が含まれているものが多かった。ここで、ドラマから抽出した用例を少し取り上げて、山岡 (2008) のいう発話機能の観点から分析していく。

発話機能とは、コミュニケーションにおいて、発話によって話し手から聞き手に伝達された最終的な意味のうち、それが両者の対人関係上に果たした機能を抽出して名称を与えたものだと言える (山岡 2008 : 50)。つまり発話機能は話し手がある発話においてその発話が聞き手に対してある種の機能をする、その機能が発話機能である。

発話機能は、Searle (1969) によれば、話し手と聞き手の上下関係や、利益、会話の背景、社会的知識などが多く関係している。これらの要素は語用論的な条件である。山岡 (2006 : 2) は、語用論的条件は、実際の会話の参加者の人数に関係なく、話し手からだけではなく、聞き手も共有していることが前提となるという。

この観点にしたがって、まず、「不満」「否定の評価」として使われる例を以下に挙げて、その語用論的な要素や条件を考察する。次の例では、話し手は聞き手の能力に対して、「不満」「否定の評価」を持っている。

(18) 当麻 : 大丈夫です。どんな手を使っても、望ちゃんは私が守ります。

瀬文 : 敵をナメるな！お前一人で何ができるんだ。やるからには、俺が守る。

(ドラマ『スペック』)

この例の話し手と聞き手は同僚であり、仲間である。「私が守ります」に対して、瀬文は、聞き手の当麻の一人ではできないと判断し、「俺が守る」と聞き手の申し出を却下している。

「敵をナメるな！」という禁止表現は、「制止的禁止」であると同時に、聞き手に対する「忠告」「苦言」「説教」でもあり、かつ相手の能力に対する不信も表している。つまり、否定の評価という発話機能もあると捉えるべきであろう。その意味は、後続する文脈の「お前一人で何ができるんだ。」からも、明らかである。

このような「話し手の不満の態度の表明」は、調査した中では、用例数が最も多かった。

(19) 当麻：「信じなくていいっすよ、殺されかけても知らねえから」

吉川：「マル暴ナメンなよ」（声を上げる）

(ドラマ『スペック』)

吉川は組織犯罪対策部（マル暴）から新しく未詳解決係に配属された刑事で、超能力など科学的に説明のつかない事件の経緯を信じていない人物であり、当麻はそれに対して少し不満を感じているという状況である。当麻の「殺されても知らない」という言葉に、吉川は「マル暴ナメンなよ」と返しているのは、自分のことを「簡単に殺される人間だ」と思われていることに対する「不満の態度」と見ることができる。

(20) 野々村：係長、久遠望を保護する究極の保護施設の場所を教えてもらいたい。

市 柳：何のことだい。

野々村：君たちは、デットエンドって呼んでるようだがね。

市 柳：ヒットエンドラーン。

野々村：（銃を持って）デカ魂をちゃかすな。

(ドラマ『スペック』)

野々村は元係長で、市柳は後任の係長である。市柳は野々村のやることをいつも裏から邪魔しているが、野々村はそれに気付いている。そのため、市柳が真面目に答えてくれないことに対して、望ましくない行為を聞き手が実現したことに対する「不満」を表している。このこと

は、銃を向けるという話し手の動作からもわかる。

(21) 大工：てか携帯返せ！

吉川：携帯電話でここの隠れ場所が特定されるんで。

大工：ふざけるな（本を投げる）！ こっちは仕事に戻らなくちゃいけないの。クビになっちゃうの。こんなところで黒いヤツの似顔絵描いてる場合じゃないの！ 女房と子供食わせなきゃならねえんだよ！（首をつかむ）

吉川：マル暴ナメんな。（首をつかむ）

大工：暴力的市民ナメんなコラ！（顔を叩く）

（ドラマ『スペック』）

この例は、刑事の吉川が犯人の顔を見た大工を確保した場面である。ここでの「するな」形式は、お互いに対立し合う二人の喧嘩で使われている。「ふざけるな」は、聞き手が帰してくれないことに対する「不満」であり、「マル暴ナメんな」は、聞き手が帰りたがることに対する「不満」の表明である。さらに、「暴力的市民ナメんな」という言葉は、後続する「コラ！」とともに、聞き手が自分の首をつかむことと帰してくれないことに対する「強い不満」である。

これらの例のように、「するな」形式の禁止は、「なめるな」「ふざけるな」「ちやかすな」などマイナスの印象の語と共起しやすく、しばしば話し手の不満な態度の表明として使われる。高梨（2007：38）は、行為を発動させる・発動させないという指令は、それ自体が評価ではないものの、必ずその行為に対する、望ましい・望ましくないという評価を前提にしたものであるという。つまりこれらの文には、評価が前提として潜在しており、それが「不満」という含意を導くのである。用例を収集した 100 分間のドラマにおいて現れた 12 回の「するな」形式の中で、「不満の表明」として使われたものは 9 回と、非常に大きな割合を占めている。本研究で集めたデータにおいて否定的「評価」という機能が一番多かったことから、現代日本語において、「するな」形式の主たる用法は、「禁止」ではなく「否定的な評価」と言える。

この発話機能については、すでに多くの先行研究でも指摘されている。例えば、高梨（2007：38）は、命令形禁止形は、未実現の行為ではなく、すでに実現したこと実現しなかったことがわかっている行為について、「不満」というある種の評価を表す場合もあるとしている。また尾崎（2007：71）は、否定命令文は未来や現在の行為が過去になることによって「命令」から「非命令」の文となるとしている。

また、尾崎（2007）は、「話し手が（命令文の発話時において）聞き手の行為の実行に向けて適用する指令的効力の度合いが低い場合、禁止表現では言えるが肯定命令文では言えない」ケースが多いことを指摘し、さらにこの場合、「行為の要請」として解釈されず、叙述文的な機能「評価」、「願望」、「助言」として解釈されると述べている。

さて、これまで「禁止」には「予防的禁止」と「制止的禁止」の二つがあり、語用論的機能には「否定的評価・不満」、「願望」、「助言」などがあることを見てきた。語用論的機能は文脈による含意であるが、「予防的禁止」「制止的禁止」という二用法と無関係ではない。

「否定的評価・不満」の例は全て実行済みの行為に対する「否定的評価・不満」であるから、「制止的禁止」の延長線上にあることは明らかである。同様に「願望」「助言」は未実現の行為に対するものであるから、「予防的禁止」用法に基づく含意である。したがって、(8)の「禁止の成立条件」が妥当であることが確認された。

3.1.2 「しないで」との比較

「禁止」の「するな」形式の頻度が低いことは上で述べた。そのかわりに、依頼形式の「しないでくれ」あるいは「しないでください」から生じた「しないで」がよく用いられる。本節ではこの「しないで」と「するな」との違いを見ていく。

3.1.2.1 語用論的機能

「しないで」は禁止として、「するな」よりも広く使われる。この形式は依頼表現「してくれ」「しないでください」の「くれ」「ください」が脱落したもので、依頼表現として江戸期の人情本からみられ、大正期になると「～してよ」など終助詞もつくようになり、依頼表現として定着した（工藤 1979）。「しないで」形式には、以下のような用例がある。

- (22) 「お願いだから来ないで。あなたが客席にいたら緊張しちゃうわ」

（現代日本語書き言葉均衡コーパス『あなたしか愛せない』）

- (23) 「ここで待っているんだ。動かないで。これを持って。」

（現代日本語書き言葉均衡コーパス『ジールス国脱出記』）

- (24) 西尾愛「パパ、チーズ取って」

竜太郎「(あたりを見回して) 人前でパパと呼ぶなよ」

（尾崎 2007 : 69）

では、なぜ「するな」形式に代わって「しないで」形式が用いられるのであろうか。それは「するな」形式が FTA に対する緩和のない、直接発話行為だからである。小野（2010）は、「するな」形式についてこう述べている。「止まれ」「泳ぐな」「登るな」「ゴミを捨てるな」のような表現を直接言われると、聞き手にかなりの不快感をもたらす。こうした命令は、上位者と下位者の関係が読み取れるものではあるが、話し手が積極的に発話する生産性のあるものではない（小野 2010：86）。小野は、例えば、(25) のような言い方を、車内に乗り合わせた人に対しては使いにくいと述べている。

(25) 電車の中で携帯を使うな。

（小野 2010：86）

このような言い方は、聞き手に不快な思いをさせる危険があるので、実際の会話ではあまり使われない。特に相手の行為が実現済みの場合、「制止的禁止」になることから、「否定的な評価」「不満の表明」という語用論的機能が含意として生じやすい。したがって、「するな」形式の代用として、FTA を緩和した、ポライトな表現「しないで」が用いられることになる。

「しないで」形式が「するな」形式よりも丁寧な言い方であるのは、これが依頼表現だからである。依頼である以上、聞き手に実行するかどうかの選択権を与えられている。これが FTA に対する緩和として機能するのである。これに対して「するな」形式は Brown & Levinson (1987) のいう *bald on-record* であり、相手のフェイスに配慮する必要性が低い場合にしか用いられない。たとえば、緊急事態であったり、こどもや目下の相手、親しい友人の間であったりすれば用いられやすい。それ以外の状況や話し手と聞き手の人間関係においては、「しないで」の方が男女共に日常的に多く使われる。

しかし、「しないで」が依頼であって、聞き手に選択権を与えているという意味では、「するな」のような禁止よりも、行為をやめさせる機能を十分に果たせない可能性がある。

Searle (1969:66) によれば、命令文の方が依頼文よりも当該行為を要求する権利を持っている。また、王 (2005) はこの選択権には、強制力や聞き手の当該命令に従う義務があるがどうか関わっていると述べている。

もちろん、実際の使用場面において、「しないで」と言われて断れるかどうかは別問題である。また、丁寧だからといって、下位の話し手から上位の聞き手に常に使えるわけではない。話し手と聞き手の力関係には、論理的には以下の三通りある。不等号は開いている方が力が強いことを示し、等号は力関係が同じであることを示している。

(26) 話し手と聞き手の力関係

- a. 話し手>聞き手
- b. 話し手=聞き手
- c. 話し手<聞き手

(26a) のパターンには次のような例が見つかった。(27a) は上司から部下への発話、(27b) は母親から子供に対する発話である。(27c) では、拳銃という強力な武器を持つ少女の発話である。

- (27) a. 口答えしないで。これはなに？ピッチャーがこんなに汚れていたらお客様が水を飲む気になると思う？ (現代日本語書き言葉均衡コーパス『ホテリアー』)
- b. 私も最近は、「もうこういう遊び方はしないで！」と怒るようになってきました。
(現代日本語書き言葉均衡コーパス『Yahoo!知恵袋』)
- c. 「動かないで！」 少女が、ヒステリックな声を上げた。拳銃を片山に向けて、「この人を撃つわよ！ 動かないで！」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『三毛猫ホームズの歌劇場』)

(26b) のパターンは最も多く見つかったが、大半は「気にしないで」「心配しないで」などの定型パターンであった。

(26c) のパターンは、実際にはほとんど見当たらない。実際に目下から目上に依頼する際には、「～しないで」ではなく、「～しないでください」などが用いられる。「～しないで」だけでは、親しみは込められるが、目上に対しては距離が近すぎるように感じられるためである。Brown & Levinson (1987) の用語にしたがえば、「～しないで」は相手との仲間意識を表すポジティブ・ポライトネス・ストラテジーであり、それにネガティブ・ポライトネス・ストラテジーである敬語で相手との距離をとる「ください」が付け加わることで、よりポライトになる。目下から目上への依頼には、この程度の丁寧さが必要なのであろう。

「～しないで」は相手との仲間意識を表すポジティブ・ポライトネス・ストラテジーであるということについては、「するな」形式と違って、終助詞「ね」との共起が可能であることから分かる。「ね」との共起については、下記で詳しく述べる。

3.1.2.2 「ね」との共起

「ね」についての先行研究には神尾（1990）と北野（1993）がある。神尾（1990：65）によれば、発話に「ね」をつけることは、仲間意識または連帯感を表現して、発話に丁寧さを加える働きを持つ。また、北野（1993：76-77）は、「ね」は、話し手が自分の一方的な断定を避け、聞き手との不確定な知識を持つという同一の認知状態を求め、聞き手との認識に対する距離を縮めようとする意図がある表現であるとしている。

「ね」と命令文との関係について、王（2005：194）は、「ね」は語用論的なマーカーであり、「ね」を伴う発話は聞き手の存在が必要条件となり、聞き手がない時には「ね」を使う発話はゆるされないとしている。そのため、「ね」の基本的な機能を王（2005）は以下のように規定している。

(28) 「ね」は話し手と聞き手の共感（empathy）の場を持つことを意味する。

（王 2005：192）

ここでの共感というのは、以下のような二つの要因が含まれているとされている。

- (29) a. 情報の共有に関する話し手と聞き手の認知状態であること
b. 対人機能を表す共感の場であること

（王 2005：194）

王（2005）は、まず（29a）は、話し手と聞き手の認知状態を表すものであり、ある話題に対して、話し手と聞き手が情報を持つ状態、情報を把握する状態を指すものであるという。ここでいう情報の持つ状態は次の四つのタイプに分けられている。

(30) 話し手と聞き手の認知状態の四つのタイプ

- i 話し手が情報を持っていて、聞き手を持っていない
- ii 聞き手が情報を持っていて、話し手を持っていない
- iii 話し手と聞き手がともに情報を持っている
- iv 話し手と聞き手がともに情報を持っていない

（王 2005：194）

さらに、王（2005）は、この中で、「ね」が使えるのは、(30iii) と (30iv) の場合であると指摘している。「するな」のような禁止は基本的に一方的の発話行為なので、(30i) に属するものであると考えられ、「ね」を使う義務はほとんどない。実際 (31) のように、「するな」の文にねをつけると、不自然な文になる。

(31) *走るなね。

つまり、このように、禁止表現は一方的に行為をしないよう働きかけるもので、この働きかけは、聞き手の知識や意思を考慮せず、聞き手に選択権を与えない。そのため、(29b) でいう共感の場をもつこともなく、「ね」との共起が不可能である。

それに対して、「しないで」形式は「ね」と共起できる禁止表現である。「しないでね」という形式には念押しのような、あるいは、一方的な強制を避けるような意味合いが取れる。これは「ね」が持つ「共感」の力によるものである。相手との共感を示すことは重要なポジティブ・ポライトネス・ストラテジーのひとつであり、丁寧に行為をしないよう働きかけているのである。そのため以下のように、「おねがいだから」との共起も可能である。

(32) おねがいだから、大きなケンカはしないでね。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス、『Yahoo!ブログ』)

以上、「ね」との共起からも、「しないで」は、「するな」形式よりも、聞き手のポジティブ・フェイスに対する配慮が大きいことがわかる。

「するな」と「しないで」の違いを簡単に整理すると次の通りになる。ここでは、 $S < H$ は話し手のほうが聞き手よりも下位であることを、 $S > H$ は話し手のほうが上位であることを、そして $S = H$ は話し手と聞き手が同じ地位であることを示している。

	聞き手の選択権	話し手と聞き手の地位
するな	なし	$S > H$, $S = H$
しないで	あり	$S > H$, $S = H$

表1 「するな」と「しないで」の違い

「するな」形式も、「しないで」形式も、いずれも目上に対しては使いにくい表現であるが、「しないで」には、聞き手に選択権を与えている点で、「するな」のような一方的押し付けの感じがしない。この両形式の大きな違いである。したがって、「しないで」形式は、本研究で扱う他の形式とは異なり、やはり依頼文として扱うべきだと思われる。そのため、本研究ではこれ以上深く分析しないことにして、稿を改めて議論したい。

3.1.3 まとめ

この節では、禁止の典型的な形式の使用実態を考察した。「するな」形式は本来的な禁止の形式であるが、この意味に発話時の話し手の当該行為に対する「否定的な評価」が含まれやすいため、現代日本語では、しばしば「不満の表明」の意味や、話し手の否定的な評価として使われる。その比率は、話し言葉において非常に高いことが分かった。この点については2.2節の「してはいけない」形式との対照の中で考察する。

3.2 「してはいけない」

「してはいけない」の意味をみるには、それに対応する肯定形式と比較をしながら進めるべきであるが、「してはいく」「してもいく」などの表現が存在しないため、この節では便宜的に「してもいい」との比較を行う。「してもいい」に関しては先行研究がすでにその意味の多様性についてまとめているのでそのレビューから始めよう。

3.2.1 「してもいい」との比較

「してもいい」形式は田中（2004：193）によると、「許容」の意味を表すが、状況によっては他の意味が生じる。田中（2004）は、まず、「少しくらいは」という話し手の控え目な主張や希望が込められた意味として、「もっと～たらどうか」という提案の意味で用いられるとして、以下のような例を挙げている。

- (33) 自分たちの力で用地の利用方法を考え、いい自然環境を造るという想像的な運動があってもいい。
- (34) NHKのニュースが必ずしも評判がよくないのは無機的な感じがするからだ。もっと私見私論を語ってもいいじゃないか。

(35) 子供用のラベンダがあってもいいじゃないか。

(以上、田中 2004 : 193)

田中 (2004) は、さらに、次のような、「～したい」という希望、賛同の気持ちを間接的に表す例を挙げている。

(36) われわれの素朴な『陳情』にともかく耳を貸した、あるいは貸すふりをした相手の雅量をほめてやってもよい。

(田中 2004 : 194)

田中 (2004) は、以下のように条件を提示しつつ、許可を与えた勧めが伝達され、さらに、その「許可」認識はしばしば「可能」の認識と重なるとして、以下の例を挙げている。

- (37) a. 旅行に行くときはこのカメラを持って行ってもいいです。
b. 試験が終わった人は教室から出て行ってもいいです。
c. そんなにやめたかったら、やめてもいいんですよ。

(田中 2004 : 194)

田中 (2004) は、これらの「してもいい」形式は、「一般的状況判断が「許可」、個別的（意志的）判断が「可能」の意味」を示すとして、これらは「してはいけない」形式よりも多義性を持っているとしている。また「ても」の後に、「いい」以外にも、否定的な意志が来る場合も多いとして、(38-39) のような例を挙げている。

(38) 手鍋下げても、あんな人の世話になるものか。

(田中 2004 : 197)

(39) 逆立ちしてもあいつには勝てない。

(田中 2004 : 197)

このように、「しても」形式に対して、「ては」には、「自体の不可避的、不可抗力的な発生をもっている」と田中 (2004) は言っている。また、「ては」の叙事的な傾向として、望ましくない結果を伴うことを表す慣用的な断定表現をまとめている。以下の (40) はその「ては」に後続する定型化した語句である。

- (40) 先が思いやられる、迷惑だ、迷惑千万だ、かなわない、どうしようもない、何にもならない、しめしがつかない、たまったものではない、たまらない、男がすたる、先行き不安だ、いかんともしがたい、おぼつかない、世も末だ、うかばれない、助かるものも助からない、手遅れだ、遅すぎる、救いがない、先が知れている、聞いてあきれる、救われない、人間もおしまいだ、損だ、取り返しがつかない、きりが無い、大変だ、可哀想だ、プライドにかかわる、まずい、元も子もない、身もふたもない、開いた口がふさがらない、立つ瀬がない、形無しだ、すまない、すまされない、ゆるせない、角がたつ、本末転倒だ、にっちもさっちもいかない、...
- (田中 2004 : 161)

田中(2004)は、さらに、以下のような補文をうける慣用的な述語表現についてもまとめている。これらにみられる特徴は、いずれも「否定すべき事態」「禁止すべき事態」であり、ある種の「上位をまじえた批判的な指摘」「評価の態度である」という。これには、「ては」という形式に見られる主観的な主張というものが働いているためで、「ても」と大きく異なるところであるとしている。つまり、「てはいけない」のほうが、対応する評価モダリティの「てもいい」形式よりも主観性の度合いが大きく、行為の要求として定着度が高いということである。

- (41) ~のももっともだ、のもうなずける、のも仕方がない、のも無理もない、~のもわからないわけではない、~のは必至だ、~に決まっている、~のようなものだ、...
- (田中 2004 : 161)

この違いは、この両形式の使用頻度から見てもわかる。現代日本語書き言葉均衡コーパスで検索した頻度から見てみると、「してはいけない」は 922 例あった。また、その縮約形「しちゃいけない」は 342 例であった。それに対して、肯定形式「してもいい」は 581 例であり、否定形式の全体の半分にも及ばない。これは、田中(2004)が言っている「てもいい」の多義性や「ては」の主観性が関係していると考えられる。

先に「してはいけない」には対応する肯定形「してはいく」「してもいく」がないと述べた。さらに行為要求の表現としては、「してはいけない」のほうが「してもいい」よりはるかに多く使われるという。肯定形式がないこと、そして頻度が多いことは文法化が進んでいることを示唆する。文法化していれば、本来の意味から離れても当然である。以下では、「してはいけない」の具体的な用法を詳しく分析していきたい。

3.2.2 「してはいけない」の意味

「してはいけない」形式を話し手の主観的な評価とする研究と、禁止とみる研究がある。

そこで、本研究では「してはいけない」形式を分析する際に、話し手と聞き手の上下関係を分けて考えてみた。結果は以下の通りである。話し手が上位にある場合、「してはいけない」は「するな」と使用条件が同じであり、禁止される事態の実行における望ましさは話し手個人の判断によるものとして使うことができる。しかし、この対人関係による「してはいけない」形式の禁止表現は少ない。さらに、話し手が上位の場合でも、一般的には社会的な共通の認識としての「望ましさ」が考えられる場合が少なくない。

その一方で、話し手が上位でない場合、「してはいけない」による禁止は、話し手個人ではなく、社会的規則、つまり社会的な望ましさが必要とされる。この評価的な意味が社会的望ましさによるものとして、先行する文脈に情報が加えられることにならなければ禁止の意味としては不自然である。例えば、以下の例では、話し手が上位になく、話し手個人の希望に基づいているため、「してはいけない」による禁止は不自然である。

(42) # (恋人に対して) 僕を捨ててはいけない。

では、話し手が上位にある場合はどうであろうか。このとき、「するな」と同様、理由を述べずに、話し手個人の判断で、聞き手に何かをしないように働きかけることができる。

(43) (母が子に) お父さんの邪魔をしてはいけません。

(44) 「そんなところに行ってはいけない！それは呪われた日だ！君たちの旅はここでやめるべきだろう。本がそんなところに君たちを連れて行くな...。絶対にこの旅には出ない方がいい」
(現代日本語書き言葉均衡コーパス『永遠の旅のはじまり』)

「してはいけない」形式で禁止をすることは、話し手が聞き手よりも上位であれば、話し手の個人的な望ましさだけでできるが、話し手が上位でない場合、客観的に望ましくないことを文脈で提示することによって、何かをしないように働きかけなければならない。この違いは、以下で詳しく分析するが、その前に、禁止の命題の前提をみていく必要がある。

3.2.2 禁止の成立条件

先行研究でも指摘のあったように、「否定は肯定を基盤としてその上に立ってはじめてつくられ得る概念」(濱田 1948 : 44) である。否定は肯定があつての否定であり、その肯定が想定されることが必要となるのである。つまり、命令文においても、さきに行為や事態の肯定があつてそれを否定命令文によって禁止を要求するのである。

さて、上で命令と禁止の成立条件について次のように規定した。

(1') 命令成立条件 :

- a. 聞き手が行為を実行するよう、話し手が企てる。
- b. 話し手が行為の課し手である。聞き手に拒否の選択権を与えない。
- c. その行為が聞き手のこれから先の一連の行為である。
- d. 話し手が聞き手にその行為が実現して欲しいと願ったり、望んだりする。

(8) 禁止の成立条件 :

- a. 聞き手が行為を実行しない(一行為)よう、話し手が企てる。
- b. 話し手が一行為の課し手である。聞き手に拒否の選択権を与えない。
- c1. (予防的禁止) 一行為は聞き手がまだ実行していない。
- c2. (制止的禁止) 一行為は聞き手がすでに実行している。
- d. 話し手が聞き手にその一行為が実現して欲しいと願ったり、望んだりする。

命令文の成立条件の中には、「聞き手が実現する事態」があり、これは話し手にとって「都合のよい、望ましい、好ましいものである」という条件である。仁田(1991)は、この「実現を望ましく思う」という話し手の事態のとらえ方を「待ち望み」と呼び、この「待ち望み」は「働きかけ」の文に潜在的に備わっているものとしている。本研究ではこれらの先行研究で言う「待ち望み」や「望ましい」、「望ましくない」というとらえ方の価値付けを「望ましき」と呼ぶ。

「望ましい」かどうかは「評価」で、「望ましいことを待ち望む」ことが「命令・禁止」であるとする、「評価」の表現が働きかけの表現となっても、それほど不思議ではない。下記で事態評価のモダリティと命令・禁止の関係について、詳しく検討する。

3.2.3 望ましき

上記で定義した望ましきを禁止表現において考えるに、まず、仁田（1991）による命令文全般の運用論的な条件を見ていきたい。

仁田（1991）は、命令文全般について考察し、「典型的で適切な」命令文が成立するための「運用論的な条件」を次のように整理している。

(45) 命令文の運用的な条件

- i) 話し手は、聞き手が事態を実現することを望んでおり、聞き手が実現する事態は話し手にとって都合のよい、望ましい、好ましいものである。
- ii) 聞き手は自分の意志でその事態を遂行する能力を持っている。
- iii) 命令されている事態は、いまだ実現されていない事態である。

（仁田 1991 : 239）

本研究は条件 i) の望ましきについて、2.2.1 節で定義した望ましきを導入し、さらに望ましきの規範について詳しく分けていく。

まず、高梨（2007 : 14）は評価のモダリティ形式による行為要求の特徴を、「評価のモダリティ形式のうち「ざるを得ない」など一部の例外を除いたものは、評価の対象となる事態が下記条件を満たす場合、行為要求の機能を帯びる」とまとめている。

(46) 行為要求の機能を帯びる条件

- ①聞き手の行為
- ②制御可能な行為
- ③未実現の行為

（高梨 2007 : 35）

高梨（2002 : 82）と日本語記述文法研究会（2003 : 91-92）によれば、事態評価のモダリティを表す表現は次の3つのグループに分けられる。

(47) 事態評価のモダリティを表す表現

- ①評価的複合形式 : 「といい」「ばいい」「たらいい」、「ほうがいい」、「てもいい」、「なく

てもいい」、「てはいけない」（「てはならない」）、「なくてはいいけない」（「なくてはならない」）「なければならぬ」「なければいいけない」「ないといけない」)

②助動詞：「べきだ」、「ものだ」、「ことだ」

③その他の複合形式：「ざるを得ない」、「ないわけにはいかない」、「しかない」、「必要がある」、「必要がない」、「までもない」、「こともない」 etc.

(高梨 2002: 82)

高梨 (2002) はこの三つのグループの違いは主観性と客観性の違いで区別している。事態評価のモダリティにおける主観性と客観性の対立に関しては、「てもいい」「なくてはいい」「てはいけない」「なくてはいいけない」の「話し手の発話時の評価という純粋な主観」を表す場合と、「客観的必要性・許容性」を表す場合に区別している。例えば、高梨 (2002: 92) は、以下の例文 (48) の「てはいけない」は「僕みたいな平凡な男がこんなことをしている」ことに對する話し手自身の発話時の評価を表しているが、例文 (49) の「てはいけない」は「寮の中で酒を飲む」ことが「規則」で禁じられていることを表しているとしている。

(48) 「僕みたいな平凡な男が、こんなことをしていちゃいけないと思う。(略)」

(高梨 2002: 92)

(49) 「だって、りょ、寮の中で酒飲んじゃいけないのって、き、き、規則だろう」

(同上)

この主観性と客観性についてはまた、二つの見解がある。益岡 (1991) は「表現者の表現時での判断・表現態度」を主観性としている。これに對して、高梨 (2002) の「主観性」は、「話し手の発話時の評価」である。この二つの「主観性」はほぼ同じものである。しかし、「客観性」については、益岡 (1991) は、「表現時以外の時点での判断・表現態度」として、高梨 (2002) は、「客観的必要性・許容性」としている。つまり、益岡 (1991) は、「客観性」はモダリティ表現が「発話時以外の時点」での評価を表すことを意味しているという。これに對して、高梨 (2002) は、「客観性」はモダリティ表現が客観的な規範を表すことであると主張している。つまり、益岡 (1991) は発話時であるかどうかという側面から「主観性・客観性」を分け、高梨 (2002) は評価の内容に對する評価が話し手であるかどうかという側面から分けている。本研究では、高梨 (2002) の考えを基準にして、禁止表現における「主観性・客観性」を分析す

る。この「主観性・客観性」の観点の導入によって、「してはいけない」形式と「するな」形式の違いの説明ができる。つまり、2.2.1 節で定義した「望ましさ」に関して、主観的な望ましさと客観的な望ましさというものを分けて考えることによって (50) では言えるが (51) では不自然な文になることの説明ができる。

- (50) a. 俺に命令するな！ 俺のやることは俺が決める！
b. 学校じゃボタンをはずしちゃいけないよ。締めなさい。
- (51) a. ?俺に命令してはいけない！俺のやることは俺が決める！
b. ? (同級生に) 学校じゃボタンをはずすなよ。締めなさい。

本研究では、「するな」「してはいけない」の両形式の禁止ともに、聞き手の実行する行為に対する評価というものがあることに着目する。そして、前節で定義した「望ましさ」を、主観的なものと客観的なものの二つに分類し、この評価に関する望ましさの規範から両形式の違いを記述する。

3.2.4 高梨 (2002) の事態評価に対する主観性と客観性の規範

高梨 (2002 : 94) は、話し手が行為の実行や状態の実現が望ましいかどうかを評価する基準として、評価が存在する規範を二つに分けている。一つは、事態評価において、話し手が自らの規範、つまりその規範の持ち主としているものである。これを高梨 (2002) は「主観的必要性・許容性」と呼ぶ。一方、話し手ではなく、「客観世界の秩序、しくみ、事情などのあり方として、ある事態が必要・不必要である、また許容される・許容されないということ」を描写する (高梨 2002 : 94) 事態評価もあるとしている。例えば、以下の例文 (52) ~ (54) の場合であれば、話し手自らが評価の規範の持ち主であり、行為の実行や状態の実現に関して話し手が評価を下している。高梨 (2002) は、多くの場合の事態評価のモダリティは (54) のような場合であり、主観性・客観性の観点から見れば、これらは主観的であるという。

- (52) 新聞記者という者は、一生に一度大きいスクープをすればいい。それだけで大記者だ。
- (53) 「とにかくここで、金を使うことが私の義務なんだ」と考えつづけた。「とにかくここで授業料を使い果せばいい。そうすれば老師に、尤も至極な放逐の口実を与えることになるからだ。」

- (54) 遠くへ行くためには、多くの弱点を克服し、さらに厳しくなるだろう状況に耐えなくてはならない。内藤にそれができるかどうか、私にはまだ確信が持てなかった。

(以上、高梨 2002 : 94)

これに対して、規範やルールなどによる評価である場合は、その事態評価の規範の持ち主は話し手ではなく、別に存在している。この話し手以外の誰かの規範によって、評価を下す場合も事態評価のモダリティに属する。(55) のような例文では、「飲んではいけない」という評価は、話し手が下しているのではなく、寮の規範から下しており、客観的な事態評価のモダリティの例である。

- (55) 「だって、りょ、寮の中で酒飲んじゃいけないのって、き、き、規則だろう」(= (49))

(高梨 2002 : 92)

高梨 (2002) はこのような客観的な事態評価のモダリティを、さらに二つに分けている。一つは、話し手もその規範を認めているタイプで、もう一つは、話し手が必ずしもその規範を認めているわけではないタイプである。上記の (55) と次の例文 (56) は前者のタイプに属するもので、その次の例文 (57) と (58) は規則を認めていないまたは規則をそのまま伝えている可能性が高く、後者のタイプに属する。

- (56) モルヒネの精製にはアルコールを大量に必要とする。また結晶化の工程では冷却を加えなければならない。それなのに台湾の気温は高く、アルコールは蒸発してロスが多く、冷却のための動力はむやみとかさむのだった。

(高梨 2002: 92)

- (57) A 「ここでお酒を飲んでもいいですか？」

B 「規則では、飲んではいけません。でも、今はいいですよ」

(高梨 2002: 93)

- (58) しかも我々の行動に関しても規制が多い。国境から 5 キロ以内の風景の写真撮影は禁止。兵隊と警官を写してはいけない、民衆、とりわけ貧しい身なりの人を写してはいけない等々……。

(高梨 2002: 112)

高梨 (2002) の事態評価のモダリティの分類の観点は、次の表にまとめることができる。

	主観的な事態評価の モダリティ	客観的な事態評価のモダリティ	
		タイプ 1	タイプ 2
規範の持ち主	話し手	話し手以外	話し手以外
規範を認めるか否か	認める	認める	必ずしも認めない
規範の傾向性	個人的な考え・ 好悪・意向	社会的な道德・法・慣習や 自然界に関する法則	

表 2 主観的な事態評価のモダリティと客観的な事態評価のモダリティ（高梨 2002）

高梨（2002）は、これらの規範を、客観的な事態評価のモダリティにおける規範は「社会的な道德・法・慣習、自然界に関する法則、さらに個人的な考え・好悪・意向を含んだ、判断や行為の拠るべき基準」である可能性が高いのに対して、主観的な事態評価のモダリティにおける規範は「社会的な道德・法・慣習や自然界に関する法則」より、「個人的な考え・好悪・意向」である可能性が高いと述べている。これは、個人的な考え・好悪・意向は話し手の私的なものであるため、社会的な道德・法・慣習や自然界に関する法則は私的なものになりにくいからであるという。

3.2.5 禁止表現における望ましさの規範

本研究は高梨（2002）で定義された規範を禁止表現の事態の実行に対する望ましさの規範に取り入れて、「してはいけない」形式を「するな」形式との比較によって分析する。さらに、高梨（2002）の規範の定義に従って、望ましさの規範を以下の（59）のように呼ぶことにする。客観的な事態の評価のモダリティについては、高梨はさらに分類しているが、ここではこれ客観的な規範に認めているかいないかは触れずに、一つの客観的な事態のモダリティの規範としてみていくことにする。

（59） 望ましさの規範

①私的な規範：個人的な考え・好悪・意向

②社会的な規範：社会的な道德・法・慣習や自然界に関する法則

本研究では「するな」形式の禁止は聞き手が実現する事態は話し手個人的にとって望ましく

ないものに対して、「してはいけない」形式の禁止は、話し手が上位にある場合は「するな」形式と同じく、話し手個人的にとつての望ましくないものに対する禁止として使えるが、話し手が上位にない場合は、聞き手が実現する事態は話し手と聞き手のいる社会、集団など公的にとつて望ましくないものという区別があることを主張する。

例えば、以下の(60)では話し手のほうが明らかに上位にあって、「するな」形式によって相手の「出入り」を禁止している。つまり、この例文では話し手が禁止の事態評価の規範の持ち主であり、自ら望ましくないという評価を下し、禁止をしている。

(60) 「青井、言っておくがな、仕事以外のことで、俺の事務所に出入りするな。」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『小説現代』)

これとは対照的に、(61)では話し手は規範の持ち主ではなく、「走ってはいけない」という規範は交通ルールなどの公的な規範の持ち主によって下していることが考えられるので、事態の評価は公的な規範であり、禁止の望ましさは社会的な望ましさであるということが言える。

(61) 「それに自転車は標識がない限り、歩道を走ってはいけないのですよ。確信犯ですね。」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『Yahoo!知恵袋 2005』)

このように、私的望ましさと社会的望ましさに分けることによって、「するな」「してはいけない」形式による禁止表現の違いが分かる。さらに、「してはいけない」形式において、話し手の地位を上位にある場合と上位ではない場合に分けることによって、使用実態が明らかになるであろう。調査方法として、本研究では、「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」を利用して用例を収集した。「するな」「してはいけない」を検索語で集めた用例はそれぞれ264例と1264例あり、それらに先行研究などで観察された用例も加え、代表例を取りあげながら、「するな」形式と「してはいけない」形式の特徴を整理した。以下の節で、その分析について詳しく述べていきたい。

3.2.6 「してはいけない」形式の禁止

「してはいけない」形式の基本的意味は、高梨(2007:37)でいう評価のモダリティ形式の下位カテゴリーに属している。高梨は評価のモダリティの意味を「許容系」「不必要系」「必要

妥当系」「非許容系」の四つに分類した。「してはいけない」はこのうち＜非許容系＞に属する。

高梨は、これらの形式が、以下の三つの当該事態のファクターによって、様々に分化されるとしている。

(62) 事態のファクター

- ①制御可能性
- ②実現状態
- ③行為者の人称

(高梨 2007 : 37)

高梨は、評価のモダリティの形式は、この三つのファクターによって、以下の三つに分化するとしている。

(63) 評価のモダリティが分化しえる機能 (高梨 2007 : 37)

- a. 当該事態が制御可能な場合、＜当為判断＞を表す。
- b. ＜当為判断＞を表す場合、さらにその事態が未実現で、かつ行為者が聞き手であれば、働きかけとなる。
- c. 当該事態が非実現または既実現の場合、その事態が制御可能かどうかに関わらず、＜後悔＞＜不満＞の意味が生じる。

(高梨 2007 : 37)

例えば、「ばいばい」の基本的意味は「当該事態をある特定のよい結果を得るための必要十分な手だてとして評価する」(高梨 2002: 91) ことであり、二次的意味は次のように、分化する。

	①当該事態の制御可能性		
	制御可能→○＜当為判断＞		制御不可能→×＜当為判断＞
②当該事態 の実現状態	未 実 現	③行為者の人称 聞き手 →○働きかけ性→＜勧め＞ 聞き手以外→×働きかけ性	＜願望＞
	非 実 現	③行為者の人称 話し手 → ＜後悔＞ 話し手以外→ ＜不満＞	＜不満＞

表3 「ばいい」の二次的意味（高梨 2002: 91）

「してはいけない」形式についても、同様なことが言える。例えば、行為が未実現で制御可能な場合、以下のように、禁止の意味を持つ。

(64) 包丁立てに鈍く光る包丁、包丁。

千津子「やめなさい！いけないわっ」

実加の目が包丁を物色している。

千津子「実加。そんなことしちゃいけない！」

（高梨 2007:41）

このように、「してはいけない」形式は、評価の対象となる事態が「①聞き手の②制御可能な③未実現の行為」であるとき、行為要求の機能つまり禁止を表す。コーパスではその例として、以下のようなものがあった。

(65) 「証拠として生命の代償をあなたのために確保しておきたいの」

「そんな不吉なことを言うてはいけない。きみの生命の代償なんて、ぼくは欲しくないよ」
（現代日本語書き言葉均衡コーパス『マリッジ』）

これらの「してはいけない」形式による禁止にはもちろん行為の実行に対する事態の評価が存在し、その背後には事態評価の規範があり、規範の持ち主が存在する。3.2.4 節で定義した

規範をこれらの禁止表現に照らして、以下でそれぞれについて分けて考える。

3.2.6.1 禁止における私的望ましさ

3.2.1 節でも述べたように、否定命令文は対象となる行為が、話し手の予測として、あるいは現実のものとして、先にあった上で使用されるものである。尾崎（2007）は、(66) は発話の最中に実現している相手の行為を中断するように要求する「制止的な禁止」の文であるが、3.2.1 節で述べたように、この場合は話し手は相手の「行く」という行為を受けて「逃げるな」と禁止しているという。さらに、それと同時に「相手の行為＝逃げている」という解釈または推測も行っている。すなわち、対象となる行為がどのような行為であるかということに関する話し手の解釈や推測を文の中に必然的、明示的に含んでいる（尾崎 2007 : 73）。

(66) 楣夫「話にならん（と行く）」

雅人「逃げんなよ。（略）」

（尾崎 2007 : 73）

(67) 「相手が逃げている」という解釈・推測 → 「逃げるな」

（尾崎 2007 : 73）

禁止表現には、行為の実行に対する評価という「望ましさ」が存在するので、この場合、話し手は、「相手が逃げている」という行為に対し、自ら規範の持ち主として、この「行く」という事態に対し、「望ましくない」という評価を下していると考えられる。このことは、本研究でいう禁止表現における私的望ましさである。

3.2.6.2 禁止における社会的望ましさ

一般に、対話の話し手と聞き手の間には、お互い存在する背景の中において、「このように判断するのがふつうだ」という認識がある（今井 2001）。

禁止表現には前述のように、行為の実行に対しての「望ましさ」があり、その「望ましさ」の規範は 3.2.4 節で定義したように私的な規範と社会的な規範がある。社会的な規範は、文脈に具体的に現れなくても、話し手一個人ではなく、今井（2001）で述べるように、話し手と聞き手がいる共同社会における暗黙の認識というような規範もある。つまり、共同の背景や社会において、話し手の一個人にとって好ましい、好都合なものではなく、話し手と聞き手がい

る場面、背景において、それぞれがその社会の一員として認めているもの、こうした規範も本研究では、社会的な規範であり、その望ましさは社会的望ましさであると定義する。また、禁止表現において、例えば(65)のような例文の「不吉なこと」である場合は、社会の一員として、共通的に「言うてはいけないこと」であると思っているのであろう。そのため、この例文における禁止は、社会的望ましさからの禁止であるとみなす。

3.2.7 「してはいけない」形式の使用実態

ここでは、「するな」のデータと比較することで、「してはいけない」形式の特徴を明らかにする。「するな」形式について、その「否定の評価」、つまり「不満」の用法について、3.1 節で見たので、ここでは、その典型的な「禁止」としての用法を確認する。その用法を、「してはいけない」の用法と区別して、それぞれの使用実態を明らかにすることを目的とする。

3.2.7.1 「するな」

「するな」の例文は現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)において、264 例あった。そのうち、村上(1993: 67)の、「するな」の文にはすでに始まっている動作や状態の中断を求める「制止的な禁止」と、未来に行われる可能性のある動作を行わないよう要求する「予防的な禁止」の二つが存在する。この形式の用法には、(45)でも触れた仁田(1991)の「典型的で適切な」命令文が成立するための「運用論的な条件」のうち、i) の条件が大きく関わっている。

まず、「するな」形式は典型的な「禁止」だけでなく、使用される状況・文脈によっては、評価のモダリティ形式と共通する「否定の評価」「願望」といった機能を果たす場合がある。このことについては、3.1 節において、詳しく分析してきた。また、この「否定の評価」などの意味は、高梨(2007: 49)は、それ自体、話し手の評価を示すものではないとして、「評価」として文脈によって出された色合いであるとしている。その色合いが定着していることについては第4章で考察するので、ここではまず、その基本的意味と「禁止」としての用法について分析していきたい。

次に、高梨(2007: 49)は、禁止形は、「不満」というある種の評価を表す場合には、行為を発動させる発動させないという指令は、それ自体が評価ではないものの、必ずその行為に対する、望ましいか望ましくないという評価を前提にしたものである。いわば潜在している評価というものがあり、それが「不満」という用法を表に出しているのではないかと指摘している。

以下では、この「評価」があるということを前提としながら、「するな」形式の使用実態を見ていく。代表的な例文を（68-76）によって示す。

(68) 「よし、帰投せよ」

「帰るのですか」

「そうだ。ぐずぐずするな。燃料が切れるぞ」

「了解。」村田はレーダーに視線を落とした。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『犬笛』)

(69) 顔を赤くしたルザルを眺めて、ラシュワンはげっそりと言った。

「しかしまあ、勘違いするな。俺はあの娘のことを言っているんじゃない。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『赤い瞳のシェスタ』)

(70) また、ポーランド人は、伊達男がトイレへ行ったスキに、

「あいつを信用するな。あれは詐欺師だ」と私にささやくのである。

ハンガリー人とルーマニア人も仲が悪い。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『民主化の嵐のあとで』)

(71) レッドの声が、再び拡声器を通して鳴り響いた。

「地面に伏せろ。抵抗するな。従わないと撃つぞ。」

ダンカンは頭の後ろで両手を組み、ゆっくりと身をかがめた。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『メサイア』)

(72) 「わかりましたよ。言いますよ。あれから二人でアンジューの部屋に行きましたそれで終わり。」

「おいおい、重要なところを省略するな。お前も昔は週刊誌の編集者だったんだろ。そういう部分は、微に入り細を穿ち、きっちりと描写して欲しい。」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『怪人モリスばくち旅』)

(73) 「なんとなく、その」忠和の声はさらに小さくなった。

「見苦しい言いわけをするな。男なら、はっきりと、この恵美子が目的やと、白状したらどうや。」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『芸人横丁花舞台』)

(74) 浩紀は頬を引きつらせて、玲司を睨んだ。

「そういう顔をするな。綺麗な顔が台無しだぞ？」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『家政夫様には逆らえません』)

(75) 「こんなことはやめなさい。早くここから出ていくんだ。」

「ばかやろう。俺に指図をするな。」

「話せばわかる。落ち着くんだ。せっかく平穏に暮らしていたんじゃないか」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『沈黙者』)

(76) 「うわっ、逃げられる」

小沢が離れようとするのを、襟首掴んで引き寄せた。

「うろちょろするな。見つかるやろ」矢野を乗せたタクシーは私たちの眼前を走り抜けた。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『絵が殺した』)

話し手自身が根拠に基づいて想像や思考を通して命題を創造するという心的過程を経ることを主観的とする観点から、例文(68-76)を考えてみよう。

例文(68-76)は主観的な望ましさからの禁止のモダリティと解釈することができる。つまり、話し手が既得の命題を話し手の主観的観点に基づいて「望ましくないこと」として、禁止すると解釈できる。前後の文脈に「俺」、「おりゃ」という話し手個人を表す語が付くことがあることからわかる。これらの例を下記の表でまとめる。

例文	聞き手による行為	望ましさの規範	規範の傾向性
(68)	くずくずする	話し手	個人的な考え
(69)	勘違いする	話し手	個人的な都合
(70)	信用する	話し手	個人的な都合
(71)	抵抗する	話し手	個人的な意向
(72)	省略する	話し手	個人的な都合
(73)	言いわけをする	話し手	個人的な考え
(74)	そういう顔(睨む)をする	話し手	個人的な意向
(75)	指図をする	話し手	個人的な意向
(76)	うろちょろする	話し手	個人的な都合

表4 私的望ましさの禁止

3.1 節で、話し手は聞き手が行っている行為またはこれから行う行為があることが禁止の前提であると述べた。この行為に対して、話し手は「望ましくない」と判断し、行為を行わないように働きかけるのが禁止である。この「望ましさ」を判断する基準に、社会的な道德・法・慣習、自然界に関する法則、さらに個人的な考え・好悪・意向を含んだ判断の基準があることは、繰り返し見てきた。「してはいけない」形式と比べるために、これらの例文の「規範」と「望ましさ」が誰のものなのかに関して考える必要がある。

規範の持ち主は上記の表からわかるように、いずれも話し手である、これらの行為の実行に対して「望ましくない」と思うのは話し手の一個人の都合からである。「してはいけない」形式と比べるために、図式を作成して、これら「するな」形式の禁止の「望ましさ」の規範を示すことにする。

(77) 西尾愛「パパ、チーズ取って」

竜太郎「(あたりを見回して) 人前でパパと呼ぶなよ」

(尾崎 2007 : 69)

この例文における行為の実現に対する望ましさの規範は話し手であるので、話し手の規範によって、聞き手にしないように要求している。

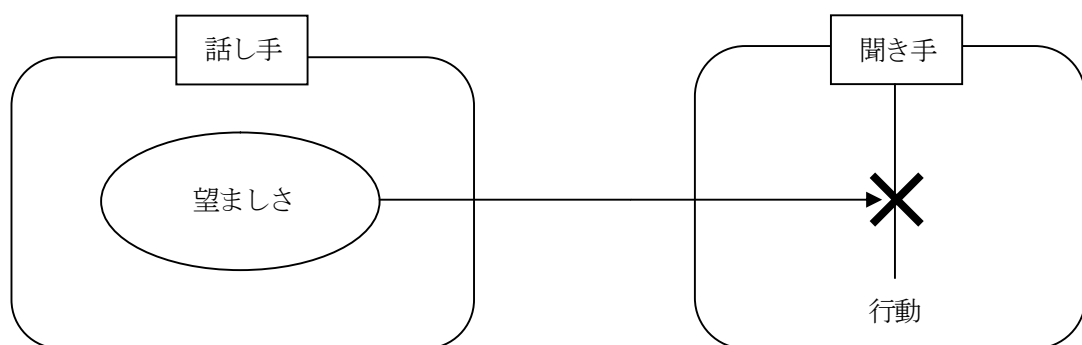


図4 「するな」形式の禁止

つまり、「するな」形式における規範の持ち主は、話し手であり、「するな」形式における望ましさは、私的望ましさである。この形式の望ましさと比較することによって、「してはいけない」形式の特徴が明らかとなる。

3.2.7.2 「してはいけない」(「しちゃいけない」)

「してはいけない」の例文は現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)において、922 例あった。また、その縮約形「しちゃいけない」は 42 例あった。この形式はもともと事態評価のモダリティの下位分類に属し、高梨(2002:82-92、117)は事態評価のモダリティの基本的意味を「必要」「許可・許容」「不必要」「不許可・非許容」の 4 つに分類したうちの、「不許可」という類に該当するとしている。そして、実現状態には、事態がまだ実現しておらず、これから実現するかどうか不明の状態(未実現)、事態が現在までに実現したことの状態(既実現)と、事態が実現しなかったことの状態(非実現)があるとして、これによって、「当為判断」と「働きかけ」の両方になる可能性があり、そのうち、「当為判断」とは人の行為の「必要性・許容性」についての判断であり、「働きかけ」とは聞き手に何らかの行為を促したり、やめさせたりしようと働きかける機能であるとされている。「してはいけない」形式が「働きかけ」として機能する場合、「勧め」「警告」「許可」「免除」「禁止」「強制」などの下位分類のうち、「禁止」の意味を持つ。

3.2.3 節で、主観性と客観性について述べたが、ここで、その定義をもう一度簡単に言えば、主観性とは話し手の単なる話し手一個人にとっての「好都合」「便利」「便益」といった「望ましき」であり、客観性とは話し手一個人といったものではなく、共同社会的な「望ましき」であることである。このような主観性・客観性から見れば、「するな」の形式は主観的である。また、「してはいけない」形式において、話し手が上位の場合は「するな」と同じ用法で使用することはできるが、この使用は話し手が上位でない場合に比べて少ない。また、話し手が上位でない場合には、話し手が規範の持ち主として行為の実行や状態の実現を評価しも話し手に聞いてもらえない可能性があるため、「してはいけない」形式という客観的な形式によって、話し手個人の都合ではない、話し手の背後社会の規則であるという客観的な望ましきによって禁止をするのである。以下では、これらのことを詳しく分析していく。

3.2.7.2.1 話し手が上位である場合

「してはいけない」形式の禁止の用法において、話し手が上位の場合は非常に少ない。現代日本語書き言葉均衡コーパスで調べたところ、このような状況は、「してはいけない」100 例のうち、わずか 4 例だった。以下で、それらの例文を示す。

(78) (父が子に)「食べ物を粗末にしてはいけない。」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『不可能を可能にする人生』)

(79) 「お父さんの邪魔をしてはいけません。」そう言われてしぶしぶ子どもたちは、自分たちの噴水プールに戻った。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『スパイダー・ワールド』)

(80) (先生が学生に)「まだ帰ってはいけません」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『Yahoo!知恵袋』)

(81) 「すべての書類を差し押さえるので一切触れないように。また誰もここから外に出てはいけない。これがその命令書である」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『シドニー郊外暮らし』)

(78-80) は話し手が父親、母親、先生で聞き手が子供と学生である。(81) は話し手が裁判所命令を持つ弁護士である。いずれの「してはいけない」も、聞き手に何かをしないよう要求する用法で、「するな」と交換することができる。

このうち、(78-80) では禁止の理由や条件が前後の文脈に提示されていない。話し手が聞き手よりも上位にある場合、このような例文は、「してはいけない」形式をコーパスから無作為に 100 例とったうちの 3 例しかない。

これに対して、話し手が聞き手よりも上位にない場合、禁止の理由や条件が前後の文脈に提示されていた。このとき、話し手が明らかな上位にあることが明らかな禁止の例は (81) の 1 例であった。つまり、前後の文脈に理由や条件が現れて禁止を表すものが 86 例、禁止以外の例文が 10 例で、これらの詳細は下記の表 5 で示す。

禁止			評価	その他
前後の文脈に説明がある禁止		説明のない禁止		
理由	条件			
75	12	3	7	3

表 5 「してはいけない」形式の使用実態

しかし、話し手が上位にあっても、例えば (78) の例文のように、「食べ物を粗末にしない」という規範、(79) のように、「おとうさんの邪魔をしない」という規範、(80) のように、通

常まだ帰るべきでない何らかの事情がある（課題が終わっていないなど）、などの規範は、普遍的は社会の共通認識であるといえる。つまり、この場合、文脈に現れなくとも、社会的望ましさとして、捉えることもできる。したがって、「してはいけない」形式では、たとえ話し手が相手よりも上位にあったとしても、何らかの規範を背景にした禁止であると言える。

3.2.7.2.2 話し手が上位でない場合

3.2.3.3節で述べたように、事態評価のモダリティにおける主観性と客観性の区別に関しては、高梨の定義がある。高梨は、(2002: 94) は「てもいい」「なくてもいい」「てはいけない」「なくてはいいけない」が「客観的必要性・許容性」を表す場合があり、その例には、以下の (82) のようなものがある。(82) の「てはいけない」は「寮の中で酒を飲む」ことが「規則」で禁じられていることを表している。

(82) 「だって、りよ、寮の中で酒飲んじゃいけないのって、き、き、規則だろう」 (=49)

このように、行為の実行に対する評価の規範の持ち主が話し手ではない場合、話し手は客観的に規則を述べ、その規則はお互いがいる社会において守るべきであるものことをそのまま伝えている。つまり、話し手一個人の望ましさから禁止をするのではなく、守るべき社会や「寮」の規則という社会的望ましさから禁止をするのである。この社会的規則によって、「寮の中で酒を飲む」ことに対して「飲んではいけない」という評価を聞き手に伝えているのである。高梨 (2002) は「してはいけない」形式の事態評価のモダリティは、主に「客観的必要性・許容性」を表すとして、「①聞き手の行為」、「②制御可能な行為」、「③未実現の行為」という三つの条件を満たす場合、「禁止」の意味を表すとしている。この例文はまさに、「客観的必要性・許容性」が禁止の条件を満たしている場合であるので、この禁止は、客観的な禁止であると言える。以下ではさらに例文を用いて「してはいけない」形式による禁止を見ていく。

(83) 「ここの星の人達に一動物の人にも、植物の人にも、とにかく、ここの星の人達に一干渉してはいけない。これは、最低限の、ルールよ」

「まま...あの...うーんと、それは...」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『緑幻想 グリーン・レクイエム 2』)

- (84) 「これは、もう完成しているじゃないの。これ以上、彫ってはいけない。あとは磨くのです。」

私のほうも驚いた。たしかに羽をはばたかせ、いまにも飛び立とうとしている女性のトルソ（胴体だけの彫像）はでき上がっていた。

（現代日本語書き言葉均衡コーパス『女ひとり世界に翔ぶ』）

これらの場面では、社会的ルールや美的規範、道徳が客観的な規範として、禁止における行為の実現への評価を支えている。この規範を話し手が提示することで、「こうすべきでない」という「義務」を聞き手にもちかけているのである。このような用法はまた以下のような「しちゃいけない」のような口語化した形式においても見られる。これらの形式は、「してはいけない」形式のくだけた言い方で、それらの例文の「してはいけない」形式との特異性はまた下節で述べることにして、ここでは、「してはいけない」と同様として扱える性質について、先に述べておくことにする。

- (85) 「もし誰かに秘密を話したら、君は自動的に失格だ。その時は、話は白紙に戻る。さっきの1万円は返さなくてもいいし、僕もいただいた500円は返さない。そして、残りの99万円も、上乘せするボーナスもナシになる。わかったね。—それじゃあ」

「決ッして誰にも話しちゃいけないよ。親友にも家族にも、例外はない。」

その部分だけ特に繰り返して、空耳のように、貴船の言葉は耳許で響いていた。

（現代日本語書き言葉均衡コーパス『トップラン』）

- (86) 「許せないこと、腹の立つこともあるだろう。でも、親も一人の当り前の人間なんだ。それを忘れないで」

「当り前の人間…」

「家から逃げるために、つまらない男の子と付合ったりしちゃいけないよ。そんなことは少しも救いにならない。いいね」

「はい」

（現代日本語書き言葉均衡コーパス『小説現代』）

- (87) 「ほんとに、まいっちまうよなあ、この忙しいのに何だって大家の野郎は呼びつけやがるんだ。こっちには仕事があるってのによ」

「山さん、大家さんを野郎呼ばわりしちゃいけないよ」

「うるせいや。能天気なおめえと違ってこっちは仕事が山ほどあるんだ。とぼけたこと言うんじゃねえ」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『戦時下動物活用法』)

- (88) 風邪ぎみのときはけっしてフロにはいっちゃいけない。湯ざめをしたら風邪をひくから、きちんと肩までつかなくちゃいけない。おフロの中ではしっかりからだを洗い、まちがってのはねをとばして人にかけてたりフロおけの中にもぐったりするような遊び（妻はする。そして、はねを飛ばされたコドモは泣いて、フロ場はおおさわぎになる）はするべきではないのである。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『パパはごきげんななめ』)

これらのように、話し手は客観的に存在している望ましさを聞き手に持ちかけ、聞き手にしないように義務付けるのである。社会的規範に基づく望ましさを背景にすれば、やや婉曲的に、その上強制力のある禁止表現になるので、このような客観的な「してはいけない」はかなり多く使われるのである。この義務付けはさらに、話し手が明らかな上位にいない時に必要となる。つまり、「してはいけない」のは、話し手個人からの評価ではなく、社会的・一般的・客観的に認められている望ましさに反しているからという含意がふくめられ、相手の不満を和らげることができるのである。根拠となる理由やルールの説明もしばしば文脈にも現れる。これらにおける望ましさを下記の表でまとめた。

例文	聞き手による行為	望ましきの規範
(83)	ここの星の人達に干渉する	社会規範
(84)	完成品を彫り続ける	美的基準
(85)	誰かに秘密を話す	テストのルール
(86)	つまらない男の子と付き合う	社会道徳
(87)	大家を野郎呼ばわりする	社会道徳
(88)	風の時にフロに入る	風邪が治るという共通知識

表 6 社会的望ましきの禁止

図 4 の「するな」形式と比べるため、「してはいけない」形式の禁止を以下のように図式化

する。「するな」では、「望ましさ」が話し手の中にあつたが、「してはいけない」の場合の「望ましさ」は話し手と聞き手の両方を含んでいる。つまり、両者を含む社会全体に共通する「望ましさ」の基準に基づく禁止が「してはいけない」形式の特徴なのである。

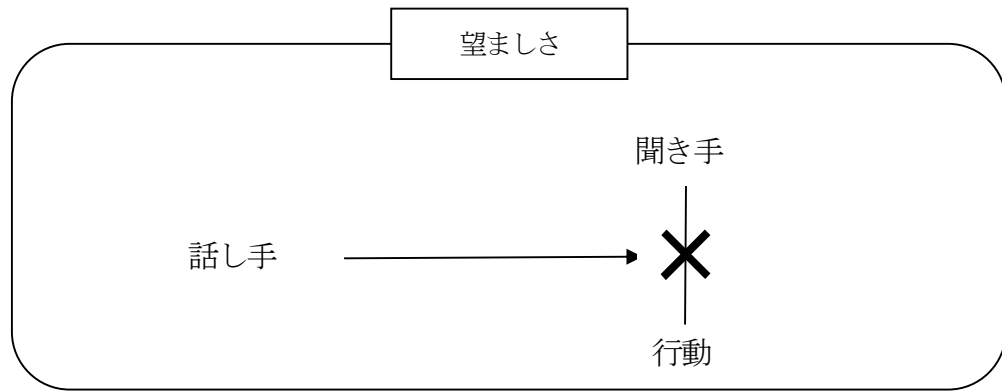


図5 「してはいけない」形式の禁止

「するな」形式の禁止の望ましさの規範が話し手によるものであるのに対して、この形式の禁止の望ましさの規範は社会によるものである。つまり、「してはいけない」形式が表しているのは、社会的望ましさにおける禁止であることを示している。

その点では次の例はこの原則に外れている。この例で「入って来ちゃいけない」と言われているのは、実は幽霊である。「入ると殺すぞ」と脅しても、幽霊にはあまり意味が無い。このような無我夢中の状態でなければ、かなり奇妙に響くところである。

- (89) 戸のところまで来ると、犬は扉の下を嗅いだ。毛をさかだて、しっぽをぴんとのばして、鼻息も荒く、くんくんと嗅ぎまわり、低いうなり声をあげた。クンジは、無我夢中で立ち上がると、椅子の脚をつかんでふり上げ、「入って来ちゃいけない。入って来ちゃいけない。入ると殺すぞ」と、叫んだ。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『モーパッサン短篇選』)

「するな」形式とは異なり、「してはいけない」形式が社会的望ましさに基づいた禁止であることから、個人的な願望や不満の表明には使いにくいことが予想される。つまり、「してはいけない」形式には「予防的禁止」の用法も「制止的禁止」の用法もあるが、いずれも願望や不満といった語用論的な発話機能は「するな」ほど自由には表せないのである。例文(90)は

「予防的禁止」の、(91)は「制止的禁止」の例である。「制止的禁止」には不満のニュアンスが感じられることもあるが、無生物や意図的には行えない行為に対する「してはいけない」は不自然である。

- (90) a. 「歴史的に築かれたモラルは、そのほとんどが、生命を守るために、我々が存続するために選ばれた手法の一部なんだ。人を殺してはいけない。人を食べてはいけない。血縁者と交わってはいけない。生命は神聖なものだ。人は神によって作られた。墮胎をしてはいけない。自殺をしてはいけない。しかし…」犀川は煙草を吸い、そして煙を吐いた。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『四季』)

- b. 先ほどのご媒酌人のお話では、道子さんのお料理の腕前はプロ級だということですが、野崎君、道子さんがおいしいお料理を作ってくれるのを当たり前だと思っ
てはいけません。「お弁当を作ってくれてありがとう」「ごちそうさま。おいしい
夕食だったよ」と、そういう言葉を、何年経っても率直に口に出してください。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス

『心にのこる主賓・来賓・上司の結婚スピーチ』)

- c. 網で獲ったのは、網を設置してから引き上げる間にかなりの時間があるので、網
の中を泳ぎまわった魚はストレスで味がガクンと落ちるという。地元の人なら子
供でもその差ははっきりわかるのだそうだ。「だから水槽で飼ってる魚なんか食べ
ちゃいけませんよ」と店主は断言する。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『のほほん行進曲』)

- (91) a. 「もうすこし、威厳をもつ必要がありますな」と視学官はいつてから、「さあ、諸君、
この机をもとどおりになおしたまえ。」ぼくらがみんな立ちあがると、視学官は、「ぜ
んぶ一度に立ってはいけない。きみたちふたりだけでよろしい」とさげんだ。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『プチ・ニコラ』)

- b. 「いえ、昔、このへんのマハラジャがつくった大きな収容所が、郊外にあります。
でも多分、私たちは彼らに会うことはできないでしょう」「そんなに諦めてはいけ
ませんわ。出かけてみましょう…お母さん、私たちはもっと行動的に動くべきで
す。少なくともフランスの女性よりは…」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『あふれる愛』)

- c. 「(微笑しながら) そんなことをおっしゃっても、…それでもお一人ではなかなか辛抱の出来にくい方なんですもの…」

「(苦笑) 変なことを言っちゃいけませんよ。…弱ったな、どうも…じゃ、こうしよう。ええ…お前とあたしと約束をしようじゃないか。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『古典落語 円生集 下』)

- (92) a. ?明日は雨なんか降ってはいけない。
b. ?(眠っている人に) 起きてはいけませんよ。
c. ?(木になっているリンゴに) 落ちちゃいけない。
- (93) a. (旅行に出かける日の朝、窓を開けると雨が降っている)
?こんな日に降ってはいけないよ。
b. (木から落ちてしまったリンゴに)
?落ちちゃいけない。

3.2.7.3 「するな」と「してはいけない」の違い

高梨 (2010) は、否定命令形式 (=するな) について、ある行為をさせないための指令を表すものであり、その背後に、相手の行為を禁じるからには、それなりの理由は想定されているはずであるとしている。「するな」の場合は、そのような理由・根拠を述べるより、行為そのものを禁じることに焦点が当てられているという。実際、「するな」は、聞き手に理由を与えずに行為をしないことを押し付ける場面も考えられる。そのため、「するな」は、ほかの先行研究でも指摘されているように、使用範囲が狭い形式である。それによって、否定命令の場合、評価のモダリティ形式や不可能表現など、様々な間接的な表現が発達している (日本語記述文法研究会 2003)。本研究においても考察したように、たしかに、「するな」形式や話し手が絶対的な上位にある場合は、理由を文脈に述べなくても禁止をそのまま要求することができる。

一方、「してはいけない」による禁止は、「①聞き手の」、「②制御可能な」、「③未実現の」行為であるときだけ、禁止の機能を帯びる。また、「するな」形式は基本的意味が行為の禁止の命令であるのに対して、「してはいけない」形式は語用論的な含意から禁止を導き出している。

さらに以上の考察の結果、「するな」形式は、話し手が聞き手の実行する事態に対し、私的規範 (個人的な考え、好悪、意向) から評価して、望ましくないと判断し、当該行為をしないように要求する主観性の禁止であるのに対して、「してはいけない」形式は、ほとんどの場合は、話し手が上位でない場合であり、話し手が発話の時点や発話の状況、話し手と聞き手がい

る社会の規範（社会的な道德・法・慣習や自然界に関する法則）から行為の実行に対して望ましくないという評価を、客観的に話し手が聞き手に対して当該事態をしないようにその規範を提示して当該行為をしないように要求するという区別があることを明らかにすることができた。これらの違いを簡単にまとめると、下記の表のどおりである。

	するな	してはいけない
望ましさの持ち主	話し手	話し手と聞き手のいる 社会や集団
望ましさの傾向	個人的な考え・ 好悪・意向	社会的道德・法・慣習や 自然界に関する法則
望ましさの種類	私的望ましさ	社会的望ましさ

表7 「するな」と「してはいけない」の違い

上でも述べたが、「するな」形式よりも、「してはいけない」形式の使用が多いことについては、多くの先行研究（早川 2012 : 292、高橋 2003 : 156 等）において指摘されている、日本語は主観的なものも客観的に提示するという傾向から説明できる。つまり、主観的な望ましさよりも、客観的・社会的な望ましさで行為を禁止するほうが好まれたのではないかと考えられる。この点をもう少し詳しく見てみよう。

高橋（2003 : 156）は、日本語では「自発」の意味を表わす動詞を利用する傾向が見られると述べている。つまり日本語には「思う」「知る」などのかわりに、「思える」「知れる」のような自発形式を用いやすいという。高橋（2003）は、この自発用法は「私」を主体としない受け身構文と同じ構造になるため、自発用法を用いた発言・心理過程は、単に主語のない節よりさらに判断の主体が曖昧になるため、「と言える」という表現は、話し手の責任ではないかのような印象を与え、物事自体が自然に「言える」ようになったかのごとくに言う傾向があると述べる。この傾向は、日本語は主観的なことも、客観的に表すという特徴を表している。

同じように、早川（2012 : 292）は、分析したテキストにおいて、モダリティを表わす投射節に主語がある例は一つもなかったと述べている。この現象について、日本語の場合、主語がないのが「無標（unmarked）」、つまり通常の状態であるという。例えば、「このような結果だ

と言える」の文でも、「言える」の主語は誰なのかがはっきり明示されないのが一般的であり、このことは、日本語は客観的に述べることを好む傾向のある言語であるという。

これら、「日本語の客観的に発言する傾向」が原因で、現代日本語の話し言葉において、禁止表現にも主観的な「するな」より、客観的な「してはいけない」が多く使用されるのではないだろうか。

以下では、「してはいけない」よりも口語的な形式の「しちゃだめ」について、その用法や「してはいけない」との相違について考察する。

3.2.7.4 「しちゃだめ」

「しては」が「しちゃ」になり、「いけない」という帰結部よりも口語で用いられやすい「だめ」と一体になる形式が「しちゃだめ」という形式である。ここではその意味と使用条件について、語用論の観点から分析し、「するな」形式、「してはいけない」形式の禁止との相違を明らかにする。

まず、「しちゃだめ」形式のモダリティにおける位置付けを見ておこう。日本語記述文法研究会（2010：47-50）によれば、モダリティは文の述べ方を表すものであり、命題内容である事態に対する把握の仕方や、先行文脈への関係づけのあり方、話し手の発話・伝達的な態度のあり方を表し分ける分類である（日本語記述文法研究会 2010：47-50）。その下位分類については、ここでは日本語記述文法研究会（2003：4）による4種類の機能における下位分類を用いることにする。

(94) モダリティの四分類

- a 文の伝達的な表し分けを表す機能
- b 命題が表す事態の捉え方を表す機能
- c 文と先行文脈との関係づけを表す機能
- d 聞き手に対する伝え方を表す機能

（日本語記述文法研究会 2003：4）

まず、日本語記述文法研究会（2010：47-50）によれば、(94a)の機能を持つのは表現類型のモダリティであり、(95)に示すように、さらに六つの下位類からなっている。

(95) 表現類型のモダリティ

- a 叙述のモダリティ
- b 疑問のモダリティ
- c 意志のモダリティ
- d 勧誘のモダリティ
- e 行為要求のモダリティ
- f 感嘆のモダリティ

(日本語記述文法研究会 2010 : 47)

次に、日本語記述文法研究会 (2010 : 47-50) は、(94b) の機能を持つのは評価のモダリティと認識のモダリティの2種類で、下記の (96) と (97) に分けている。

(96) 評価のモダリティ

- a 必要
- b 許可・許容
- c 不必要
- d 不許可・非許容

(97) 認識のモダリティ

- a 断定と推量
- b 蓋然性
- c 証拠性
- d その他

(日本語記述文法研究会 2010 : 48)

次に (94c) の機能を持つのは、説明のモダリティである。その形式には、「のだ」「わけだ」「ものだ」「ことだ」のような表現がある。(94d) の機能を持つのは、伝達のモダリティであり、その一つに丁寧さのモダリティ、もう一つに伝達態度のモダリティがあると定義されている (日本語記述文法研究会 2010 : 48)。

これらのうち、「してはいけない」は、(96) の評価のモダリティのうちの「不許可」「非許容」にあたる。評価のモダリティは、詳しくは以下のような形式であるとされる (日本語記述

文法研究会 2003:92-93)。

(98) 評価のモダリティを表す形式

a. 必要を表す形式

とばいい、ばいい、たらしい／方がい／なくてはいけない (なくてはならない、なければいけない、なければならぬ、ないといけない) ／べきだ、ことだ／ざるを得ない、ないわけにはいかない、しかない

b 許可・許容を表す形式

てもいい

c 不必要を表す形式

なくてもいい／ことはない

d 不許可・非許容を表す形式

てはいけない (てはならない)

(日本語記述文法研究会 2003:92-93)

「しちゃ」の「ちゃ」は連語であり、「ては」のくだけた言い方である。頻繁に使用される中で音韻縮約 (phonological reduction) を起こした形式で、話し言葉であり、公の場面では用いられにくい。

「しちゃだめ」という言い方は「しちゃいけない」よりも固定化されていて、二人称あての禁止として使われている割合が「しちゃいけない」よりも高い。コーパスでは、「しちゃだめ」が 60 例あり、そのうち 58 例が禁止表現として使われている。残りの 2 例は、以下のような疑問文として使われている。

(99) おんぶって、首が据わらないとしちゃだめなのかな？

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『Yahoo!ブログ』)

(100) 質問が思いつかないのになんでネタで質問しちゃだめなんですか？

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『Yahoo!知恵袋』)

このように、「しちゃだめ」は禁止表現としての固定化の程度も、また、禁止としての使用頻度も、いずれも非常に高いと言える。しかし、本来は「しちゃ」と「だめ」の複合形式であ

り、それぞれの構成要素を分析することからその形式を考えることが必要である。以下では、「しちゃだめ」の構成要素をそれぞれの意味を見た上でこの複合形式の意味を見ていく。

「しちゃだめ」は「してはだめ」の縮約形で、「動詞の連用形＋ては＋だめ」のように分解することができる。この三つの構成要素のうち、中心的な意味を示すのは「だめ」であるので、「だめ」の語彙的意味をまず見てみることにする。『大辞林（第三版）』によると、「だめ」が表す意味は、以下の六つがある。

- (101) a. 囲碁で、双方の境にあってどちらの地にもならない所。「一を詰める」
- b. 演劇で、演技などの悪い点について演出者が出す注意。
- c. しても甲斐のないこと。無益なこと。また、そのさま。むだ。
「一かも知れないが頼んでみる」「それ以上やっても一だよ」
- d. してはいけないこと。親しい相手に禁止の意を伝える語としても用いられる。
『『これもらってもいい？』『一』『まだ起きては一だ』『芝生に入っては一』
- e. 不可能なこと。できないこと。また、そのさま。
「今日中に作れと言われても一なものは一だ」
- f. 役に立たないこと。悪い状態であること。また、そのさま。
「食物がすえて一になる」「壊れて一になる」「一なやつ」
「今日の調子はてんで一だ」

このうち、「しちゃだめ」の「だめ」の意味としてあり得るのは(101c,d,e)の三つ意味である。これらの意味で、「しちゃ」に後接して複合した形式が、「しちゃだめ」の形式である。この形式は、「してはいけない」と違って、社会的な望ましさが前後の文脈に提示されなくても、話し手個人の望みからの禁止にも使える点にある。例として以下の文を挙げる。

- (102) 俺は石の床にごろんと横になった。プーは奥のスペースに入り、カーテンを閉めた。

「これから着替えるんだから、のぞいちゃだめよ。」

相も変わらず減らず口をたたいている。

「おまえの裸なんか、誰が見たいかよ」

ジャムはいい返しながら、すでに寝る体勢に入っていた。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『オカマのプーさん』)

(103) 男は、彼女の肩を抱くようにして、「お店のことは、誰にも話しちゃだめだよ」と、柔らかい声で言う。
(現代日本語書き言葉均衡コーパス『幻世の祈り』)

(104) 彼の本質は変わっていません。彼とは電話もしちゃだめ。会っても駄目。完全消去してください。
(現代日本語書き言葉均衡コーパス『幻世の祈り』)

(105) 「それは太宰の口ぐせだね。あいつ、そう言って、檀一雄をだましたんだからな。だけど、そんなことを刑事の前でしゃべっちゃだめだぞ。おめえがだましてることがばれちゃうからな」
(現代日本語書き言葉均衡コーパス『不良中年忍法帖』)

(106) 告白したとたん、急に怒り出した。きみのしたことは正しくない、と彼は言った。
「やめちゃだめだ、リンダー、そんなことをしたらきみのためにもならないし、チームのためにもならない」

「口で言うのは簡単よ！」リンダはかっとなって言い返した。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『彼女はスーパー・ルーキー』)

(107) 彼のおぼつかない小さな手は、ユッカを網目にこすりつけるかわりに、ふるいのあちこちに押しつけ始めていた。

「ほら、だめ、だめ」ランディは英語で、息子に向かって厳しい声を出した。

「こするんだよ。押さえつけちゃだめだ。こすってみなさい」

彼は、ユッカの上にのせた手を円を描くように優しくこすってみせた。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『アマゾンの白い酋長』)

(108) 「アーサー、ひとりで行って」ぼくは言った。

「ぼくは次の虹を待つよ。次のに乗る」

アーサーは、ぼくを置いて行きたくなかったらしく、ちょっと困った顔をした。

「ハリー。ここにいちやだめだ。ぼくたちが長くいるところじゃない。遊びに来るくらいならいいけど、ずっといちやだめなんだ」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス、『青空のむこう』)

以上のうち、(102-105) は「予防的禁止」の例で、(106-108) は「制止的禁止」の例である。このように、この形式は、「してはいけない」形式や「しちゃいけない」形式より禁止表現として固定化していると考えられるが、この文法化の度合いについては第4章で触れる。

次に、「しちゃだめ」形式の語用論的発話機能に付いてみてみよう。

まず「しちゃだめ」は、「するな」と同様に、激励・慰めに使われやすく、定型化された表

現もある。

- (109) a. 気にするな／心配するな。
b. 気にしちゃだめだ／心配しちゃだめだ。

また、「するな」と同様に、「不満」の意味にも使える。

- (110) 「道田君、どこ行ってたのよ！ 下の部屋へ聞き込みに行くわよ。さぼっちゃだめじゃないの！」
「は、はい…」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『盗みに追いつく泥棒なし』)

- (111) だが彼女の意識の別の何かが言った、これはどうしてこんなに不気味なの？ いいえ、ここはニューヨークよ。こんなところにぼんやり突っ立ってちゃだめじゃないの、バカね！ 彼女は警察を呼ぼうと、片手を壁に掛けた電話に伸ばした。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『メン・イン・ブラック』)

- (112) すると、晴美の膝で、おとなしく寝ていたホームズが、突然頭を上げて、白井へ向かって、「ギャーッ！」と鳴いた。白井が仰天して、「そんなこと言ってちゃだめだ、ってホームズが怒ってますわ」と、晴美が言った。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『三毛猫ホームズのびっくり箱』)

しかし、「するな」形式とは異なり、相手が自分の意志で実現することができないことに対して願望を表す文では使にくいことが多い。

- (113) a. (寝ている相手に) 起きるなよ。
b. (木になっているリンゴに) 落ちるなよ。
c. (空を見上げて) 明日は降るなよ。 (尾崎 2007 : 70)
- (114) a. ? (寝ている相手に) 起きちゃだめだよ。
b. ? (木になっているリンゴに) 落ちちゃだめだぞ。
c. まだ雪降っちゃだめよー。 (『livedoor ブログ』)

このように、「しちゃだめ」は、「当該事態の実現がよくない、効果がない、しようとしてもできない、してはいけない」ということを表すのである。この意味は、禁止の望ましきの規範が、話し手個人の望ましきでありながら、話し手個人の意思での願望の意味がないということを表す。当該行為の実行に対して、話し手が望ましきの持ち主であり、しないように働きかけるといような主観的な表現であるが、「するな」ほど主観的ではない。この主観化については、文法化の節で、また詳しく分析する。

3.2.8 まとめ

以上、「してはいけない」（しちゃいけない）形式、「しちゃだめ」形式を語用論的観点から分析し、「するな」と比較することによって、それらの使用条件、使用実態が明らかになった。

「してはいけない」形式は、禁止される行為や事態に対する「するべきでない」という望ましくないとする規範は、社会的なものからきている。この点が、私的望ましきの規範による禁止である「するな」形式との大きな違いである。

「しちゃだめ」という縮約形式は、「してはいけない」形式よりも禁止表現として使われやすい。この形式は「するな」と同じ主観的な望ましきから禁止をするものでありながら、話し手の不満な態度を表さないため、聞き手に不快感をもたらない、この点が「するな」形式との違いである。

なお、これらの文法化の度合いは、第3章で詳しく分析する。

3.3 不可能形式の意味

3.3.1 分析

不可能形式は、可能形式の否定形であるので、まず可能について整理しておこう。

先行研究ではしばしば、可能は動作の実現を含意するかどうかによって、「実現可能」と「潜在可能」に分けられている。渋谷（1993）は「潜在可能」をさらに「能力可能」と「外的条件可能」に分ける。「能力可能」とは「ある動作の実現が動作主体に備わる能力によって可能・不可能であること」を、「外的条件可能」は「ある動作の実現が主として動作主体以外の条件によって可能・不可能であること」を表す。それぞれを、時間との関係で表すと、次のようになる。

(115) a. 実現可能

(過去) きのう久々に手紙が書けた。

(未来) 今始めれば日暮れまでには書ける。

b. 潜在可能

i 能力可能

(過去) むかしはどんなむずかしい字でも書けた。

(現在) どんなむずかしい字でも書ける。

ii 外的条件可能

(過去) きのうなら暇だったから手紙が書けた。

(現在) きょうは暇だから手紙が書ける。

(未来) あすは暇だから手紙が書ける。

(渋谷 1993 : 15-16)

不可能形式が禁止を表すには、(i) 現在または未来の潜在可能で、当該動作がまだ実現されていない、(ii) 行為の実現が聞き手によってなされるもので、「ある」「似る」のような無意志動詞ではない、(iii) 話し手が聞き手あてに発せられる、という条件を満たす必要がある。また形の上では、不可能動詞の「(ら) れない」や、「することができない」「名詞性動詞+できない」など、いくつかのバリエーションがある。なお、不可能動詞は、形式上、否定の受け身と区別できないことも多い。詳しくは以下で説明する。

3.3.2 不可能の条件

不可能形式は、不可能であることの条件によって、いくつかに分類できる。渋谷 (1993) は、主体の持つ能力によってある動作を実現することが不可能であることを表す「能力不可」と、主体の外的状況に主体がある動作を行うことを妨げるような条件があるためその動作を実現することが不可能であることを表す「外的条件不可」の二つに分けている。加藤 (2003) によれば、「能力」というのはもともと行為者に備えている素質や習得、会得されたもので、行為者に内在した潜在的なものである。それに対して「状況」とは、行為者が十分能力を発揮して行為を実行できるようにする外的な条件が備わっているという客観的な状況のあり方である。

加藤 (2003) はさらに、この二種類の可能は、まず、能力が先として、内在的に備わっていなければならない、外的条件として、能力に応じて整っている場合にのみ、行為の実行が可能に

なるという。つまり、加藤（2003）は、「能力可能」は「あることを遂行する潜在的能力を有する」という恒久的な属性であり、外的条件としての「状況可能」は「個別の動作遂行における実現の可否」という「特定時点における、一回的・一時的な個別状況」と結びつきやすいものの、「恒久的」な場合もあるという。（124）では「この寒さ」が、（125）は「今日」の海が穏やかであるという状況が、動作の遂行の不可能・可能に関わる要因としてあげており、これらは特定時点での気候条件という「一回的・一時的な個別状況」として捉えられている。一方（118）では、ある外的な条件が失われたり、整ったりしたために、恒久的に不可能または可能になったことを表している。

（116）私は泳ぎは得意なのだが、この寒さでは泳げない。（加藤2003:89）

（117）今日は海も穏やかなので、泳げるぞ。（加藤2003:89）

（118）a. 貴重なデータを完全に消失したので、もう彼はあの言語を読み解くことはできない。

b. 車を買ったから、いつでもドライブに行ける。（加藤2003:89）

これらの不可能形式による分類から、それらが表す禁止の違いがわかる。つまり能力不可能の形式による禁止の理由は、例えば、（119）の例文では、聞き手の体が弱いことである。すなわち、聞き手に行為を実行する能力が欠けているという恒久的な属性を話し手が提示し、この能力不可によって、聞き手に泳がないように働きかけているのである。

（119）君は生れつき体が弱いんだから、泳げないよ。（渋谷 1993 : 51）

それに対して、外的条件不可の形式による禁止は、（120）の例文のように、話し手は、ここが車庫前であるという状況からして、駐車ができないということを提示することで聞き手に駐車しないよう伝えている。

（120）ここは車庫前につき、駐車できません。

この二つの大きな違いは、当該行為の実行を妨げる原因である。能力不可の形式の行為が実行できない原因は聞き手側にあるのに対して、外的条件不可の場合は聞き手側ではなく、その場の状況、外的要因に（なんらかの規則によって管理されている場所、ルールなど）にある。前

者の場合、聞き手に対して発話すると、相手の能力を否定するような意味になりやすいので、ポライトネスの観点から使いにくく、使うとすれば、聞き手の利益になる場合に限られる。

したがって、主に状況不可のほうで、決められた場面や上下関係において禁止として使用されやすい。典型的には、公的な場面であったり、管理人が利用者に対して、あるいは生産者が消費者に対して使われたりすることが多い。(121) では、「タバコを吸うことができない」のは、「このレストラン」の管理人などによる規範であり、「できない」というのは、実際に行為の実行が可能や不可能ということではなく、「このレストラン」という場所において、「タバコを吸う」と、例えばレストランから追い出されるなどされたりすることで、この行為が実際には実行できないようにされる可能性があるということである。この規範は、一般の人であれば「このレストラン」にいる誰もが守るべき規範であり、能力不可の場合の聞き手個人に対するものと大きく違うところであると考えられる。

(121) このレストランではタバコを吸うことはできない。

3.3.3 ポライトネスと望ましさ

不可能形式による禁止は、「するな」形式などと比べると丁寧な形式である。なぜそのように解釈されるのであろうか。ここでは Brown & Levinson (1987) によるポライトネス理論によって考察する。

3.3.3.1 Brown & Levinson (1987) によるポライトネス理論

2.1.2節でも説明したように、Brown & Levinson (1987) によるポライトネス理論は、人類学や社会学におけるフェイス (face、社会的に認められた自己イメージ) という概念を用いて、ポライトネスを定義している。フェイスにはポジティブ・フェイスとネガティブ・フェイスの二種類がある。ポジティブ・フェイスとは自分のありかた、行為を積極的に他人に認められたいという欲求であり、ネガティブ・フェイスとは、自分のありかた、行為を他人に拘束されたくないという欲求である。日常生活において、これらの欲求を脅かす行為 (face threatening act, FTA) は避けがたい。例えば不満を述べたり、叱ったりすることは聞き手のポジティブ・フェイスを傷つける。あるいはまた、依頼や誘いも相手の行動を縛ることになるので、ネガティブ・フェイスを脅かす行為となる。そのため、何らかの形でそのFTAの力を緩和する努力がなされ

る。FTAに際して、話し手が相手のフェイスを守るために行う修復行為をポライトネス・ストラテジーと呼ぶ。

禁止は典型的なFTAであり、何らかのストラテジーによって、FTAを緩和する必要がある。たとえば、「おまえは才能があるんだから、練習を怠けるなよ」のように、禁止の働きかけをする前に、褒めることによって相手のポジティブ・フェイスに配慮を示せば、FTAは緩和される。あるいは相手のネガティブ・フェイスに配慮して、「しないで」のような定型依頼表現を使うことによって聞き手に選択権を与え、FTAを弱めることができる。では、不可能表現はどのようなストラテジーと言えるだろうか。ここでは「能力不可」と「外的条件不可」に分けて論じていく。

3.3.3.2 能力不可

まず、能力不可による禁止の例をもう一度見てみよう。

(122) 君は生れつき体が弱いんだから、泳げないよ。 (渋谷 1993 : 51)

この例が禁止を表すかどうかは文脈に依存する。例えば、医者が患者に、教師が生徒にいうのであれば、禁止と解釈しやすい。つまり、ここでの禁止は語用論的な含意である。したがって、Brown & Levinson (1987) のストラテジーで言えば、「ほのめかし (off-record)」に相当する。しかし、それだけではない。上の文は、能力が欠けていることによって、当該行為の実行がもたらす結果が聞き手にとって不利益となることも含意している。相手の(不)利益を考慮していると伝えることは Brown & Levinson (1987) ではポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとされる。さらにまた、このような状況では、「君は生れつき体が弱いんだから」のような、理由付けを伴うことが多い。これもまたポジティブ・ポライトネス・ストラテジーである。以上から、「するな」のような直接的な禁止文に比べて、不可能形式ははるかに相手のフェイスに配慮したポライトな表現であるといえることができる。

不可能形式は単に能力が欠けているというだけではなく、無理してその行為を実行することによって、聞き手に不利益が生じる、つまり聞き手にとって望ましくない事態が生じるという意味が含まれるとき、禁止と解釈される。したがって、(123) のように不利益が想定できない状況では、不可能表現で禁止の発話行為を表すのは難しい。

(123) 芋を洗うようで、立っているのがやっとならとても泳げないよ。

不可能形式が聞き手のためを思っただけの禁止であるということは、望ましさの規範から説明することができる。この禁止における当該行為の実行に対して、行為の実行に対する望ましさの規範の持ち主は、話し手側にあるが、話し手が直接禁止をしているのではなく、あくまで聞き手に対する望ましさで聞き手の行動を妨げている、つまり、行為の実行は望ましくないとして禁止するのである。これを図式にすると、以下ようになる。なお、聞き手にはそもそも当該行為を行う能力が欠けているため、聞き手と行動は点線で結ぶ。

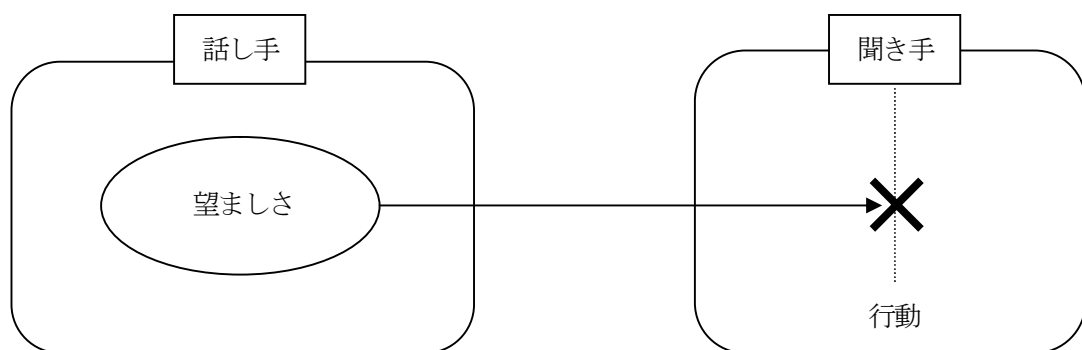


図 6 能力不可による禁止

このような能力不可による禁止は、稀にしか見られない。この場合話し手は聞き手の能力に踏み込んでその行為の実行をやめるようにするため、話し手と聞き手の関係は、話し手が親や、先生、コーチである場合など、限られた関係にしか見られない。このような能力不可による禁止とは別に、不可能形式による禁止は、ほとんどが外的条件不可（以下では状況不可と呼ぶ）によるものである。

3.3.3.3 状況不可

状況不可の禁止では、できない原因が聞き手側ではなく、外的条件にあり、望ましさは話し手と聞き手を含む社会的ルール、あるいは自然界の法則である。例えば、以下の例文は話し手が「子供にたばこの煙を吸わせるべきではない」「場所の管理者の指示には従わなければならない」という規範や、「毒キノコを食べてはならない」という法則に従う限り、聞き手に不利益をもたらさないという場面で使われている。

- (124) a. ここは子供が来るから、タバコ吸えないよ。
b. ここは禁煙って書いてあるから、タバコ吸えないよ。
- (125) このキノコは食べられないよ。

つまり、望ましさを規範を背後にある力として聞き手に持ち出せば、相手に対して禁止することが可能になる。これを Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論から見れば、「できない原因」が聞き手にない、ということは「聞き手に瑕疵はない」ことを伝えることになる。つまり、相手のポジティブ・フェイスに配慮したということになる。さらに言えば、話し手も自分個人にとって望ましいのではなく、一般的にできないのだということによって、話し手自身の責任も免れることができる。なお、直接発話行為ではないので、ポライトネス・ストラテジーとしてはフェイスを脅かす危険が非常に高いと判断される場合に用いられる「ほのめかし (Off-Record)」に分類される。いずれにしろ、「するな」や「してはいけない」に比べて、非常に丁寧な禁止表現であると言える。

望ましさを規範が話し手と聞き手を含むもの（ルールや法則など）であること、話し手ではなく、望ましさが聞き手の行動を妨げるということを図示すると次のようになる。

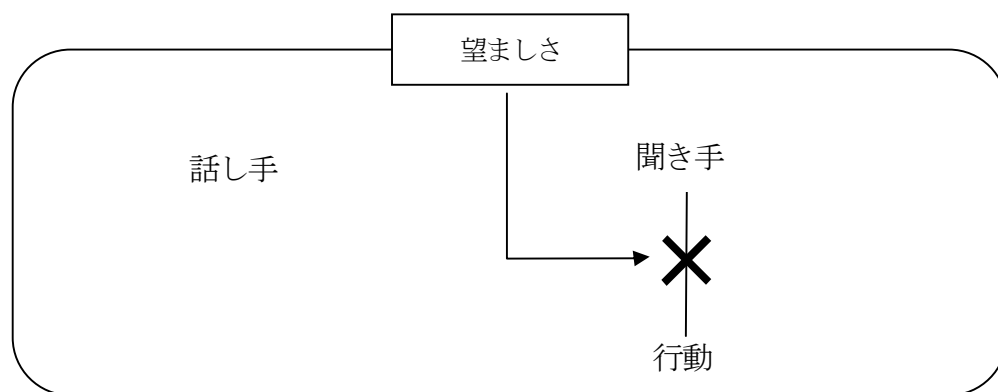


図 7 状況不可による禁止

3.3.3.4 「ほのめかし」としての禁止

不可能形式による禁止表現は、禁止である以上、聞き手に選択を与えない。同時に間接発話行為であり、禁止の意味は語用論的推論から生じる。「ほのめかし (Off-Record)」という非常にポライトネスの程度の高い表現であるため、公共施設、サービスの場面などで、客や利用者に対してなんらかの行為を行わないようにするための働きかけとして用いられることが多い。

不可能形式が、丁寧で遠回しな働きかけであることは、モダリティ副詞「絶対に」と共起しにくいことから分かる。

禁止と共起できるモダリティ副詞は、「ぜひ」「くれぐれも」「必ず」「絶対に」のうち、「絶対に」だけである。しかし、不可能形式による禁止表現は「するな」や「してはいけない」のような形式とは違って、(126c)のように、「絶対に」と共起しない。

- (126) a. 絶対に入るな。
b. 絶対に入ってはいけない。
c. ?絶対に入れない。

その原因は、「絶対に」の話し手の強い意志にある。「絶対」は、話し言葉でも書き言葉でも、その物事がどのような条件下でも必ず成立するという、話し手の強い気持ちを表す（『明鏡国語辞典 第二版』『日本語語感の辞典』）。また、前坊（2014）によれば、「絶対」と共起するモダリティで最も多いのは「意志」である。用例をみても「～してやる」「～させない」のような強い表現や否定形、そして、「いや」「だめ」のようなネガティブな語との共起がみられ、また、「！」が文末につけられることもあったと前坊は指摘している。これらのことから、「絶対」が強い直接的な主張と共起しやすいことがわかる。

(127) 「絶対」の使用条件

- 書き手の考え、主張が強く表れる文章に多い。
相互作用のある場で出現しやすい。
客観的事実性が強く求められる文章には適さない。

（前坊 2014 : 101）

例えば、(128) のような話し手の希望や要求を表すコンテキストでは、「絶対に」が使えるが、逆に、話し手の強い望みなど強い意志を表すコンテキストがなければ、(129) のように、「絶対に」が使えない。

- (128) a. 絶対にアメリカに行きたくない。
b. 絶対に行って欲しくない。

(129) *私が代わりに絶対に行きましようか？

「絶対に」は、この例文のように、話し手の強い望みを表す表現と共起するとすれば、不可能表現による「ほのめかし」の禁止と共起できないのは明らかである。以下の例文の、「絶対にできない」は単に不可能であることを強調しているだけで、禁止とは解釈できない。

(130) a. 手術してすぐに、絶対に外出できないよ。(能力不可)

b. ここは子供が来るから、タバコ絶対吸えないよ。(状況不可)

このようなポライトネスの程度が高い不可能表現による禁止は、関西や四国で「おまえは海ではヨー泳ガンヨ」(渋谷 2005 : 42)、「ごはんを食べながら新聞は読マレンヨ」(渋谷 2005 : 42)のように、標準語よりも多く使用される。加藤(1973 : 80-81)によれば、それらの方言において、命令形命令の待遇的価値が低下し、用いにくくなったがために、それらにかわる対人考慮の言語形式が必要とされ、徐々に多く使われるようになったものである。

関西などの地方では、標準語よりも、丁寧でかつ、受益表現を用いない強い拘束力のもとで聞き手に禁止を要求する形式形式を必要とされるため、これらの地方において、不可能形式の禁止が発達したのだと考えられる。このことは、上で分析した公共施設、サービスの場面などでは不可能形式による禁止が使われることと、根は同じである。

3.3.4 話し手の知識

以上で見てきたように、不可能形式による禁止における「望ましさ」の基準は、話し手または話し手と聞き手を含む社会が持っているものである。これを話し手と聞き手の知識という観点から見てみたい。

渋谷(1993)は不可能形式について、ある動作を行うことが可能であるかどうかということは、一般に動作主体自身がよく知っているが、主語が二人称になると、例えば平叙文(131)のように、話し手(この場合はコーチ)のほうがより多くの情報を持っていてその情報を聞き手に伝えるために用いられるとしている。

(131) 君はこの調子でいけば、100メートル10秒で走れるよ。(渋谷 1993 : 52)

このように、不可能文は、二人称主語の平叙文の場合、話し手の方がより多く情報を持っていて、その情報を聞き手に伝えるために用いられる。

次に、命令文における話し手の知識に関して、井上（1993：334）は、日本語の命令文の第一の機能は「話し手の意向が聞き手の知識に導入されるように働きかけることにある」としてしている。不可能形式が禁止として使われる場合も、禁止される行為がもたらす結果に対する望ましさに関して、話し手の方が聞き手よりも多くの情報を持っている。この点については、能力不可においても、状況不可においても言えることである。例えば、(132) は能力不可で、話し手（この場合はコーチ）が相手の能力についてより多くの情報をもっていて、その情報を聞き手に提示し、禁止をしている。(133) は状況不可で、話し手に条件が欠けていることを聞き手よりも知っていて、その情報を聞き手に提示し、禁止をしている。

(132) 君は体が弱いから、泳げないよ。

(133) a. 君はまだ宿題が残ってるから、帰れないよ。

b. このレストランではタバコを吸うことはできない。

なお、可能表現は、肯否が非対称性になっており、否定の方が使用される割合が高いことが多くの先行研究において指摘されている。Narrog（2009：249）によれば、日本語は可能と否定のコロケーションがいちばん多く見られるという。しかし、だからといって肯定可能文は命令には使用されないというわけではない。行為の実行による結果の望ましさについて、話し手のほうがより多くの情報を持っているのであれば、肯定可能文は命令文として解釈しうる。例えば、(134) のような文は、聞き手が駐車スペースを探しているところに「ここはできる」という新たな情報を提示する場面で、「ここに停めるように」という命令文となる。

(134) そこはだめです。ここなら駐車できます。

(134) のような例文には、話し言葉では談話効力のマーカー（ナロック 2002:230）「よ」がしばしば付加され、新しい情報の提供として使われ、話し手と聞き手の間に情報の共有があることを示す「ね」とは共起しにくいことから、情報の非対称性は明らかである。

(135) そこはだめです。ここなら駐車できます {よ／?ね}。

このように、不可能形式は、話し手が行為の実行が望ましくないものであるということを、聞き手より多くの情報を持っていることが、不可能形式による禁止表現の特異性であることが本節の分析で明らかになった。このことは「望ましさ」の基準は、話し手または話し手と聞き手を含む社会が持っているという本節の仮説と矛盾しない。

3.3.5 発話機能

「するな」「してはいけない」に関して、「予防的禁止」と「制止的禁止」を禁止達成の二様式があるかどうか、またそれぞれの語用論的含意として、「願望」と「不満の表明」の区別を持つかどうかを検討した。では、不可能形式ではどうであろうか。

能力不可による禁止のほとんどの場合は「予防的禁止」として使われる。たとえば (136) をすでに泳ぎ始めている人には言いにくい。すでに何かをしている人に、「君にはその能力が無い」と言うのが不自然なのは当然であろう。

(136) 君は体が弱いから泳げないよ。

ある行為が規則などに違反することを伝えることは、当該行為が実行済みであっても構わない。したがって、状況不可による禁止は、「予防的禁止」と「制止的禁止」の二様式をもつ。

(137) a. 予防的禁止：(店員が店内でたばこを吸おうとしている)

お客様、店内ではたばこは吸えません。

b. 制止的禁止：(店員が店内でたばこを吸っている客に)

お客様、当店ではたばこは吸えません。

また、状況不可の不可能形式の禁止の望ましさは、聞き手が実現する事態は社会的・一般的に望ましくないものである。この形式は話し手個人の望ましさとしては使えない。

(138) 個人的な望ましさ：(食事中的話し手が、たばこを吸おうとしている隣席の客に)

？タバコを吸うことはできません。

このように、不可能形式は社会的な道徳や規範から禁止をするため、個人的な願望や不満の

表明にも使われない。

- (139) a. 願望：(空を見上げて) *明日、雨は降ることはできない。
b. 不満：(旅行に出かける日の朝、窓を開けると雨が降っている)
*こんな日に降ることはできない。

3.3.6 まとめ

本節では不可能形式における禁止表現の使用実態、使用条件を語用論的な観点から分析した。不可能形式は含意によって禁止の機能を持つ。直接的な禁止ではないので、フェイスを侵害する危険性が非常に高いと判断される場合に用いられる、ポライトネスの程度の非常に高い表現である。

「能力不可」の場合には、望ましきの規範は話し手によるものであるが、あくまで間接的な発話行為であり、話し手が直接禁止すると言うよりも、「望ましき」が聞き手の行動を禁止すると捉えるべきである。また「予防的禁止」のみで、「制止的禁止」は定義上、不自然である。

「状況不可」においては、望ましきの規範は話し手と聞き手の双方を含む社会や世界のありようである。ここでも、話し手が直接禁止しているのではなく、「望ましき」が聞き手の行動を禁じている。「予防的禁止」も「制止的禁止」も可能だが、個人的な願望や不満の表明には使われない。

「能力不可」「状況不可」のいずれの場合も、聞き手が行為の実行に対する望ましきの規範やルールを知らず、話し手がそれを提示し、行為の実行をやめるように発話するものである。

3.4 否定形式の意味

現代語の禁止として「行かない」「行きません」「行くんじゃない」という否定表現がしばしば見られる。

- (140) a. おしゃべりしない！ (富樫・中沢 2007 : 1)
b. そんな腐ったもの食べない！ (同上)
- (141) a. 飛び込みません。(プールの掲示板)
b. (廊下を走っている小学生に先生が) 走りません。

(142) a. 「俺も困ってるんだ。ここだけの話だからな。だれにもしゃべるんじゃないぞ！」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『パラレル・ワールド』)

b. 「あいつにやられるんじゃないよ、ハリー—杖を離すんじゃないよ！」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』)

このような否定形式で禁止を表すためにはどのような条件が必要なのであろうか。また、「するな」や「してはいけない」などと、どのように異なるのであろうか。本節では、否定文の意味特徴を概観した後で、否定文形式による禁止を形式ごとに詳しく分析する。

3.4.1 否定文の諸側面

金水・工藤・沼田（2000）によれば、否定文は肯定とは矛盾関係にあり、主語と述語とのむすびつきを否定する文否定であり、単一概念を否定するのではなく、主語と述語の結合を否定するものである。また、基本的な文の場合には、次の表のように、命題の側面の否定なのか、モーダルな側面の否定なのかが形式上区別できないという。つまり、否定では、例えば、「シナイ、寒クナイ」が「非存在」を、「シハシナイ、寒クハナイ」が「否認」を表すという明確な分化ができるわけではないとしている。

命題的側面 \ モーダルな側面	断定（主張）	否認
	スル 幸セダ	シナイ（シハシナイ） 幸セデハナイ
存在		
非存在	シナイ 幸セデハナイ	シナクハナイ 幸セデナクハナイ

表 8 非存在と否認（金水・工藤・沼田 2000 : 96）

このように、否定文は、単なる「しない」形式であっても、存在の否定と否認の両方を表すことができ、形式だけ見ては分からないことが多い。そのため、文脈や実際の発話状況から語用論的に考察するべきである。

山田（2007）によれば、否定表現法は、日本語の中でも、広がり大きい表現であり、その用法は、他の表現との関わりが大きく、婉曲表現としてもほかの表現の核心部において一定の

位置を占めているという。山田（2007）はまず、否定として使用される場合では、話し手と聞き手がある背景情報を共有しているということが前提として必要されるとして、以下の例文を挙げて説明している。例えば、次の例文（143）のように、友人同士の A と B が、偶然道端で出会った時の会話において、B の否定の発話が自然に成り立つためには、「B の息子がスペインへ行く」という背景情報が前提として必要であると山田は指摘している。

(143) A : What's happening?

B : Oh, my son didn't go to Spain.

（山田 2007 : 40）

この背景情報を A も共有しているということが B の発話が自然に成り立つ前提条件になっているのに対して、肯定文では、(144) のように、このような前提は必要とされないと山田（2007）は述べている。

(144) A : What's happening?

B : Oh, my son went to Spain.

（山田2007:40）

肯定文では、B の発話で B の息子がスペインへ行くことを新しい情報として提示されているのに対し、否定文では肯定形が旧情報としてもともと知られていることとして提示されている。

宮地（1952 : 54）によれば、否定は、基本的には否認・否定の心意に支えられているため、意味作用がかなり複雑である。そして、否定が「主体の排除の意図の加えられた言語表現であって、単に判断の様式として肯定判断に対立するものではない」として、以下の例を挙げている。

(145) a. まあ、きれいなこと！

b. ?まあ、きれいでないこと！

（宮地1952 : 54）

宮地（1952）は、このような詠嘆的な表現の場合には論理的な否定が介入し難いということ

から、感情的な軽蔑の表現や、丁寧な婉曲の表現における否定形式には、単なる論理的な否定ではなく、心理的な否定が感じ取れるとして、否定形式には、話し手のなんらかの情意が込められているという。

以上、否定文の一般的な特徴を見てきた。以下では、これが禁止用法とどのようにつながるのかを見ていく。

3.4.2 「しない」

否定文では、対応する肯定形の命題が前提として話し手と聞き手の双方に共有されていることを見た。否定形式による禁止表現においても当該行為の実行が前提となっている。例えば、「走らない！」という否定文による命令は、「走る」という行為が前提としてある場合に用いられるのである。言い換えれば、否定形式による禁止は、聞き手がすでに実行している行為をやめるように動作や状態の中断を求める「制止的な禁止」を表し、聞き手がまだ実行しておらず、未来に行われる可能性のある動作を行わないよう要求する「予防的な禁止」ではないということである。

(146) a. (横を向いて運転している人に)

よそ見しない！

b. (前を向いて運転している人に)

*よそ見しない！

(147) a. いいか、そこに行ったら、聞かれても何も言うな。

b. ?いいか、そこに行ったら、聞かれても何も言わない。

次の例は、反例に見えるがそうではない。息子が実際に手を伸ばす前であっても、母親にとって、息子が触ろうとしていると判断されるのであれば、その行為はすでに始まっていると言える。

(148) (飲食店にて、店の備品に触ろうとする息子に、母が)

さわんないよ。

笠 (2015 : 58)

上で、否定形式が単なる論理的な否定ではなく、心理的な否定が感じ取れることを見た。否定文による禁止の場合は、聞き手の行為が話し手の理想とは異なっていることを示す。つまり、問題の行為をしないことが話し手の中の理想世界のできごとなのである。言い換えれば、「べきだ」「べきでない」に相当するような、主観的な事態評価であり、かつ、「義務 (deontic)」モダリティでもある。従って、形式だけ見れば単なる否定平叙文であり、禁止としては間接発話行為に見えるが、実際にはモダリティ要素が隠れているとすれば直接発話行為であり、Brown & Levinson (1987) のポライトネス・ストラテジーで言えば、「するな」と同じく、あからさまにフェイスを脅かす *bald on-record* である。

さらに、制止的な禁止にのみ使われ、目の前にあることを今すぐにでもやめさせるように禁止をするため、願望には使えない。

- (149) a. (空を見上げて) ? 明日は降らない。
b. (木になっているリンゴを見ながら) ? 落ちない!
c. (寝ている人を見ながら) ? 起きないよ。

また、個人的な願望が叶えられなかった不満や、制止できないことにも使えない。

- (150) a. (旅行に出かける日の朝、窓を開けると雨が降っている)
? こんな日に降らない。
b. (落ちてしまったリンゴを見ながら) ? 落ちない!
c. (起きてしまった人を身ながら) ? 起きないよ。

また、話し手の理想は一般的に望ましくないものでもあり、しばしば叱責のニュアンスを帯びる。

- (151) a. 個人的な望ましさ: ? 聞かれても何も言わない。
b. 社会的道徳・規範: こんな時にマンガなんか読まない。

このような禁止表現は、ほとんどの場合、話し手のほうが明らかに上位にある場合に、行為の中断に対する要求として使われることになる。

- (152) a. (テレビを見ながら勉強している子供に) 勉強中はテレビ見ない！
 b. (テレビを見ながら仕事をしている父親に) ?仕事中はテレビ見ない！
- (153) a. (教師が生徒に) 喧嘩をしない！
 b. (生徒が教師に) ?体罰をしない！

行為の実行に対する望ましさの規範は話し手の主観的な規範である。そしてその規範の中に、聞き手の行動を取り込もうとする行為でもある。その図式は以下に示す。

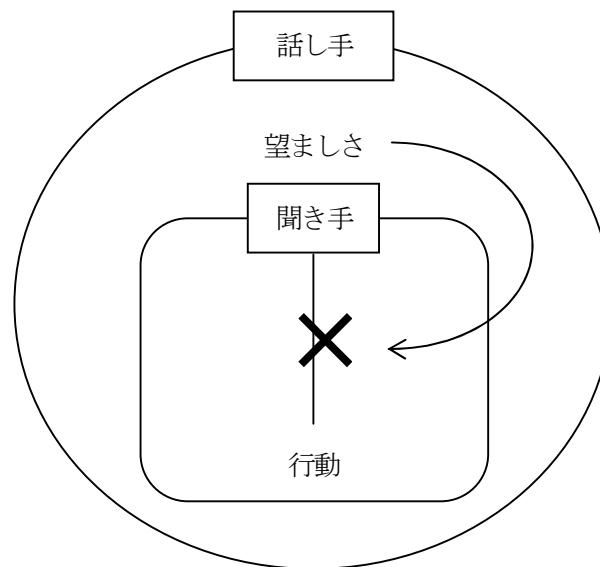


図7 「しない」形式による禁止

3.4.3 「するんじゃない」

「するんじゃない」という形式は動詞に「の」が後続した説明のモダリティの否定形式である。この形式の叙述文には、強調や詠嘆というような話し手の感情表出の意味があると益岡（2007：86）は述べている。

この形式の禁止について、Yoshida（2006：445）はとても強い禁止であるとしている。本研究では、この形式による禁止が、なぜ強いのか、その使用条件と意味を以下で明らかにする。

「するんじゃない」形式は、叙述文の場合、事情説明の否定形式である。この形式の意味を明らかにするためには、まず肯定の事情説明の文末のモダリティ表現「のだ」を見ていく必要がある。

益岡（1991）によれば、「のだ」は、名詞を基盤とした「XはYだ」という名詞文を拡大し

た拡大名詞文である。益岡（1991）は「のだ」をモダリティの中の「説明のモダリティ」としている。説明のモダリティには、「のだ」「わけだ」「(という) ことだ」「ものだ」があり、名詞の「の」「わけ」「こと」「もの」を中心にした組み立てになっている点がこのモダリティの特徴であるという。さらに益岡（1991：199）は、(154) は、叙述されている事態が存在するか否かを問題にしているのに対して、(155) は、ある事態の存在を前提とした上で、その事態の叙述の仕方を問題にするのであるとし、それぞれ「存在判断型」と「叙述様式判断型」と名付けた。

(154) 選手たちは泣いていない。 (益岡 1991：199)

(155) 選手たちは泣いているのではない。 (益岡 1991：199)

益岡（2007）さらに、上で述べた「叙述様式判断型」の「のだ」の多くは、次の例のように、「のではない」と組み合わせて使用されるとしている。

(156) 私のなかを吹き抜ける風が書いたのだ。「私」がそれを書いたのではない。

(益岡 2007：87)

(157) 己は休暇中に地方に発掘に行く費用や欲しい本を買いたいために、心にそまぬながら、その仕事をしたのだ。彼らの洋食代や映画代を出すために仕事したのではない。

(益岡 2007：87)

(158) スタンダールはナポレオン法典に学ぶといったので、詳説を新聞記事と同じ筆法で書けるといったのではない。 (益岡 2007：87)

益岡（2007）は、これらの例では、「のだ」は聞き手の想定を訂正するために用いられているとし、例えば、(156) においては、「私がそれを書いた」という想定を訂正して、実際には「私のなかを吹き抜ける風が書いた」というのが適切だという意味であるという。この解釈は、田野村（1992）にも見られるものである。田能村（1992）は、「のではない」は、あることから α を受け、その背後にある事情は β ということではないと述べるのに用いられるとしている。例えば、以下のような例文が挙げられ、濡れた地面について、「地面が濡れている（ α ）のは、雨が降った（ β ）ということだ」と誰かが考えたり述べたりすることが予測される場面において、以下の文が発せられるという。

(161) 雨が降ったんじゃないありません。

(田野村 1992 : 82)

田野村は、この文は、その予測される誰かに対して、このような状況において、その誰かの判断や発言を否定するために用いられるとして、この否定の背後には、不適當な β に代わるべき命題 β' がしばしば予定されているという。さらにその予定には、例えば以下のような発言が続くことが予想されるとして以下の例を挙げている。

(162) そうではなく、私が水を撒いたんです。

(田野村 1992 : 82)

田能村 (1992) は、このような β' については、明示されなくても、文の意味や文脈、常識などから明らかなこともあるとして、以下のような例をさらに挙げて説明している。

- (163) a. 間違ってもらっちゃ困るが、遊びに行くんじゃないからな。
b. おそらく、著者はそこまで考えてこの文句を引用したのではない。
c. 疑っているんじゃないありませんが、身分証の提示をお願いします。

(田野村 1992 : 83)

これらの例文において、田能村 (1992) は、不適當な β に代わるべきの β' は、その背後に以下のようなことが当然のこととして考えられ、当然のこととしての β' であるため、表現するに及ばないとしている。

- (164) a. 仕事をしに行くのだ。
b. あまり考えずに引用したのだ。
c. 規則で決められているからだ。

(田野村 1992 : 83)

益岡と田野村の二つの先行研究をまとめると、「のではない」の意味は、聞き手が想定している β ということからを、話し手は「のではない」という形式によって、 β ではなく、 β' であるという訂正を行うということである。この β' は、実際の会話の文脈には現れないかもしれないが、それは背後の認識としてあり、必然的に含意されているものである。実例を見ても

この指摘が当てはまり、文脈に訂正の β' も表されているのが分かる。

(165) 僕は君や君の将来のことだけを思ってこんなことを言っているんじゃない。それは、僕自身のためでもあるんだ。 (現代日本語書き言葉均衡コーパス『ブリュー』)

(166) 「黒船に乗ってきたつもりなのかもしれないわね。でも私は脅しにのったんじゃない。こうしたほうがいいと自分で判断したからなの」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『七色の逃げ水』)

これらの文は、訂正される β ではなく、 β' を重点として言っているのである。これは、禁止においても言えることである。禁止として使われる「のではない」は、その文法化の度合いが進むにつれて「するんじゃない」という短縮した形式になっている。その文法化の度合いは第4章で分析するが、ここでは「するんじゃない」形式による禁止表現の行為の実行に対する望ましさについて考えて見る。

この形式は、「否定形式+のだ」で構成されているため、その性質は、否定形式の性質を間接的に受け継いでいると考えられる。否定形式による禁止は、行為の実行に対する望ましさは客観的な望ましさであり、その望ましさの規範は話し手と聞き手の共同社会が持ち主である。さらに、話し手と聞き手の上下関係に関しても、「するんじゃない」形式は否定形式と同じように、上位にいる話し手から下位の聞き手へ発せられるもので、ポライトネス・ストラテジーで言えば、「するな」と同じく、あからさまにフェイスを脅かす bald on-record である。また、話し手の理想は一般的に望ましくないものでもあり、しばしば叱責のニュアンスを帯びる点も「しない」形式と共通している。

とはいえ、否定形式と「するんじゃない」形式は全く同じというわけではない。否定形式と「のだ」が複合することによって、「のではない」の叙述文の性質を受け継ぎ、望ましくない β を再度認識させるだけでなく、望ましい行為として、 β' を提示するのである。

本研究では、「のではない」形式の禁止表現、つまり、「するんじゃない」形式を日本語書き言葉均衡コーパスにおいて検索した。81例あるうち、禁止の用法の例文は16例あった。その比率は、五分の一に及んでいる。これらの用法は、後続する文脈に話し手において望ましいとされる β' が提示されるものが大半であった。例えば、以下のようなものがある。

(167) 「さっきはあいつで、今度は僕に鞍替えか。とにかく、島から一步も出るんじゃない。

連れていきたくになったら、僕が迎えに来る。が、今はまったくきみには愛想がつきたよ」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『夜ごとの夢』)

(168) 「バフェットに指輪なんか売るんじゃない。店を売るんだ！」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『バフェット投資の真髄』)

これらの例のように、望ましくない β と望ましいとされる β' が文脈に現れるものが少なくない。禁止表現に関して、当該行為がもちろん望ましくない β であり、望ましい β' は、その禁止される行為の反対の肯定の行為である。このことは当たり前のことでありながら、これらの例文では繰り返し言われている。この繰り返しには、「強調」の意味合いが感じ取れる。つまり、聞き手のすでに認識されていることについて、話し手はしないようにする要求を強調してやめさせているわけである。

「のではない」形式における「訂正」の態度が、「するんじゃない」形式の禁止を表現する場合、禁止の機能にもは「強調」として現れる。「するんじゃない」形式は、望ましくないと知っていながらも当該行為を実行することに対して、再度提示することによって、禁止を強調しているのである。言い換えれば、「当該行為が望ましくない行為である」ことを強調して行為の実行を中断させるのである。以下の例では、禁止と同時に、強調として、肯定の命令が文脈に現れている。

(169) 「だったら消えろ。人の庭に土足で踏みこんでくるんじゃない。一一〇番するぞ」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『秋に墓標を』)

(170) 「ガキのくせに生意気なこと言ってんじゃない。ママのところへ帰りな。」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『愛しい標的』)

これらのように、「するんじゃない」形式による禁止の文脈に、強調してさらに反対の行為の肯定命令が発される場合が少なくない。このような強調の意味合いが、「するんじゃない」形式の特徴である。

また、先に、「しない」形式では、対応する肯定形の命題が前提として話し手と聞き手の双方に共有されており、当該行為の実行が前提となっていることをみた。つまり、聞き手がすでに実行している行為をやめるように動作や状態の中断を求める「制止的な禁止」を表し、聞き

手がまだ実行しておらず、未来に行われる可能性のある動作を行わないよう要求する「予防的な禁止」ではない。

これに対して「するんじゃない」形式では肯定命題と否定命題が直接対立しておらず、モダリティの「のだ」を介している。したがって、当該行為の実行は「事實的 *realis*」でもいいし、「非事實的 *irrealis*」であってもよい。つまり「するんじゃない」形式は「制止的な禁止」も「予防的な禁止」も表しうるのである。

(171) 制止的な禁止

- a. 嘘を言う奴はいくらもいるけど、自分で自分に嘘をつく奴なんて初めてだ。だったら、なぜ、君以外のグループ員があんなに[ほうき隊]から逃げまわるんだ。でたらめ言うんじゃないよ。(現代日本語書き言葉均衡コーパス『方舟さくら丸』)
- b. 原野が「ふあふあふあ」というような、少しだらしない笑い方をした。「あんた、笑うんじゃないよ」井口が警察官らしく、窘めた。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『札幌殺人事件』)

- c. ああ、もうみんなだめになっちまった—もうわしの家は終わりだ!」「そんなに興奮するんじゃないよ、グリフィンさん」と、〈落伍者〉と言われているあの男が、気持ちを落ち着かせるように言った。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『水源の秘密』)

(172) 予防的な禁止

- a. 「野党が委員長をかこんでも、こちらは絶対に席を立たないように。挑発には、決して乗るんじゃないぞ。」(現代日本語書き言葉均衡コーパス『小沢一郎の挑戦』)
- b. 「じゃあ行け。ふり返るんじゃないぞ」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『ひらひら』)

- c. 「死ぬなよ。いいな、絶対に死ぬんじゃないぞ。」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『星ものがたり』)

「制止的な禁止」も「予防的な禁止」も表しうることから、「不満」や「願望」という含意も生じる。特に「するんじゃない」形式には、上述の通り「当該行為が望ましくない行為である」ことを強調して行為の実行を中断させる性質があるため、不満の用例は非常に数多く見つかる。

(173) 不満

- a. 「ケチャップこぼしたくらいで、いちいち一〇番なんか、するんじゃないよ。
…ったく」 (現代日本語書き言葉均衡コーパス『犯人さがして、宇宙旅行』)
- b. 「いつまでも子供みたいに泣いてるんじゃないよ！ だいたいお前が国光をあん
なふうにいじめるからいけないんだよ！」
(現代日本語書き言葉均衡コーパス『アウトオブチャンバラ』)
- c. 「失礼ね。いったいあたしをなんだと思ってるの」「がたがた言うんじゃないよ。
このガキ」 (現代日本語書き言葉均衡コーパス『青春の門 墮落篇 下』)

「願望」の用例は見つけられなかったが、不可能ではない。ただし、「ぞ」や「よ」を伴って強調されるのが普通である。これらの終助詞がなければ、単なる制止的な禁止と解釈される。

- (174) a. (空を見上げて) 明日は降るんじゃないぞ。
- b. (木になっているリンゴを見ながら) 落ちるんじゃないぞ！
- c. (寝ている人を見ながら) 起きるんじゃないよ。

以上をまとめて図示すると以下のようになる。

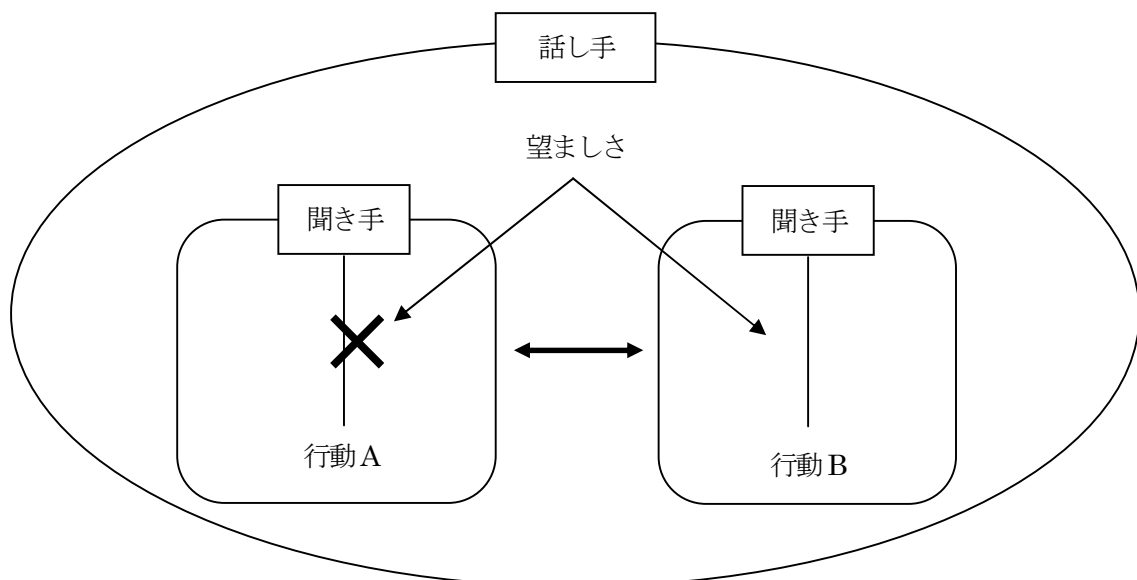


図8 「するんじゃない」形式による禁止

3.4.4 「しません」

容認度に個人差はあるものの、近年、「しません」形式による禁止の使用が見られるようになってきた。

- (175) a. 飛び込みません。(プールの掲示板)
b. (廊下を走っている小学生に先生が) 走りません。

これらのような禁止は、主に幼児、児童の低学年に使われ、大人にはあまり使われない。これらは、「するな」のような直接的な形式は、子供に対しては強すぎるように感じられるからであろう。そのため、丁寧語形式の「はしりません」という否定形を使うことによって、こどもに行為に対して「スクリプト」を直接導入する表現である。これらの形式による禁止は、子供向けの規則やハンドブックなどの箇条書きによく使われる。つまり、「予防的な禁止」としてのみ用いられる。

- (176) a. 登校途中で忘れ物に気づいても、取りに帰りません。
b. 用がないのに、よその教室や特別教室に入りません。
c. 必要のないお金や物は、学校に持ってきません。
d. 道路・駐車場・工事現場・線路など危険なところで遊びません。

(以上『坂井輪の子ども』)

このような形式による禁止の望ましさも社会的な客観的望ましさである。個人的な願望を表すことはない。

- (177) a. (空を見上げて) ? 明日は降りません。
b. (木になっているリンゴを見ながら) ? 落ちません!
c. (寝ている人を見ながら) ? 起きません!

社会的な望ましさに基づく禁止である点は「状況不可による禁止」に近いが、「しません」の最大の特徴は、口頭ではないことが多いために話し手が見えにくいことであろう。また丁寧語であるため、やや柔らかく聞こえる。これを点線で表すと以下の図のようになる。

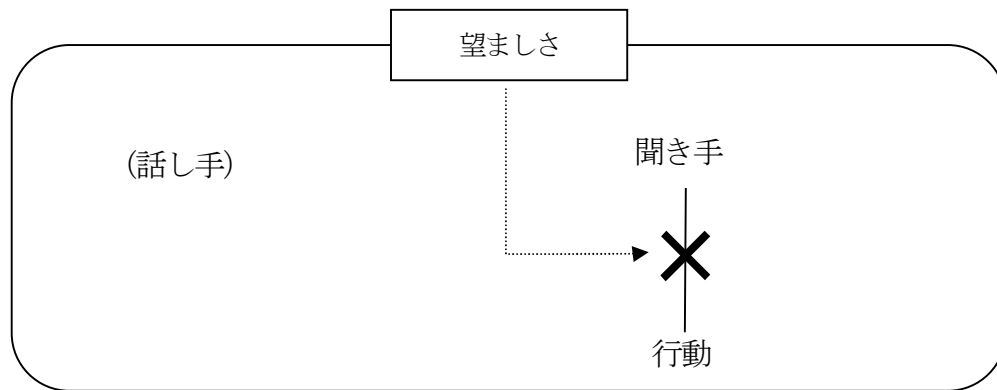


図9 「しません」による禁止

3.4.5 まとめ

否定形式における禁止表現は、肯定命題と否定命題が直接対比され、現在行われている、あるいは行われようとしている行為にたいして、その否定形を望ましいものとして提示する禁止表現である。これに対して「するんじゃない」形式はモダリティの「のだ」を介しているため、非事実的であってもよく、予防的な禁止にも用いられる。最後に、子供などに対して、社会的に望ましくない行為を提示する、軟らかい予防的な禁止表現「しません」が広がりつつあることを見た。

3.5 第3章まとめ

本章では、語用論的観点から、現代日本語における禁止表現の典型的な形式「するな」とそれに代用される形式、それぞれの意味、使用条件、形式的な意味、禁止表現としての意味、それぞれの相違を明らかにした。その結果、「するな」形式の頻度が低いのは、単に丁寧度の低い強い禁止だからというだけでなく、代替表現に「するな」にない様々なニュアンスがあり、使用場面も異なるからであることが分かった。これらの禁止表現のそれぞれの主要な特徴を表す図を再掲する。

まず「するな」は話し手自身の持つ望ましさに基づいて、直接、相手の行動の制限を制限する発話行為である。「否定的な評価」が含まれやすいため、しばしば「不満の表明」の意味や、話し手の否定的な評価として使われる。

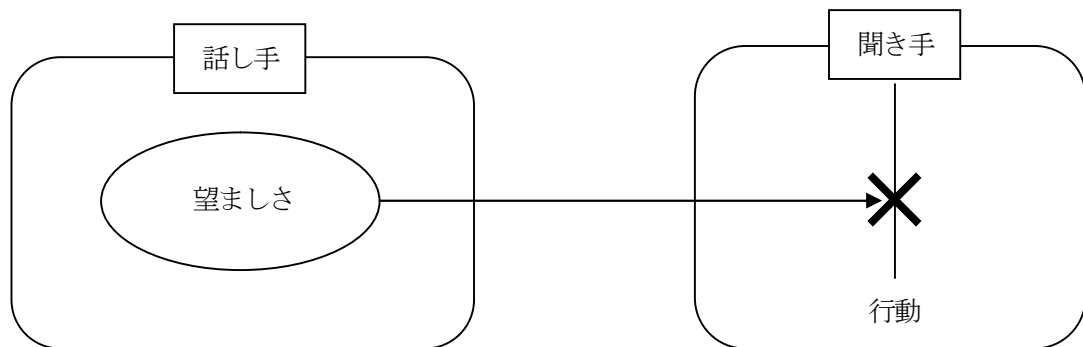


図4 「するな」形式の禁止

「してはいけない」形式は、禁止される行為や事態に対する「するべきでない」という望ましくないとする規範は、社会的なものからきている。「予防的禁止」と「制止的禁止」のどちらにも使える。「制止的禁止」には不満のニュアンスが感じられることもあるが、社会性のない無生物や意図的には不自然である。

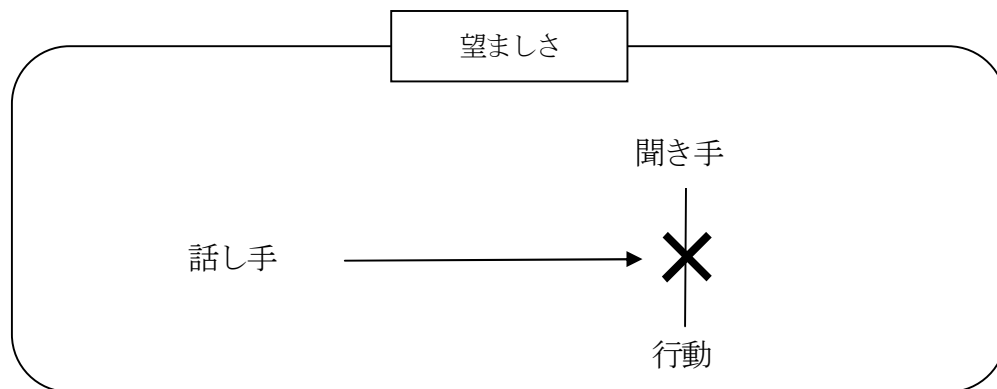


図5 「してはいけない」形式の禁止

「能力不可」の場合には、望ましさの規範は話し手によるものであるが、あくまで間接的な発話行為であり、話し手が直接禁止すると言うよりも、「望ましさ」が聞き手の行動を禁止すると捉えるべきである。また「予防的禁止」のみで、「制止的禁止」は定義上、不自然である。また話し手と聞き手の関係は、話し手が親や、先生、コーチである場合など、限られた関係にしか見られない。「状況不可」においては、望ましさの規範は話し手と聞き手の双方を含む社会や世界のありようである。ここでも、話し手が直接禁止しているのではなく、「望ましさ」が聞き手の行動を禁じている。「予防的禁止」も「制止的禁止」も可能だが、個人的な願望や不満の表明には使われない。

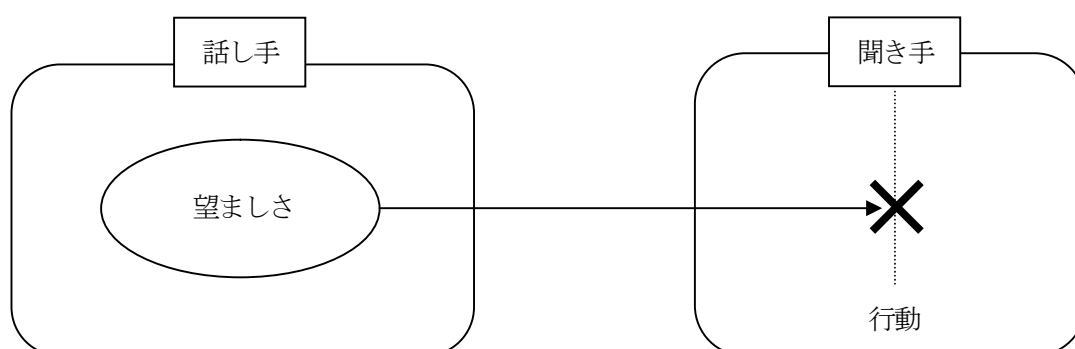


図6 能力不可による禁止

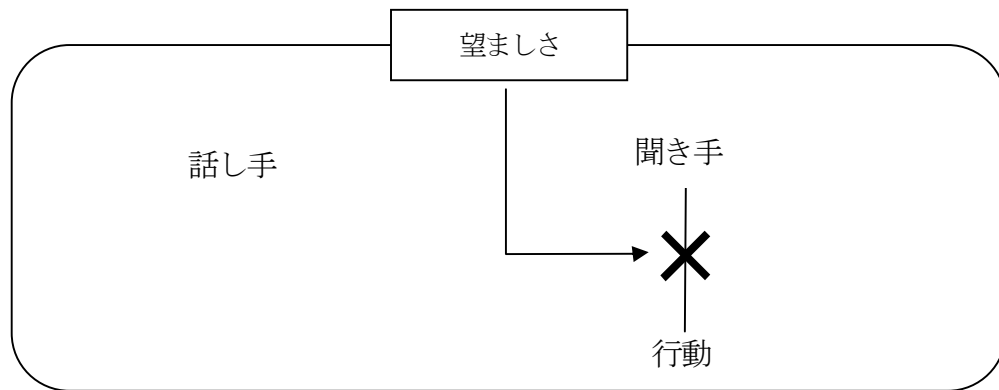


図7 状況不可による禁止

「しない」はあからさまにフェイスを脅かす bald on-record の形式である。話し手の望ましさに反する行為を制止するために用いられ、予防的にも願望・不満にも使えない。

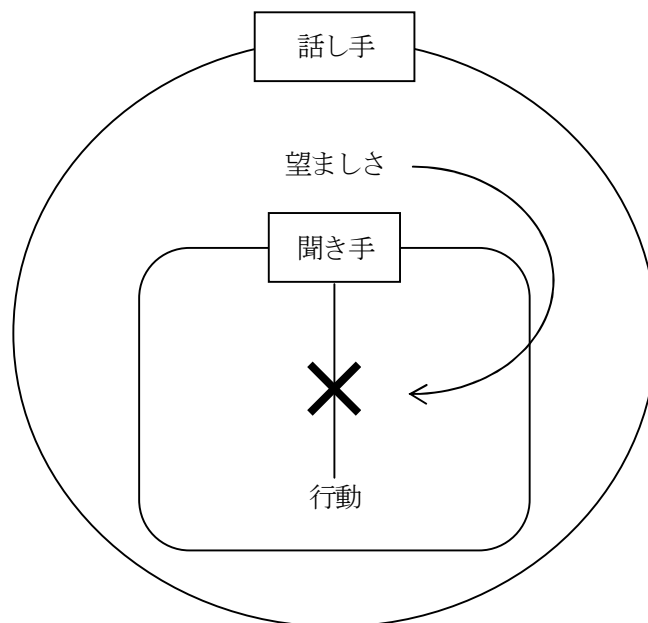


図7 「しない」による禁止

「するんじゃない」形式は話し手が望ましい行為と思う行為と、望ましくないともう行為を対比させつつ行う禁止で、強意的である。「制止的な禁止」も「予防的な禁止」も表しうることから、「不満」や「願望」という含意も生じる。

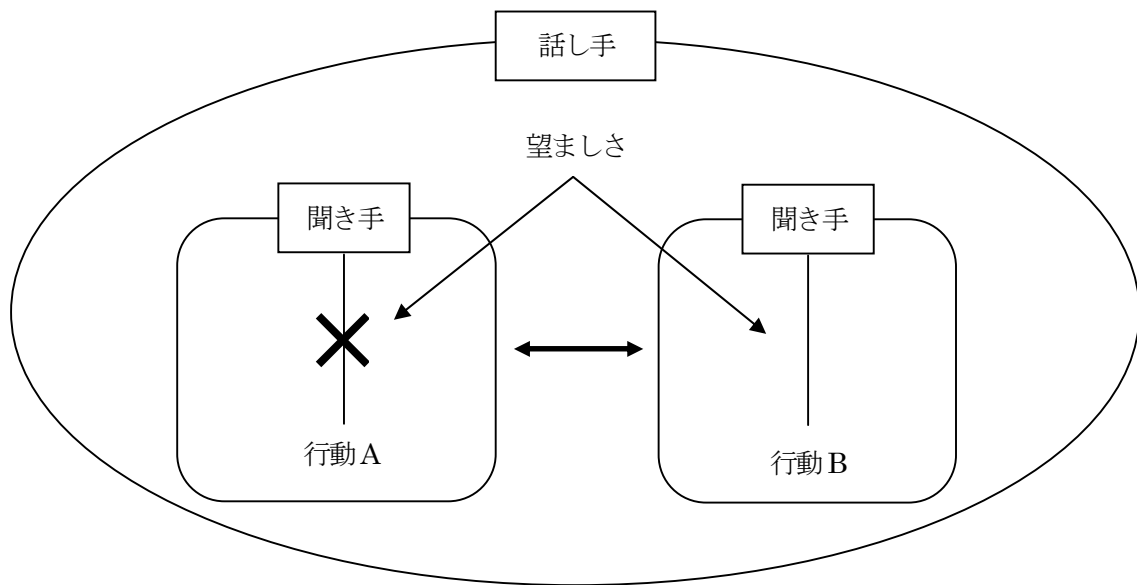


図8 「するんじゃない」形式による禁止

「しません」形式は社会的な望ましさに基づく禁止である。話し手の存在が希薄である点と、丁寧語であるため、やや柔らかく聞こえることが特徴である。

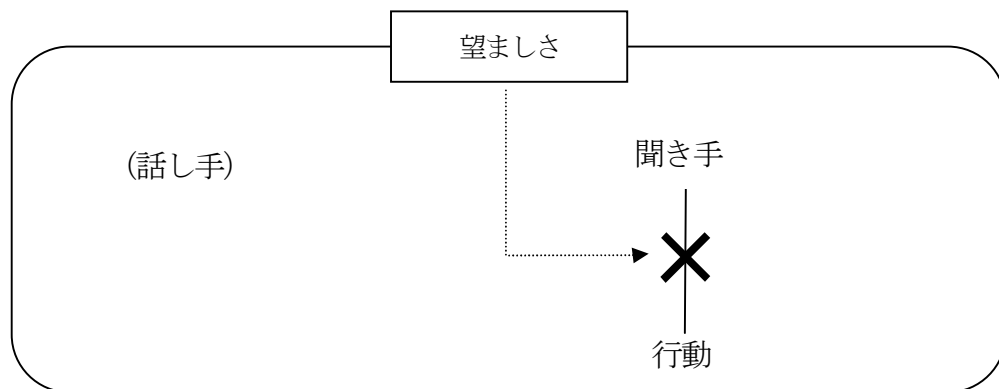


図9 「しません」による禁止

第4章 文法化の度合いとプロセス

4.1 文法化

文法化 (grammaticalization) とは、内容語が機能語へと変化するプロセスである。文法化の研究は、そのようなプロセスの全体を明らかにするものである。先行研究では音韻的弱化 (reduction)、語義や構文レベルでの意味変化が複雑に絡み合うこの変化から、文法と語彙の連続性が明らかになってきた。この点は例えば Givón (1971:413) の「今日の形態論は昨日の統語論である (Today's morphology is yesterday's syntax)」という言葉によく表れている。Givón (1971) はさらに、以下のような言語変化のダイナミズムを示している。

(1) 言語変化

談話 (discourse) > 統語 (syntax) > 形態 (morphology) >
形態音韻 (morphophonemics) > ゼロ (zero)
(Givón 1971:413)

Givón (1971) のこの理論は、文法が変化するプロセスを大きなスケールで捉えている。これに対して、ある形式の文法化の程度に関する基準の研究には、Lehmann (1995) がある。Lehmann は文法化の程度を、記号の自立性の程度の基準と考え、それによって以下の六つのパラメータを提案している。

(2) Lehmann の六つの文法化の程度に関するパラメータ。

- a. Integrity (完全度)
- b. Paradigmaticity (範列度)
- c. Paradigmatic variability (範列的可変度)
- d. Structural scope/Condensation (構造スコープ度)
- e. Bondedness (結合度)
- f. Syntagmatic variability (統辞的可変度)

まず、(2a) の完全度とは、ある記号が、他の同じクラスに属する（すなわち範列的關係にある）記号と比べて、意味的、音韻的にどの程度完全であるかに関わるものである。例えば、「てあり」と「たり」を比較すると、「てあり」の方が「あり」という存在の意味を持つ語彙

をはっきりと含んでおり、音韻的にも完全である分、完全度が高いことになる。つまり完全度は文法化が進めば進むほど減少すると言える（宮下 2006 : 27）。

次の（2b）範列度は、ある記号が言語の変化パラダイムのなかにどの程度組み込まれているかに関わるものである。ある記号の文法化が進めば進むほど、範列度は高くなるとされる。例えば「たり」を連用形に接続する助動詞のパラダイムの一員であると考えれば、動詞を含む「てあり」に比べて範列度が高く、文法化の度合いが高いと言える（宮下 2006 : 27）。

三つ目の（2c）範列的可変度はある記号が文法化した場合の、範列上の自由度や義務的度合いに関わる。例えば「てあり」の段階では、「てはべり」などのように範列的な置き換えが可能であったはずであるが、現代語の「た」は過去を表す場合にほぼ義務的に用いられる形態素になっており、「行った」「書いた」のように、音韻的に本来の動詞の語形が保たれない場合もあり、他の要素との範列的な置き換えは限定されている（宮下 2006 : 27）。

次に（2d）構造スコープ度は、ある記号がそれと統辞的關係にある他の要素とどの程度の重点性の差があるのかに関わるものと考えられる。例えば「行きてあり」という統辞關係の段階では、「行きてあり」の「てあり」の意味はその音韻的な形とともに統辞的にみてまだ重点性がみて取れるが、「行きたり」の場合は、すでに意味的、音韻的に「行き」の方に重点が置かれるようになっている（宮下 2006 : 27-28）。

次の（2e）結合度は、ある記号が他の記号とどの程度緊密に結合しているかに関わるものである。例えば「てあり」の段階では「て」「あり」と分割可能だが、「たり」は分割できず、すでに一つの単位となっているといった例が、この結合度の違いを示すものとしてあげられる。この結合度が高いほど、文法化の度合いは高くなる（宮下 2006 : 28）。

最後の（2f）統辞的可変度は、統辞的な自由度に関わるものである。この例として Lehmann (1995 : 158) があげているのは、古典ラテン語の不定詞と所有動詞の統辞的結合 *epistulam scriptam habeo* 「書かれた手紙を私は持っている」である。古典ラテン語ではこの結合は統辞的に見て自由度があり、さまざまな語順が可能であったという。しかしそこから派生したイタリア語の対応表現 *ho scritto una lettera* 「私は手紙を書いた」では、もはやそれぞれの語順は固定されている。イタリア語ではもはや統辞的な自由度はみられなくなっていることから、ラテン語に比べて文法化の度合いが高くなっていると言える（宮下 2006 : 28）。

以上の Lehmann の六つのパラメータについて、（2d）の構造スコープ度の有効性が疑問視されることがあるものの、これらによってある形式がどの程度文法化しているのかを把握しようとすることは、とくに（2f）の統辞的可変度においては、多くの研究でも試みられてきた。そ

のため、本研究でも、特に「してはいけない」「しちゃだめ」「するんじゃない」のような複合形式の文法化については、この Lehmann のパラメータに基づいて考えることにする。

さらに、このような文法化の度合いを考察するパラメータとは別に、主に意味の側面からの文法化を考察しようとする理論や方法がある。その代表的な研究として、Traugott (1982) の文法化の際にみられる意味変化の一般的な傾向がある。その傾向は、以下の (3) のようなプロセスである。

(3) 命題的 (propositional) > テクスト的 (textual) > 感情表出的 (expressive)

(宮下 2006 : 30)

このような傾向のプロセスは、日本語にも見られる。Matsumoto (1988 : 340) は、以下の (4) のように、「が」の本来の意味は二つの命題を逆説的に連結する働きであるが、新しい用法では、独立して談話標識というテキスト的な機能を帯びるようになるという。

(4) 太郎は若い、よくやるよ。 > 太郎は若い (よ)。が、よくやるよ。

(宮本 2006 : 30)

この例文には命題的な用法からテキスト的な用法への変化が見られる。本研究において考察する禁止表現の文法化もこのようなプロセスをたどっていると考えられる。その変化の動機に関しては、先行研究では Hopper and Traugott (2003) がある。Hopper and Traugott (2003) は、文法化が起きる動機付け (motivation) として、語用論的推論 (pragmatic inference) をあげている。つまり、ある言語形式が決まった文脈において頻繁に会話の含意が含まれ、それが次第に習慣化されて、習慣的含意 (conventionalized implicature) になる。そしてその言語形式は新しい解釈に基づき、意味的、構文的、形態的な内部構造の修正という再分析 (reanalysis) が起こる。最後に、再分析によって規則の拡大が起こり、一般化という結果にたどり着いて、文法化が起きたということになるのである。Hopper and Traugott (2003) によると、会話的含意が習慣的含意になり、その形式に再分析が起こるには、頻度が必要であるという。その文脈が頻繁に起こると、文法化が確認できるのである。

文法化のモダリティの変化の方向性としては、Sweetser (1990) によって、以下のような傾向が挙げられている。

(5) 義務的モダリティ (deontic modality) > 認識的モダリティ (epistemic modality)

(宮下 2006 : 31)

このような変化の例として、英語の *must* の「しなければならない」という義務的なモダリティ (deontic modality) から、「に違いない」という認識的モダリティ (epistemic modality) への変化があげられている。Sweetser はこの変化を、社会・物理的領域から認識的領域へのメタファーの適用であるとしている。本研究の評価のモダリティは、deontic modality に属するものである。本研究における文法化の考察において、日本語の義務的モダリティがどのような変化を遂げているのかについて考えていく。

また、Croft (2003 : 253) によれば、文法化とは語彙項目が特定の文脈において文法的機能を発達させるもので、文法化は根本的には統合的 (syntagmatic) であるという。また、このプロセスは一方的であり、循環的であるとして、語彙項目からなる文法的形態素は消失してしまうが、新しい語が文法的形態素になったとき、再び現れるとする。つまり、Croft (2003 : 255) によれば、文法化の過程は次のようなものである (訳語は秋元 2004 : 28 による)。

(6) 音韻的なもの

統合的 (syntagmatic)	合体 (coalescence) : 自由形態素 > 接語化 > 接辞化 > 消失 複合化
	順応 (adaptation) (同化を含む)
系列的 (paradigmatic)	摩滅 (attrition) : 減少 / 侵食 > 音声的消失
形態統語的	
統合的	厳格化 (語順) (rigidification [word order]) : 独立した統括的地位の消失 > 形態論的融合 > 消失
系列的	義務化 > 化石化 > 形態論的消失 系列化 (paradigmaticization) : 開かれたクラス > 閉じられたクラス > 普遍的要素
機能的	
統語的	イディオム化 (idiomaticization) : 合成的・分析的 > 非合成的・分析的 > 非分析的
系列的	主観化 > 機能の消失

秋元（2004）は、上記の Croft（2003）を以下のように説明している。合体のはっきりした状態を確認することはしばしば困難で、接語化、複合化、接辞化への区別は難しく、はっきりしない例があり、一つの連続体と考える方がいい。

順応とは環境によって、形態素を音韻的に変えることで、英語の *going to* > *gonna* では [ŋ] から [n]、[t] から [n] に変わっている（秋元 2004 : 28）。

厳格化とはかつて自由であった語順が固定することを言う（秋元 2004 : 28）。

義務化の例としては、フランス語の *pas* があり、否定を表すものは、かつて *pas* 以外にもあった（Hopper and Traugott 2003）が、その内 *pas* に限られ、なおかつ、*pas* は否定表現では義務化した（秋元 2004 : 28）。

イディオム化とは全体の意味が成分から引き出せないことをいい、統語的にも全体が一つの成分として分析され、機能上の消失（functional loss）を引き起こすものである（秋元 2004 : 28）。

主観化は客観的な命題内容がテキスト的・メタ言語的（metalinguistic）な状況を経て、その命題内容に対して話者が主観的信念・態度を表すに至る変化である、例えば、英語の助動詞 *may* や *must* などの意味が義務的意味から認識的意味へ変化したことなどがその例である（秋元 2004 : 28）。

下記で詳しく分析する禁止表現では、「しちゃだめ」形式における「ちゃ」の変化は順応のプロセスであると考えられる、また、「するな」と「しない」は主観化に関わると考えられる。

以上のような文法化はいったいなぜ起こるのか。これまでの研究では二つの一般的なプロセスが指摘されている。一つはメタファーによる拡大、もう一つは語用論的推論である。本研究において考察する形式は、いずれも語用論的推論によって起こるプロセスだと考えられる。それらのプロセスと文法化の度合いを、以下では、一つずつそれらの歴史的な変遷を先行研究のレビューと用例の実態におけるテストから見た上で、それぞれ現代語において禁止への文法化の度合いを考察していきたい。

4.2 「するな」形式

4.2.1 「するな」形式の史的変遷

「するな」形式の禁止は、細川（1977）、小柳（1996）によれば、もっとも古くは、「一な」と「な一そ」の二つの形式があり、「一な」は話し手の感情を反映した強い禁止を表すのに対して、「な一そ」は当時の禁止表現として広く用いられ、強い禁止から婉曲的なニュアンスの禁止にまで広く使われていたという。細川（1977 : 38）は、この「な一そ」形式は、古くは女

性がこの形式を用いるのも普通であったとしている。その「な—そ」形式の例には、以下のようなものがある。

- (7) うらぶれて物な思ひそ天雲のたゆたふ心我が思はなくに (万葉集 2816)
(落ち込んだりして物思いにふけないで。空の雲のような、浮ついた気持など、私はもっていませんから。)
- (8) 朝鳥早くな鳴きそ我が背子が朝明の姿みれば悲しも (万葉集 3095)
(鳥さん、そんなに朝早くから鳴かないで。あの方が朝になったとお帰りになる姿を見るのはつらいもの。)

また、「な—」の例文は以下のようなものがある。

- (9) 我なしとなわびわが背子ほととぎす鳴かむ五月は玉を貫かさね (万葉集 3997)
(わたしがいないと気落ちしないでください、あなた。ほととぎすが鳴く五月には、玉をお作りになってください。)

上で述べた「な—」や「な—そ」形式の文中用法、つまり「な—」型の禁止表現形式が、平安頃から文末の「そ」だけで禁止の意を表すようになり、それから室町末期にかけて、禁止表現形式のもう一つの形式「—な」に吸収され、次第に文末用法の「—な」だけに定着したとされている。

森 (2013 : 9) も、「するな」という禁止表現の歴史的変遷を、「な—」と「—な」が類推によって統合され、現在の強い禁止表現になったとしている。その過程を、森 (2013) は、次の (10a) から (10e) の五段階に整理している。

- (10) a. 「な+動詞」(禁止／制止) ／ 「動詞+な」(強い禁止)
b. 「な+動詞+そ (=強調語句)」(禁止／制止) ／ 「動詞+な」(強い禁止)
c. 「な+動詞+そ (=否定副詞)」(禁止／制止) ／ 「動詞+な」(強い禁止)
d. 「(な+) 動詞+な」(強い禁止／制止)
e. 「動詞+そ (な)」(強い禁止／制止)

(森 2013 : 9)

森（2013）は、もっとも古くは、強い禁止として用いられていた「動詞＋な」と、あつらえに近い勧誘的な禁止「な＋動詞＋そ」があつて、時代の流れと共に、次第に、文末用法の「一そ」となり、強い禁止の「一な」と一元化したとしている。それらの用法を示す例に、次のものがある。

(11) 龍の首の玉取り得ずは帰り来な。 (『竹取物語』)

(龍の首に掛かっている珠を取ってくるまで帰ってくるな)

上の例（8）（9）に比べて、（11）は一方的な禁止表現としての意味合いが強い。このように、哀願や懇請の意味を持つ、柔らかい婉曲的な禁止表現「な＋動詞＋そ」が衰退して、話者の強圧的な感情態度をあらわす表現「動詞＋な」のみが残ったことになる。この強い態度が現代日本語においても引き継がれており、ポライトネスの観点から使える場面が限られるため、使用頻度が低いと考えられる（李 2016 : 74）。

以上が「するな」形式の歴史的な変遷であり、この歴史的な流れを背景に、現代語における「するな」形式について、その文法化の度合いを以下で見ていく。

4.2.2 「するな」の文法化の度合い

上記の先行研究をまとめると、禁止表現は意味的に「動詞＋否定要素＋強調要素」が「動詞＋否定要素」になるという流れ、また、現代日本語では婉曲的な女性でも普通に使える禁止表現がなくなったことがまず興味深い。

英語圏における命令の発話行為の歴史語用論的な研究によれば、現代社会では避けられる直接的な命令表現が 15 世紀に普通に用いられていたという（Kopytko 1995、Kohnen 2008）。現代日本語においても、英語の場合と同様、「するな」などの直接的な禁止の発話行為は、社会的習慣上、可能な限り避けられる（森英樹 2013 : 10）。

また、2.3.7.4 節でも触れたように、日本語の方言にも命令形式に違いがある。（12）は関西方言の、（13）は首都圏方言の命令形である（森勇太 2013 : 9）。

- (12) a. 行け
b. 行って
c. 行き

- (13) a. 行け
b. 行って
c. 行きな

大阪方言の連用形命令の使用範囲について考察した森勇太（2013）によれば、(12c) のような言い方は、依頼以外の行為指示（命令、聞き手利益命令、勧め）で広く用いられ、特に聞き手利益の行為指示を行う際に、近世期から多くなっているとしている。

このような文法化のプロセスは、Traugott（1995）の言う、一方向的な主観化の意味変化に近いと思われる。Traugott（1995）は主観化を、命題に対する話し手の主観的態度が、次第に表現の意味に取り入れられてゆく語用論・意味論的なプロセスだと考えている。例えば、命題機能から談話機能への拡張がその過程のひとつであるとして、ある形式に語用論的な過程を経て、それまでになかった主観的な意味が加わっていく過程が主観化であるという。「するな」形式に現代語において、「不満」の話し手の態度が出やすいのは、この主観化という文法化のプロセスが起こったからと考えられる。

「するな」形式は、日本語の中でも主観的な言い方の一つである（細川 1972）と言われている。また、この形式は情意表現として用いられやすい。その理由は「するな」形式の文法化に求めることができるのである。

4.2.3 まとめ

「するな」形式の通時的変化は、Traugott（1995）の言う意味変化における主観化に近いと思われる。Traugott（1995）は主観化を、命題に対する話し手の主観的態度が、次第に表現の意味に取り入れられてゆく語用論・意味論的なプロセスだと考えている。例えば、命題機能から談話機能への拡張がその過程のひとつであるとして、ある形式に語用論的な過程を経て、それまでになかった主観的な意味が加わっていく過程が主観化であるという。「するな」形式のような直接禁止を表す表現は禁止表現の中でもっとも情意表現として使われやすいため不満の態度が現れやすいことから、この表現が主観化されつつあり、文法化の度合いが高いと言える。この表現と比較してその他の換用表現の文法化の度合いを考察していきたい。

4.3 「してはいけない」の文法化の度合い

4.3.1 「してはいけない」形式の歴史的成立

渋谷（1988：108）は、上方語・前期江戸語、ともに「ならぬ」（ならない）があったが、江戸後期（化政時代）から「いかない」「いけない」の形が現れてくるとしている。その単独形式には以下のようなものがある。

(14) a. 次郎「いゝことでもあるか。」

忠五「とんといけねえ」

b. お部屋さまのひとづかひのわるひと来たもんだから、いけねへのさ。

（渋谷 1988：108）

渋谷（1988）は、(14) のように、洒落本などにすでに「いけない」形が見えるが、当為表現としては「いかない」の方が先行し、また、単独形式では否定辞が「ん」の場合には、江戸語に限らず東京語でもその大部分が「いかん」の形であるとしている。いずれにしても「いかない」「いかん」のほうが、「いけない」よりも先行する形とみなすことができるという。

また、渋谷（1988）は、「ならない」から「いかない」、さらには「いけない」への変遷は、江戸期に起こったとして、以下の例を挙げている。

(15) a. これこれ、いつものやうに酔てはならねへぜ、もう切あげやう。

b. これさしやれて居てはいかねへ。

（渋谷 1988：108）

渋谷（1988）はこれらの表現の「なる」系から「いく」系への交替は化政期にはじまっており、「なければならない」系の当為表現と歩調を合わせて変化したという。

これらの複合形式に関して、松下（1928）は「なければならない」を「自然的拘束」、「なければいけない」を「意志的拘束」と分析している。渋谷は漱石の作品において、後部要素「いけない」「いかない」は「ならない」に比べて、話し手に対して用いられる割合が多かったとしている。では、このような傾向はどのように生じたのか。

まず、渋谷（1988）によれば、江戸期において、「いけない」の方が新しく、かつ勢力を伸ばしつつあり、「ならない」の方が多少古めかしく感じられる傾向があったという。また、そ

これらの使用域について、渋谷（1988：104-105）が漱石の東京語で観察した結果、「いけない」のほうが圧倒的に会話文に多く用いられる傾向が見られるとしている。

渋谷（1988：111-112）によれば、まず、可能・評価などの様々な意味を表していた「ならぬ」のうち、単独形あるいは名詞と共起して、「だめだ、どうしようもない」のマイナス評価を表す意味の形式として、「いかない」が使用され始めた。渋谷（1988）は、その時期は江戸語期以前（18世紀中期以前）のことと思われるが、確かな時期は不明であり、また、なぜ「いかない」を用いるようになったかについてもよくわかっていないという。

次に、「いかない」から「いけない」への変化は、明和期（18世紀中期）にはすでにかなり進行していたものであり、特殊な位相・意味においてはああるが、「いけるのじゃねー」が「いける女ではない、いい女とはいえない」という意味で、当時の流行語となっていたことが渋谷（1988）によって指摘されている。

江戸語期全体を通して可能を表す「なる」が生きていたのだが、「ならない」が可能の意味を表すのに対して「いかない」にはその意味がなかったと渋谷はいう。さらに可能動詞は江戸語期前期には評価を表す可能動詞が多かったため、それらの意味的・形態的な圧力から、明治以降は「いかない」が消え、「いけない」「いかん」が残ったと渋谷（1988）は主張している。

また、「いけない」の成立については、渋谷（1988）は江戸語前期には「いけない」が成立していたが、名詞「（で）は+いけない」などの形に限られており、動詞に付加されようになったのは、江戸語後期の化政期以降であり、そのころから複合形式である当為・禁止・自発的表現の後部要素に「いかない」「いけない」などが用いられるようになったとしている。

このように、歴史的に見て、可能などの意味から、文法化するにつれて当為の「してはいけない」になり、この複合形式の禁止の意味が生まれたことがわかる。以下では、現代語におけるこの複合形式の禁止への文法化の度合いを考察してみることにする。その文法化の度合いに関して、(6)に示した文法化における音韻的、形態統語的、機能的の三つの要素のうち、音韻的な変化は起こっていないため、形態統語的、機能的な文法化の度合いを、花園（1999）のテストを用いて分析する。

4.3.2 「してはいけない」の文法化の度合い

「してはいけない」は、「動詞の連用形」＋条件形「て」「は」＋否定評価「いけない」からなる複合形式である。

「いけない」は、もともと、否定の評価の意味、つまり、「悪い」の遠回しな言い方（『デジタル大辞泉（小学館）』）として用いられる。ここではまず、その「悪い」という否定の評価を表す場合を見ていきたい。

「いけない」の基本的意味は、評価を伴う不可能、否定的な評価である。以下の例文ではそのような意味で用いられている。

- (16) 駄目、このままでは、私はいけない娘になってしまう。所詮、この方と私は身分違い。

決して結ばれることはできないのだもの。

（現代日本語書き言葉均衡コーパス『本当は恐ろしいグリム童話』）

- (17) それぞれに社会で働いている以上、今よりスキルアップしないといけない。

（現代日本語書き言葉均衡コーパス『Yahoo!ブログ』）

- (18) 「ねー私は、とてもいけないこと、ムリなわがままいったのかしらーまたいつぬけ出せるかわからないし、いろんなこと考えてたら、どうしてもたまらなくなって、みんな放り出して来ちゃったけどーもし、ケガが、うんとわるくなったりしたら…」

（現代日本語書き言葉均衡コーパス『猫目石』）

以上の例文はいずれも、話し手は行為に対して、「悪い」という評価を下している。

この否定の評価の「いけない」に「しては」を付けて「してはいけない」の形ができ、さらに二人称の行為者あてに発話することが定型化し、語用論的な禁止の機能を持つに至る。その例に以下のようなものがある。

- (19) 見た目の安さだけで判断してはいけない。

（現代日本語書き言葉均衡コーパス『インターネットでお店やろうよ！大全』）

この複合した形式は、「いけない」の評価の意味が希薄化し、不許可・非許容、そして規則・決まり・社会ルールによる禁止の表現として定着し、文法化の度合いが高くなっていると考えられる。以下に類例を挙げる。

- (20) イギリスではタクシーが目の前で止まったからといって、すぐ後部のドアを開けて車内に入ってはいけない。「いけない」というのは少し大げさかもしれないが、少なくとも筆

者が観察する限り、こちらの人はすぐには車内に乗り込まない。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『イギリス英語散歩』)

- (21) 全員が1回ずつ走った後は、足に自信のある人が走るようにします。ただし、2回続けて走ってはいけません。足の速い人が片寄らないように、時々組替えをしましょう。また空き箱を2個拾って、1個を他方の上に乗せ、バランスをとって走るのも楽しいでしょう。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『生きがいつくり健康づくりの明老ゲーム集』)

- (23) パートのおばさんが飛んできて、あわててとめたという。

パートのおばさん、「昨日消毒したばかりだから、食べてはいけない」

柴田さん、「ヤマギシの野菜、消毒してあるんか？」

おばさん、「あたりまえだよ。消毒しないでトマト作れるわけないだろう」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『加藤哲夫のブックニュース最前線』)

これらの例は、いずれも否定の評価の意味が希薄化して、行為の実現寸前またはすでに実現されている場合に、話し手は「消毒したばかり」などの共通の知識から「食べるべきではない」として、行為の実現を止めるように求めている。つまり、「してはいけない」という形式が一体化して、禁止の機能を果たしているのである。

以下ではさらに、この複合形式の統合的性質、つまり、一語としての一体化の度合いを、花園(1999)による用言認定テストに筆者が提案するテストを加えて、文法化の度合いを考察する。この考察は、(2)で挙げた Lehmann の六つの文法化度パラメータのうちの統合的変異性 (Syntagmatic variability) の基準に当てはまるテストでもある。すなわち、ある形式が文法化するにつれて、語が自由に動けなくなることや、語の位置が文法化する以前の位置と異なることを言う。この基準は、複合形式の禁止表現の文法化の度合いを考察するのに非常に適している。具体的には、以下の点について考察する。

- (25) 本研究で考察するもの

- ・条件形の複数出現
- ・肯定形の取り替え
- ・倒置・挿入・副詞との共起

4.3.2.1 花園（1999）の条件形複合用言形式の認定

平叙文（叙述文、述べたて文）における述語のモダリティ形式の構成要素は以下に挙げるように実に多様である。

- (26) a. 名詞＋判定詞：様子だ、見込みだ、所存だ、つもりだ、タイプだ、性格だ
b. 名詞＋存在動詞：必要がある、可能性がある、おそれがある
c. テ形＋（評価的）用言：～して（も）[いい／かまわない]、～しては [ならない／いけない／だめだ]
d. 動詞の条件形＋（評価的）用言：～しなければならない、～しなければいけない、～すればいい、～したらいい、～するといい

（花園 1999：43）

花園（1999）は、これら諸形式をモダリティ形式として認めるためには、これらが主観的な形式であると共に、これらの形式が文法的形式であることを示さなければならないという。

本研究では花園が用いたテストなどを用いて、(26c)における「してはいけない」形式の統語的、意味的な特徴を考察して、その禁止表現としての文法化の度合いを考察する。

4.3.2.2 条件形の複数出現

上述の通り、「してはいけない」は「動詞の連用形」＋条件形「て」「は」＋否定評価「いけない」からなる複合形式である。ここでは「て」「は」に注目して文法化の度合いを考える。

花園（1999：42）は、同一の条件形は原則として一文中に2度以上現れないとしている。例えば、(27)のような文は容認度が低い。

- (27) ?明日雨が降ったら、学校が休みだったら、君の家に行くよ。

（花園 1993）

これに対して「してはいけない」形式の「て」「は」には語彙性が欠けているとすれば、上記の制限には抵触せず、「～ては、～ては～」が日本語として問題なく使うことができることが予想され、事実、その通りである。

(28) こう暑くては、家にいなくてはいけない。

(29) 金がなくては、結婚してはいけない。

このテストから、「してはいけない」の「ては」は、条件形の語彙性を失っていると言える。

4.3.2.3 倒置の可能性

影山（1993：10）は、語は統語的な分断ができないとして、以下のような分裂文のテストを提案している。

(30) 首相が国際会議に出席した。

*首相が__会議に出席したのは国際だ。

（影山 1993：10）

このように、「国際会議」は一つの語であるため、分解することができない。しかし「してはいけない」形式に分裂文テストを適用して非文になったとしても、「してはいけない」が分断不可能な語であるとは言えない。「*首相が国際会議には出席しただ」のように、そもそも分裂文の焦点位置に述語が現れることができないからである。そこで、花園（1999：44）は、倒置ができるかどうかをテストとしている。たとえば、条件形の本来の用法は倒置が可能である。

(31) a. 明日雨が降れば、運動会は中止だね。

b. 運動会は中止だね、明日雨が降れば。

（花園 1999：44）

では、「してはいけない」形式はどうであろうか。

(32) いけない、廊下を走っては。

(33) いけないよ、笑っちゃ。

「してはいけない」形式については、上記のように分割して倒置することができる。特に「よ」をつけた場合や、「ては」が「ちゃ」になる場合においての容認度が高い。「ちゃ」は「ては」

よりも音韻的な文法化が進んでいることに関しては後で考察する。「してはいけない」形式の語としての分断性についてはさらに、(20)のように、「いけない」というのは…」というように、「いけない」が取り出されているので、分割されている例文もコーパスにおいて観察された。したがって、「してはいけない」形式は、このテストについては一語とは認定できないことになる。

4.3.2.4 程度副詞の挿入

花園（1999：44）によれば、条件用言が表面的な形式どおり、「条件形＋用言」という二語としての分離性を保っているのなら、以下のような挿入が可能なはずであるが、下の例では不可能である。

(34) ?学校へ行かなければ絶対にならない。

では、「してはいけない」に「絶対に」の挿入のテストを適用してみよう。

- (35) a. 「誰にも権利の無いことを、禁止する以外の目的で、『法律化』しては絶対にいけない」
(現代日本語書き言葉均衡コーパス『感性ちゃんと頭脳君の対話』)
- b. 感情的になって、自分に反対した人を怒ったり憎んだりしては絶対にいけない。
(現代日本語書き言葉均衡コーパス『S A P I O』)

これにより、「してはいけない」がまだひとつの単位、つまりひとつの語にはまだなっていないことがわかる。

しかし、頻度の面から見ると、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(国立国語研究所)を「少納言」で検索したところでは、「絶対に」は「てはいけない」全体の前に置かれるほうが、「ては絶対にいけない」よりも圧倒的に多い。比率で言えば、15：1であった。つまり、文法的には可能であるが、実際の使用ではあまり挿入は好まれないと言える。

- (36) a. 無視するのが一番です。相手のアドレスに、メールなど絶対してはいけませんよ！
(現代日本語書き言葉均衡コーパス『Yahoo!知恵袋』)

- b. 「そうか。戸閉まりはキッチンとしておくんだよ。ドアは絶対に開けてはいけない。
たとえチェーンがしてあっても、あれを切断するくらい、プロならわけではないか
ら…」 (現代日本語書き言葉均衡コーパス『城ヶ島殺人旅情』)
- c. 「絶対に触れてはいけない。ぼくの命、一族すべての命がこの小麦にかかっている。」
(現代日本語書き言葉均衡コーパス『死、ふたたび』)

4.3.2.5 肯定形式の取り替え

花園 (1999 : 43) は認識的モダリティ形式として認定されている「にちがいない」「かもしれない」は、後半部を肯定の形(「*にちがいある」「*かもしれない」)に入れ替えて、それが可能かどうかによって、それぞれの形式が「にちがいない」、「かもしれない」の形で固定化しているかどうかの確認ができると述べている。

このテストを「してはいけない」に適用してみると以下の結果が得られる。

(37) 廊下を走っては {いけない／*いける}。

「してはいけない」の後半部を肯定の形にすることができないことから、このテストに関しては、「してはいけない」は全体として固定化していると言える。

なお、なお、「してはいけない」をさらに否定にした「いけなくない」という表現もまれに見られる。しかし、これは(38)のように、直前にある「してはいけない」を受けて、それに否定で答える場合か、あるいは(39)のように言葉遊び、ないしは非常に口語的な文体で、「してはいけないわけではない」という意味で使われる場合に限られる。後者を重視するならば、「してはいけない」が文法化し、「いけない」が否定形であるという性質を失う途上にあるのかもしれない。つまり、「してはいけない」は否定の意味を失う過程にあり、全体としてさらに固定化していく方向にあるとも考えられる。

- (38) a. 「バイトを一緒にできなかったお詫びってのも、変だけど、お疲れさまの真琴ちゃんを出迎えて、びっくりさせようって話に急になっちゃったの。林太郎先生も、無理やり、引っ張ってきちゃった。いけなかった？」と、虹子ちゃんは笑った。
いけなくないよ、いけなくない。 全然、いけなくない。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『婚約時代・18歳』)

- b. 男の子ばかりで女の子がいないと寂しいなと思うことっていけないことでしょうか？

いけなくないですよ。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『Yahoo!知恵袋』)

- c. 正ちゃんが、「お母さん、好き？」「すき」 私はその答えに重ねて、「好きだよねえ、変なこと聞くお姉ちゃんだねえ、いけないねえ」「—いけない？」 ゆきちゃんは、きょとんとして正ちゃんを指さした。正ちゃんは顔の前で手を振って、「ないない、いけなくない。あたし、いい人、とってもいい人」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『空飛ぶ馬』)

- d. ちなみに、自殺未遂常習者たちの「どうして自殺してはいけないの？」という問いに対しては、「いけなくないよ。勝手にどうぞ」というのが私の答えだ。

(中村うさぎ『ダメな女と呼んでくれ』)

- (39) a. しゃべくり 007 笑ってはいけなくない！しゃべくり 4人の殿堂入り大晦日 SP

(テレビ番組タイトル)

- b. 女性だって結婚したくないと考えてはいけなくない

(<http://komachi.yomiuri.co.jp/t/2010/0309/300437.htm>)

- c. 不登校が恋愛してはいけなくないですよ！！

(http://kids.nifty.com/cs/kuchikomi/kids_soudan/list/aid_170530943531/1.htm)

4.3.2.6 時制の取り替え

時制の側面から「してはいけない」の語としての一体性を考えよう。下の例のように、「してはいけない」を過去形にすることが可能である。このように、「してはいけない」は過去形にすることができ、この点に関しては語として固定化されてはいない。

- (40) a. 「あいつも3年間 がんばってきた男なんだ 悔ってはいけなかった」

(『スラムダンク』)

- b. 「余り煙草を吸ってはいけなかった。(中略) 夜道くまで大声で話してはいけなかった。」

(豊島与志雄『理想の女』)

4.3.2.7 丁寧体

ここでは「してはいけない」が丁寧体に行けるかどうかのテストをしてみよう。

- (41) a. ?廊下を走ってはいけません。
b. 廊下を走ってはいけません。

「してはいけない」を「してはいけません」形式にすることはできるが、「してはいけないです」の形式にすると容認度が落ちる。しかし、これは「形容詞＋です」の容認度からくるもので、一体化の問題ではない。したがって、丁寧体への交替は可能であると言える。

4.3.2.8 連文における省略

影山（1993：10）による、語の形態的緊密性を例証する最後のテストとして、次の「等位構造における削除」を取りあげる。影山（1993）は、等位構造において重複する要素は削除できるが、語は形態的緊密性を持っているため、形態的には不可分であり、削除ができないという。例えば、「（～し）はじめる」の場合を見てみると、(42a) のような本動詞としての「はじめる」は削除可能だが、(43b) のように派生動詞の一部となっている場合は削除することができない。

- (42) a. 誠は勉強をはじめ、知子は料理の準備をはじめた。
b. 誠は勉強を、知子は料理の準備をはじめた。
(43) a. 誠は経済学の本を読みはじめ、知子は料理を作りはじめた。
b. ?誠は経済学の本を読み、知子は料理を作りはじめた。

（影山 1993：10）

このテストに対して、花園（1999）は、複合的形式を構成する要素が語としての資格を失っているかどうかを試すテストフレームとしてこれを用いることも可能であるとして、以下のよう、連文単位で「～しなければならない」に適用した。

- (44) a. 明日雨が降れば学校が休みになる。もしくはストがあれば学校は休みになる。
b. 明日雨が降ればもしくはストがあれば学校は休みになる。

- (45) a. 仕事上でミスをした場合、自分で解決策を考えなければならない。もしくは直ちに上司に報告しなければならない。
- b. ?仕事上でミスをした場合、自分で解決策を考えなければもしくは直ちに上司に報告しなければならない。

花園 (1999) は、このテストについて、(44a) の場合は省略可能だが、(45b) では「～しなければならない」の帰結部として「ならない」が語の一部となっているため不可能であることから、「しなければならない」における「ならない」が語としての性質を失っていることの証拠になるという。

では、このテストフレームを用いて、「してはいけない」の連文における省略可能性を見てみよう。

- (46) a. 廊下を走ってはいけない。はしゃいではいけない。
- b. *廊下を走っては、はしゃいではいけない。
- c. *廊下を走ったりしては、はしゃいだりしてはいけない。

このように「してはいけない」の帰結部「いけない」の省略が不可能である。また、「あるいは」を挟むと、容認度として高くなるものの、文としてはやはり不自然である。

- (47) a. ?廊下を走っては、あるいは、はしゃいではいけない。
- b. ?廊下を走ったりしては、あるいは、はしゃいだりしてはいけない。
- c. ?学校を休んでは、あるいは、遅刻してはいけない。

これらのように、「してはいけない」の後部要素「いけない」は、連文における省略が不可能であるので、このテストにおいては一語化していると言える。

4.3.2.9 まとめ

以上のテストを用いた分析に基づいて、「してはいけない」形式の語としての一体化のレベルを検討した。その結果は以下の表にまとめることができる。

条件形の複数出現	○
倒置不可	×
程度副詞の挿入不可	×
肯定形式の取り替え不可	○
時制の取り替え不可	×
丁寧系の取り替え不可	×
連文における省略	○

表9 「してはいけない」形式の一体化

このように、「してはいけない」形式は、「いけない」という評価から、「してはいけない」という非許容、禁止への文法化の度合いは初期段階にあり、一語化、文法化の途上にあることがわかった。

4.3.3 「しちゃだめ」形式の文法化の度合い

「だめ」の語源は、囲碁用語で、双方の境にあってどちらの地にも属さないところを意味する「駄目」である。この場所に石を置いても自分の地とならず無駄な目になることから、ダメは「やっても甲斐のないこと」、「してはいけないこと」を意味するようになった（『語源由来辞典』）。

「しちゃだめ」は「してはだめ」の短縮した形である。この「ちゃ」という形式は、Heine & Narrog (2002) のいう浸食 (Erosion) という概念に該当するので、この概念を用いて説明したい。Heine & Narrog (2002) は、浸食を以下のように定義している。

(48) Erosion is linked to high-frequency use, and thus it is a corollary of grammaticalization which implies increase in usage frequency. Therefore, it usually occurs at a later stage in the grammaticalization process and is by no means a requirement for grammaticalization to happen.

Heine&Narrog (2002 : 407)

つまり、浸食は、頻繁に使用される中で起こる現象であり、文法化の進んだ段階で見られる。Heine & Narrog (2002 : 407) では浸食には次の二種類があるとされる。

- (49) Erosion can be of two kinds. First, it may involve entire morphological units. [...] More commonly, however, change is restricted to phonetic erosion.

Heine & Narrog (2002 : 408)

浸食には形態の浸食とより一般的な音声的な浸食があるということであるが、「しては」という形式が「しちゃ」になったのは、この音声的な浸食であると考えられる。音声的な浸食には、Heine & Narrog (2002) によって四つの変化に整理されている。その変化を以下の (52) に示す。

(50) Kinds of phonetic erosion

- a. Loss of phonetic segments, including loss of full syllables.
- b. Loss of suprasegmental properties, such as stress, tone, or intonation.
- c. Loss of phonetic autonomy and adaptation to adjacent phonetic units.
- d. Phonetic simplification.

Heine & Narrog (2002 : 408)

「ては」[tewa] から「ちゃ」[tea] への変化には、閉鎖音の硬口蓋化 ([te]→[tɕ])、分節音 [w] の削除、音節数の減少が見られ、上記の音声的な浸食に該当する。

Heine & Narrog (2002) は、このような音韻的な浸食は、多くの場合、形態的な浸食を伴うとして、ラテン語の *casa* 「家」が古フランス語の *chiese*, *chese* 「家」を経て、現代フランス語で前置詞 *chez* 「～の家で」になった例や、英語の前置詞 *beside* が、*by the side (of)* に相当する成句に由来することをあげている。「てはだめ」から「ちゃだめ」への変化も、このような形態的な浸食が伴っている。すなわち、接続助詞「て」＋係助詞「は」であったものが、単独の助詞「ちゃ」になったとみることができる。

なお、以下の例に示すように、「ちゃ」にも「ては」と同じ用法があることから、「て」＋「は」が文法化した「ては」が音声的な浸食によって、「ちゃ」になったと考えられる。(53) は「条件」の用法、(54) は二つのできごとなどが対になって繰り返されることを表す用法である。

- (51) a. 車が {なくては／なくちゃ} 運べない。
b. そう {言われては／いわれちゃ} 何も言えない。

- (52) a. 食っ {ては／ちゃ} 寝、食っ {ては／ちゃ} 寝している。
b. 怪談を聞い {ては／ちゃ} 怖がっている。

また「してはだめ」「してはいけない」も「しちゃいけない」「しちゃだめ」も、しばしば禁止として使われる。

- (53) a. そしてこの内面の声が快感原則に対立し、「快感だけを追求してはだめだ」「社会の道徳を守らなくてはだめだ」と命じるのです。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『「精神分析入門」を読む』)

- b. 「目がわるくなっているのに、車にのってだめですよ。」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『いのちをうばった神さま』)

- c. 私の頃になると、先生が非常に厳しくて、手話は一切使ってはだめだと言われました。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『音のない記憶 ろうあの天才写真家井上孝治の生涯』)

- (54) a. 「いいかミチオ、クジラに向かって力いっぱい漕げ。水音をたてちゃだめだ。クジラが気づいちゃうからな。静かに力いっぱい漕ぐんだ」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『星野道夫著作集』)

- b. 「そんなところにすわっちゃだめだよ、ワックスをかけてるんだから」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『きらきらひかる』)

- c. その時、秋田の言った通り消防団員たちは言った。「皆に迷惑をかけちゃだめだ。いっしょに行こう」。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『プロジェクトX リーダーたちの言葉』)

- (55) a. いかに小さな国であっても、小さいとあなどってはいけない。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『中国古典名言事典』)

- b. 子どもは親の「成果」ではない。親は子どもに見返りを期待してはいけない。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『＜子育て法＞革命』)

- c. 地方によっては元旦から三日間行なわれ、その間だれに水をぶっかけてもかまわないし、かけられて怒ってはいけない。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『読むクスリ』)

- (56) a. 「ひとさまのフトコロのことなんかどうでもいいじゃないか。そんな品のないことをいっちゃいけない」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『二度目の大往生』)

- b. 「無理しちゃいけない。無理しちゃいけない。西条は無理をして、結局死んじゃったんだよ」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『揺れる夏追憶の橋』)

- c. 「なんだ、あれは…！？」カールが見上げる。「まさか…」「刺激しちゃいけない！」叫んだのは、マナブである。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『アブサラスリターンズ』)

以上のように、「しては」「しちゃ」という形式は文法化の度合いが高い。ここでは、「だめ」という語との複合によってできた複合形式「しちゃだめ」を例に、その文法化の度合いを見てみよう。

「しちゃだめ」は「動詞の連用形」＋条件形の短縮した形「ちゃ」＋「だめ」からなる複合形式である。「だめ」は、前述のように、もともと無駄なこと、甲斐のないことという意味である。そのような意味で使われた用例を挙げる。

- (57) a. そうなんです。中途半端な勝ち方じゃあだめだということです……自公にギャフンといわせるくらいの勝ち方でないとだめだと。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『Yahoo!ブログ』)

- b. アドレスは間違いなくあっているのです。何回試してもだめです。どうしてなのか？また、ほかにいい送信方法がありましたら教えてください。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『Yahoo!ブログ』)

- c. 勝がやった江戸開城というのは、あの病人はもうだめだからほうっておく、という立場だ、というわけです。是非をいつているのではなく、福沢は人間の“情”について語っているのです。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『「明治」という国家』)

「だめ」は、「いけない」という意味としても単独に使われる。その意味で用いられた例文を以下に挙げる。

(58) a. 「あそぼうよ」レオンがまたいいました。「いまはだめ、いそがしいの」するとレオンは、じだんだをふんで、どなりました。(現代日本語書き言葉均衡コーパス『まほうつかいリリまほうでしゅくだいをする』)

b. 「そんなむちゃなことしてー。おばあちゃん、だめだよ」って言わなきゃならんいのかもしれないけれど、ぼくはもうおもしろがってしまったから、とてもまじめな顔でお説教なんかできない。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『子どもと病気』)

c. 「だめ！ニンシュブルはだめ！あのひとはわたしのいのちの恩人、わたしの言うことをよく聞いてくれたひとだから。おまえたちに決して渡さない」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『七つの愛の物語』)

そして、二人称の行為者あてに発話することで、「しちゃだめ」の形としての禁止の機能が定型化する。これら複合した形式は、禁止の意味として用いられ、コーパスにおいても頻度とが非常に高い。

(59) a. 女の子は嫌な人と自分から手を繋ぐなんてことはありえませんよ。ただ、ガツガツしちゃダメよ！ゆっくりね。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『Yahoo!知恵袋』)

b. 園長先生はいった。「もう、すんだことだから、あなたと先生だけのひみつにしておきましょう。でも、これからは、あんなこと、しちゃだめよ。」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『ヒルベルという子がいた』)

c. スプリがコンロのそばまでマッチをとりに行くと、イブもスプリの足もとをちょろちょろとついてきます。「イブ。こしをぬかしちゃだめだよ。」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『いたずら魔女スプリのたんじょう日』)

d. 「すごく、いい気分。ほら、用水路の水に月が輝いてる。見て。神さまが溶けた銀を用水路に注ぎ込んだみたい。月は神さまのものなんだから、人間が歩いたりしちゃだめ」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『レッド・ライト』)

これらの例では、いずれも話し手がある行為を止めるように禁止をもちかけている。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における「しちゃだめ」の頻度は、60 例文中、58 例が禁止として使われていた。さらに、「しちゃだめ」形式の語の前半つまり条件部が音声的に縮約されていることと考え合わせれば、文法化の度合いは高いといえる。以下では、「しちゃだめ」という複合形式が一語として一体化しているかということを、「してはいけない」形式に対して用いたテストを適用してみる。

4.3.3.1 条件形の複数出現

「してはいけない」形式の「ては」の語彙性が欠けているのと同様に、その縮約形式「ちゃ」の語彙性も欠けている。そのことを証明するために、花園（1999）の「一文中における同一の条件形の出現」というテストを以下のように示す。

「～ては、～ちゃ～」「～ちゃ、～ちゃ～」は日本語としておかしくなるはずだが、次の二つの例文のように、「～ては／ちゃ、～ちゃだめ」は問題なく使うことができる。

(60) 薬は、水が無くては、飲ん {では／じゃ} いけない。

(61) 金がなく {ては／ちゃ}、結婚しちゃだめ。

このテストから、「しちゃだめ」の「ちゃ」は、条件形の語彙性を失っていて、「しちゃだめ」と一体化していると言える。

4.3.3.2 倒置の可能性

4.3.2.3 節でも述べたように、条件形は本来の用法ならば、倒置が可能である。「しちゃだめ」という複合形式に関して、その条件形の本来の意味が文法化で希薄化されていけば倒置できないことが予想される。しかし、実際には次のように、「ちゃ」＋「動詞の連用形」の語順に倒置することができる。

(62) a. 「悪いわよ。ダメよ、そんなもったいないことしちゃ…」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『素人投稿禁断の告白セレクション』)

b. 「おい、動いちゃだめだよ、動いちゃ…」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『路傍の石』)

この点は「しちゃいけない」も同様である。

- (63) a. いけないよ、廊下を走っちゃ。
b. いけません、笑っちゃ。

したがって、このテストに関しては「しちゃだめ」も「しちゃいけない」も一語化していないということになる。

4.3.3.3 程度副詞の挿入

花園（1999：44）によれば、4.3.2.4 節で述べたように、条件用言が表面的な形式どおり、「条件形＋用言」という二語としての分離性を保っているのなら、「絶対」などの程度副詞の挿入が可能なのはであるが、(34) のような例では不可能である。そのため、「～しなければならない」は、形式が一体化しているといえることができる。

この観点にしたがって、「しちゃだめ」の一体化についても挿入のテストを試みることにする。以下に示すとおり、「しちゃだめ」の実例に、程度副詞「絶対に」を挿入することができた。

- (64) a. 「しゃべらなくちゃいけない時以外、しゃべっちゃだめよ」バンコーレ夫人が二人に言い渡した。 （現代日本語書き言葉均衡コーパス『真実の裏側』）
b. 「しゃべらなくちゃいけない時以外、しゃべっちゃ絶対（に）だめよ」バンコーレ夫人が二人に言い渡した。

このように、「しちゃだめ」という複合形式の間に、「絶対に」という程度副詞を挿入することができるので、このテストに関しては、この複合形式はまだひとつの単位となっていない、ひとつの語にはまだなっていないといえる。

しかし、「してはいけない」形式と同様に、頻度点から見れば、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（国立国語研究所）では、「絶対にしちゃだめ」という語順の例は多かったが、挿入して「しちゃ絶対（に）ダメ」とした例は次の一例のみであった。

- (65) ホイルベースの数値だけとかホイルベース／トレッド比だけとかデータや数値を単独で評価したり考えたり分析したりしちゃ絶対ダメなんですよ。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『最後の自動車ロン』)

つまり、文法としては挿入できるが、傾向としては、実際の使用では「ては／ちゃ」と「だめ」はほとんどの場合で分離されず、以下のように、「しちゃだめ」全体の前に置くのが一般的である。

- (66) a. 一度使ったピアッサーを使い回すのは不衛生で危険なので絶対してはダメ！

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『non・no (ノンノ)』)

- b. 法的な書類が届かない限りは、あなたから連絡を取ったりするようなことも絶対してはだめです。 (現代日本語書き言葉均衡コーパス『Yahoo!知恵袋』)

- (67) a. 「やめて、思い出させないで。ねえ、絶対に来ないでね、お願いよ」

「それじゃ、きみも絶対にいっちゃだめだぞ」ライアンはからかった。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『あなたしか愛せない』)

- b. 毎日、姉さんの家でご飯は食べるし、寝るとこといったらここなんだから。それからスヌーピーの枕、絶対に使っちゃだめだからね。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『おかまのプーさん』)

4.3.3.4 否定形の取り替え

4.3.2.5 節でも述べたように、花園 (1999 : 43) によれば、認識的モダリティ形式として認定されている形式であれば、後半部を入れ替えて肯定の形 (例えば、「にちがいない」「かもしれない」の形式を、「*にちがいある」「*かもしれない」) にすることはできない。これは、それぞれの形式がそれぞれの形で固定化しているためだと花園はいう。

このテストを「しちゃだめ」に適用してみると以下の結果が得られる。ここでは、「しちゃだめ」は肯定形なので、否定文に変えてテストをしてみよう。

- (68) 廊下を走っちゃだめ。

- (69) a. ?? 廊下を走っちゃだめじゃない。

- b. 廊下を走ってもだめじゃない。
- c. 廊下を走っちゃだめじゃない (か)。

(69a) のように「ちゃ」のままでは非文になり、(69b) のように「ても」に代えなければならぬ。(69c) は言えるが、修辞疑問であり、実質的には肯定文で禁止を表す。このテストから、「しちゃだめ」の後半部を否定形にすることができないことがわかる。つまり、「しちゃだめ」は、「してはいけない」と同様に、全体として固定化しているということがわかる。

4.3.3.5 過去形の取り替え

次に、4.3.2.6 節のように、時制を過去形の時制を変えるテストを、「しちゃだめ」に適用してみよう。

- (70) a. 肩上げとかまでミシンでやるんだって… (kanae は旧式？ 通常？ の浴衣作成方法の脳なので) 肩上げの2目落として 表に長いの来ちゃだめだったっけね？ って
思い出すの必死だったのにさ(笑)

(現代日本語書き言葉均衡コーパス、『Yahoo!ブログ』)

- b. 「実はやっちゃダメだった！ 夏場は絶対避けたい「NG 美容法」

(美容サイト『Bizlady』)

このように、「しちゃだめ」を過去形にすることができる。この場合、もちろん禁止を表しているわけではないが、「しちゃだめ」は、「してはいけない」と同様、形式上、現在形に固定化しているわけではないということになる。

4.3.3.6 丁寧体

次に丁寧体にできるかどうかのテストをしてみよう。

- (71) a. 「じゃあ、ゴミ袋にでもいれたらどうですか。もしそうなら、まちがえちゃだめですよ。…」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『ひまわりの祝祭』)

- b. 「ねえ、お若い方。クリスマスっていうのに、くよくよ思い悩んでちゃだめですよ。楽しいことを考えなきゃ」 マットは皮肉っぽく口もとをゆがめた。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『四つの愛の物語』)

このように、「しちゃだめ」を「しちゃだめです」のような丁寧体形式にすることができる。コーパスにおいても、このような敬語体は多数観察された。つまり、常体と敬体についても固定化していないと言える。

4.3.3.7 連文における省略

4.3.2.8 節で述べたように、花園 (1999) は連文における省略が、複合的形式を構成する要素が語としての資格を失っているかどうかを試すテストフレームとなるとしている。ここでは、(72) のような「(～し) はじめる」の場合を見てみることにしよう。このテストフレームにおいて、本動詞としての「はじめる」は削除可能だが、派生動詞の一部となっている場合は削除することができない。以下では、「しちゃだめ」形式にこのテストフレームを用いて、その帰結部の省略が可能であるかどうかを考察する。

- (72) a. 廊下を走っちゃだめ。はしゃいじゃだめ。
b. ?廊下を走っちゃ、はしゃいじゃだめ。

上記の作例のように、「しちゃだめ」形式は連文における後部の省略が難しい。これは、「しちゃだめ」の一語化進んでいるといえる証拠になる。

4.3.3.8 まとめ

以上のテストを用いた分析に基づいて、「しちゃだめ」形式の語としての一体化を考察してきた。結果は、以下の表にまとめることができる。

条件形の複数出現	○
倒置不可	×
程度副詞の挿入不可	×
否定形不可	○
過去形不可	×
丁寧体不可	×
連文における省略	○

表 10 「しちゃだめ」形式の一体化

このように、「しちゃだめ」の全体としての禁止への文法化の度合いは、「してはいけない」と同じという結果となったが、「ちゃ」という条件部が「してはいけない」形式の「て」「は」よりも文法化されており、2.2.5 節で分析したように、文脈的な制限や使用条件が「してはいけない」に比べて少ないということや、コーパスにおいて用例の禁止としての使用頻度の多さから見れば、この形式の文法化の度合いは「してはいけない」より進んでいるといえる。この点に関しては、今後の課題として、さらに考察のテストを変えてこの両形式の文法化の度合いを比較していきたいが、ここでは、禁止表現の文法化の度合いをひとまず全体的に比較していくという目的のため、上記の結論をそのまま維持することにする。

4.4 不可能形式

4.4.1 不可能形式の文法化経路

第 1 章でも述べたように、文法化理論における一方向性仮説によれば、モダリティの文法化は以下のような経路をたどる。

(73) DYNAMIC MODALITY (ABILITY のみ) > DEONTIC MODALITY (Heine & Kuteva 2002: 116)

(74) ABILITY > PERMISSIVE (Heine & Kuteva 2002 : 27-28)

(75) CIRCUMSTANTIAL POSIBILITY > POSSIBILITY (Bybee 1994: 193-194; Narrog 2012: 121-122)

DYNAMIC MODALITY とはここでは「能力可能」「participant-internal possibility 内的可能性」を、CIRCUMSTANTIAL POSIBILITY は「状況可能」「participant-external possibility 内的可能性」を指す。「可能」から「義務・許可」、「不可能」から「禁止」への経路である。

また福田（2016：309）の共時的研究でも、中国語の「得」もこの経路をたどると主張されている。

- (76) a. 老人的牙齿掉了，吃不得硬东西，傅亚光就买来鸡鸭鱼肉，炖得烂烂的端着一勺一勺地喂老人。 (福田 2016：309)

（老いた母の歯は抜け落ちてしまい、硬い物が食べられないため、傅亚光は鶏肉、鴨肉、魚を買って来て、それらを柔らかく煮込んで、ひと口ずつ取り分けて老いた母に食べさせた。）

- b. 颜色鲜艳的冰糕、冷饮吃不得。经研究，人工合成色素对人体的毒害有三个方面…。 (福田 2016：309)

（色が鮮やかなアイスクャンディや清涼飲料水を摂ってはいけない。研究の結果、合成着色料の人体に対する害は3つあり、…。）

- c. 他也没有忘记那天青青在忧愁谷里，对那神秘的老矮人说的话：“这把刀是绝对看不得的，看过这把刀的人，都已死在这把刀下。” (2016 福田：309)

（彼もあの日、青青が憂愁谷で、神秘的な年老いた小人に言った言葉を忘れておらず、「この刀は絶対に見てはいけない。この刀を見た人は、皆この刀がもとで既に死んでしまっている。」）

福田（2016：309）によれば、(76a)は「歯が抜け落ちてしまった」ため、「食べる」という行為が実現できないという不可能の意味を表している。それに対して、(76b)と(76c)は、「食べてはいけない」、「見てはいけない」という不許可の意味を表している。このうち、(76b)は、「アイスクャンディ、清涼飲料」は「害がある」ので「評価」として「たべてはいけない」という意味であり、(76c)は、聞き手に向かって「刀は見てはいけない」という直接的な禁止であるとしている。

この中国語の不可能表現の文法化の経路は、上で述べた Heine & Kuteva (2002) で言われている「ABILITY > PERMISSIVE」のプロセスに対応していると考えることができる。本研究では、日本語においても、ABILITY から PERMISSIVE へ文法化されるという仮説も検討する。

具体的には、まず史的変遷について、先行研究に基づいて文法化の経路を振りかえる。次に、共時的な観点から、不可能形式の文法化の度合いを考察する。

4.4.2 不可能形式の史的変遷

渋谷（1993）によると、上代には、副詞エ、補助動詞ウ、助動詞ユ・ラユ、ルがあり、副詞エは肯定の可能も否定の可能も表すことができた。それらの例には以下のようなものがある。

(77) 彦星の川瀬を渡るさ小舟のえ行きて泊てむ川津し思ほゆ

（彦星が天の川瀬を渡る小さな舟の行って止まる静かな入江がしのばれるなあ）

（肯定可能文；万葉集 2091）

(78) 玉かつまあへしまやまの夕露に旅寝えせめや長きこの夜を

（あへ島山におりる夕露の下で旅の野宿せねばなるまいかこの秋の夜長を）

（否定可能文；万葉集 3152）

そして、渋谷（1993）は、中古になると、副詞エは概略否定（不可能）表現として固定化・一般化され、陳述の副詞として確立したという。(79)はその例である。

(79) むかし、おとこ、五條わたりなりける女をえ得ずなりにけることと、わびたりける、人の返ごとに。

（伊勢物語）

（昔、五条あたりにいた女を手に入れられなくなってしまったと嘆いていた男が、ある人の返事に）

また、渋谷（1993）は、この時期から、補助動詞ウは、肯定に多く見られるようになり、文章語にも多く用いられるようになり、助動詞（ラ）ルは、受け身、尊敬、自発を表すことが多かったという。その後、中世にはいると、副詞エ、補助動詞ウル、助動詞ルル・ラルル以外に、院政期（11c 後半～12c 末）以降、カナフやナルによる可能動詞と思われるものが用いられるようになったとして、この時代から、「せねばかなはぬ／ならぬ」「してはかなはぬ／ならぬ」「せひでかなはぬ／ならぬ」「N ではならぬ（N＝名詞）」「A ではならぬ（A＝形容詞）」などの当為表現や禁止表現などが現れたという。

この「ナル」は、百留・百留（2012）によると、万葉集（7c 後半～8c 後半）ではモノを主体とした使用が 60%あり、またその 3 分の 2 が「モノが出来する」、「モノがモノに変化する」という意味であったという。また、平安時代の八代集ではモノを主体とした「ナル」が減少し（40%）、古事記（681 開始、712 撰上）では神やモノを主体、その出来や獣などへの変化を示

す例がほとんど（92％）となり、源氏物語（11c 前後）では人やその一部を主体とし、その状態の変化を表す例に偏る（70％）としている。渋谷（1993）は、このことから、古代日本語における動詞「ナル」の用法の変化は、概ねモノを主体とし、その出来や変化を表す用法から人や人の一部を主体とし、その状態の変化を表す用法への拡張という道筋が見えるという。

さらに、渋谷（1988）は、その後の江戸時代の可能表現には、補助動詞エル、助動詞（ラ）レル、可能動詞、ナル、デキルなどが用いられたが、この時代のナルは、徐々に当為表現・禁止表現に専用されるようになって、当為表現の「シナケレバナラナイ」などや、禁止表現の「シテハナラナイ」などの後部要素になっていき、この時期以降は、潜在的な多機能性として用いられるようになったとして、「だめだ」の意を表す評価系の形式になったとしている。さらにその後、渋谷（1988）は、ナルという形式がこのような多くの機能を担うことになってから、過重な機能をもつことになったため、分析化（形式の透明化）が起こり、その結果、シテナラナイの後部要素が「いけない」に変わっていき、それと同時に可能のナルがデキルと交替するとして、以下の（80）のようなナルがとる形式にはデキルが用いられ始めたという。

- (80) a. 動詞性名詞ガナル
 b. スルコトガナル
 c. 動詞性名詞ナル

原口（1985：59）

渋谷（1993：154）は、これらのナルに代わってデキルが可能表現形式化になったのは、江戸時代の後期に入ってからのことであるとして、本来的には、「何かが現れてくる」の意味をもつイデクであった形式が、次のようなステップを経て可能形式化したとしている。

- (81) i. モノ Y の出来：Y ガ デキル
 ビルができた
 あれへまいり、心みをいたさう、酒がようできたとは申たれ共、心もとなふ御ざる
- ii. モノ Y の、人物 X への出来：X ニ Y ガ デキル
 僕に腫れ物ができた
 今夜は何とやらんおそろしひ心がいできた

iii. コト Y の、人物 X への出来 : X ニ Y ガ デキル

僕に準備ができた

ヲやおまへモウお仕舞が出来たネ

iv. X の意志的な働きかけを伴う可能表現形式化 : X ニ／ガ Y ガ デキル

僕に／が 勉強することができた

僕に／が 勉強ができた

僕に／が 勉強できた

江戸へ金を持って帰ることは出来ません

渋谷 (1993 : 153) は、このように、デキル形式は、形式上、分布上、意味上すべてにおいて、ナルを引き継いでいるとしている。では現代語において「できない」という形式がどうして禁止を意味するのであろうか。この形式の文法化の度合いは、後ほど考察する。以下では、可能動詞の変遷を先行研究のレビューからその変化のプロセスを捉える。

可能動詞の成立には、青木 (1996) を参考することにする。青木 (1996 : 50) は、可能動詞は「四段動詞の下二段派生 (対応する自動詞をもたない四段他動詞が形態的にその不備を補おうとする「自動詞化形式」(青木 1995))」によって生成されたと仮定し、室町時代 (1336 年～1573 年) から現れたものとみて、室町期の抄物を調べた。その結果、可能の用法は、尊敬や受け身の用法の中において見られたが数はわずかであり、それも否定文の中においてのみであったという。これらの可能の用法は、青木 (1996) は否定文のなかにおいて保たれ、のちに否定を伴わない形でも可能表現として機能するようになったとしている。さらに、青木 (1996) は、江戸前期 (1598 年～1720 年まで) の資料からみて、可能動詞の用例は、「読める」「飲める」「いえる」の三語しかなかったのが、江戸中期 (1730 年～1800 年頃) の資料では異なり語数はやや増え、次いで、江戸後期 (1800 年頃～) になると、かなりの異なり語数が生成されている。つまり、江戸後期になると、可能動詞は徐々に生産性をもつようになって、文法現象として確立するのである。これらの変遷を、青木は以下のようにまとめている。

(82) 可能動詞の生成 (青木 1996 : 47)

- ① 対応する自動詞を持たない四段他動詞から生成される段階
- ② その他の四段動詞から生成される段階
- ③ 四段動詞以外の一段動詞・カ変動詞から生成される段階

以上、歴史的観点から、不可能形式と禁止表現の関係について述べた。

これらの変化の流れと要因から、現代語における不可能形式の禁止用法への文法化の度合いを考えることができる。現代語の可能形式も、概ね、可能表現のうちある決まった文法形式が、徐々に3.3節で分析したように、禁止表現の語用論的な意味が生まれているという変化である。次節では、これら現代語における度合いについて詳しく分析する。

4.4.3 不可能形式の文法化の度合い

4.4.3.1 文法化に関する基準

現代語の可能形式の否定形式、つまり、不可能形式は、多義的である。渋谷（1993：235）は、日本語の可能形式の変化に次の特徴を観察している。

(83) 日本語の可能形式の変化の特徴

I 可能表現の変化は否定表現から始まる

II 可能形式が衰退する場合には、その使用は否定表現に限定されていく

（渋谷 1993：235）

では、不可能形式が禁止として使われることに関して、その文法化の度合いについて考えてみたい。不可能形式が禁止表現として使われるというプロセスは、語用論的推論による拡大のプロセスであると考えられる。

語用論的推論は、ある文脈においてある形式が使われる際に生じてくる推意が、次第にその形式の意味として定着してゆくプロセスである。本研究で分析したすべての形式の変化のプロセスはこの語用論的な推論による変化であるのだが、不可能形式では特にこの特徴が顕著で、語用論的な拡大が要因となっている。しかし、これらの用法の文法化の度合いは低い、つまり、語用論的な推論の段階であり、文法化についてはまだ確認できないという段階である。以下ではこれらの形式の文法化の度合いについて考察する。

まず、Hopper and Traugott（2003）は、文法化の一方向性を支持するにあたって、以下の三つの言語現象を指摘した。

(84) 文法化の三つの言語現象

- a 意味の希薄化
- b 脱範疇化
- c 語用論的強化

Hopper and Traugott (2003)

本研究ではこの三つの言語現象の基準から、不可能形式による禁止表現の文法化の度合いを考察する。まず、意味の希薄化とは、意味の弱化または消失のことをいう。Hopper and Traugott (2003:94) によれば、文法化の初期の段階では、意味の再配分や転位が起き、後の段階では、意味の消失が起きるといふ。文法化において、意味の希薄化は必ず起こる言語現象であるとみなされている。例えば、*have to* の助動詞化に関して、*have* は所有の意味が希薄化したことになることがしばしば例としてあげられる。また、*be going to* において、具体的な領域の意味から抽象的な領域の意味に転移したのも、意味の希薄化であるとされている。

次に、(84b) の脱範疇化とは、内容語（動詞・名詞・形容詞など）の持っている形態的・統語的性質を失って、機能語（前置詞・接続詞・助動詞・代名詞・指示代名詞など）的な性質を持つようになることである。その変化の過程で、名詞の数や格、動詞の主語との一致や支配は消失する（秋元 2004 : 8）。つまり、大きなカテゴリー（major category）から、小さなカテゴリー（minor category）へ変化する過程である。本研究では、意味の変化の考察を行うため、この基準に関しては、文法化を起こした時、語彙項目の選択が狭まる（秋元 2003 : 10）という基準から見ていくことにする。

次に、語用論的強化について、河上（1996 : 184）は、ある表現をある状況の下で実際に使用する際の話者の解釈が、いつの間にか次第にその語の意味に取り込まれてしまうことであると定義している。語用論的強化は、例えば、英語の接続詞 *while* が古代英語では名詞であり、その名詞の用法が *for a while* という表現として残っている。中英語では時を表す接続詞として用いられるようになり、さらに譲歩を表す用法が現れてきたのがその例とされている。しかし、本研究において考察する不可能形式では、語用論的強化は意味の希薄化と表裏一体の現象であるので、この基準についてはここでは触れないことにする。

以上で述べた文法化における言語現象を基準に、4.2 節および 4.3 節であげた基準をプラスして、これらをもとに、以下では、不可能形式における禁止表現のそれぞれの文法化の度合いを見ていきたい。

4.4.3.2 意味の希薄化

不可能形式は、2.3.1 節で述べたように、人間その他の有情物（ときに非情物）が、ある動作（状態）を実現することが不可能であること、あるいはあったことを表す。不可能形式による禁止を表す例を見てみよう。

(85) 食べられません。 (食品の乾燥剤)

(86) 道路に長時間、反復継続して駐車することはできません。 (北海道警察ホームページ)

(87) 旅客車内に立ち入ることはできません。 (入場券切符)

これらの例文では、動作や行為の実行が実現不可能という意味ではない。つまり、食べることや、駐車すること、車内に立ち入ることは実際には可能だが、それらの実現があたかも最初から不可能であるかのように言うことによって、動作や行為を禁じているのである。つまり、「状況（不）可能」から「（不）許可」への変化であると言える。

この点をもう少し詳しく見てみよう。不可能表現の意味は、能力不可、条件不可、禁止に分類することができる。

- (88) a. 免許がないから駐車できません。
b. ここは狭いから駐車できません。
c. ここは車庫につき、駐車できません。

この三つの例では、(88a) は能力が欠如しているために不可能であることを表し、(88b) は条件を満たしていないために物理的に実現が不可能であることを表している。これに対して(88c) は聞き手の能力とは関係なく、また物理的に不可能なわけではない点が上の二例と異なる。ここは駐車を許さないという相手に対しての働きかけであり、禁止を表しているのである。

以上のことから、不可能形式が禁止を表す場合、不可能という意味が希薄化して、語用論的な強化として、禁止になっているのだと言える。

4.4.3.3 脱範疇化

現代語の不可能の形式類には以下のようなものがある。

(89) 現代日本語の不可能形式

- a. 不可能動詞：書けない、走れない
- b. 動詞未然形＋助動詞（れない）、られない：書かれない、見られない
- c. できない
名詞＋できない：勉強できない
名詞＋ガ＋できない：勉強ができない
動詞連体形＋ことができない：勉強することができない
- d. 動詞連用形＋えない：勉強しえない

このうち、(89d) の形式は禁止の機能を持たない。つまり、不可能形式のカテゴリーにおいて、不可能動詞と「動詞未然形＋助動詞（れない）」「名詞＋できない」の形式にしか禁止の機能は現れない。この基準に関して、脱範疇は一部で起こっているとみなすことができる。

4.4.3.4 文脈の制限

不可能形式は文脈による制限が多く、禁止は限られた場面や人間関係の場合に使われる。例えば、可能形式による禁止は不可能とは違った格を取ることがある。まず、不可能動詞の場合からみて、本来の不可能動詞の統語構造は以下の三つの格の形式がある。

(90) 不可能動詞の統語形式

- [ニ（ガ）] 格：太郎に英語が話せない。
- [ガ（ガ）] 格：太郎が英語が話せない。
- [ガ（ヲ）] 格：太郎が英語を話せない。

(渋谷 1993 : 43)

しかし禁止として使うものには、以下の (99) のような主題を表す「ハ」の場合がしばしば見られる。まず、能力不可には以下のようなものがある。

- (91) a. お前は体が弱いから泳げない。
- b. お前には泳げない。
- c. お前が泳げない。

能力不可は、聞き手の能力のみを指すため、あまり禁止としては使われない。それに対して、状況不可には以下のようなものがある。

(92) ここは泳げません。(禁止)

この「ハ」は、尾上(1981)によると、即定の、あるいは目の何かに対して新たに説明を与えるという場合に「題目提示」という働きがある。

この「ハ」格が表すものは、語用論的に、主語が特定の誰かではなく一般の人全員について誰でも「ここでは泳げない」ということに等しい。この語用論的な含意によって、相手に対しての働きかけになり、禁止を表すことになる。

さらに、不可能形式は、「するな」のような典型的な禁止のように自由に「ガ」格や「デ」格、「ヲ」格をとることができない。例えば、以下の例文では、「するな」形式は使えるが、不可能形式は使えない。

(93) a. お前が泳ぐな。

b. ?お前が泳げない。

(94) a. ここで走るな。

b. ?ここで走れません。

(95) a. ここを走るな。

b. ?ここを走れません。

このように、不可能形式がこれらの格を取らないのは、不可能形式には制限が多く、文法化の度合いが低いということである。この点については、「できない」形式も同様である。「できない」には「動名詞+は」、「名詞+は」、「ことは」、が先行して禁止を表すことができる。例えば、以下のような例文がある。

(96) a. ここは喫煙できません。

b. 授業中はおしゃべりできません。

c. まだ帰ることはできません。

これらはいずれも不可能動詞と同様、主語は「一般の人」で、限られた語用論的な文脈や話し手と聞き手の上下関係においてのみ禁止の働きをする。つまり、不可能形式は、「するな」形式に比べて、禁止を表すには語用論的な制限が大きいのである。

以上、話し言葉における不可能形式の禁止への文法化の度合いを文脈の制限から見てきた。また、書き言葉においては、不可能形式による禁止表現は、丁寧さを必要とする告示において多用されている。それらの不可能形式における告示では、不可能動詞の敬体が定型化されている。この点についても、文脈や語用論的な条件という制限が大きいと言える。これらの禁止には例えば以下のようなものがある。

- (97) a. 食べられません。
b. 関係者以外入れません。
c. ここは車庫前につき駐車できません。
d. 芝生には入れません。

これらは、公共機関や客に向けたものが多いため、常体があまり使われない。また、この形式以外にも、「動詞連体形＋ことはできません」の形式の使用も見られる。

- (98) 「道路に長時間、反復継続して駐車することはできません。」

(北海道警察ホームページ)

- (99) 「旅客車内に立ち入ることはできません」

(入場券切符)

これらの書き言葉において、一般的に丁寧体で使われるのは、使用場面や状況、使用する話し手と聞き手の人間関係、語用論的文脈が原因である。このような条件下では、上記の例文のいずれも、実際の行為者の能力が欠けているために当該行為の実行が不可能になったわけでも、その場の状況においてなんらかの条件が欠けているために行為の実行が不可能になったのではない。このような文脈では、聞き手／読み手として想定されているのは一般の人であり、しかも眼前にはいない。話し手／書き手との間には距離が存在している。このような水平的な距離（上下関係のような垂直的距離に対する）を表すのが丁寧体である。このような状況では丁寧体が用いられるのが当然であり、社会的に定着していると考えることができる。つまり、告示における敬体の不可能形式は、一般的に禁止として認知されており、決まった語用論的な文脈

制限であると言える。

以上三つの形式類を分析した結果、不可能形式全般について、決まった文脈、語用論的条件の制限からみて、不可能形式の文法化や禁止としての意味化の度合いは低いということが言える。次節では、4.3 節のテストを用いて、これらの形式の固定度、つまり語彙としての一体度を考察していく。

4.4.3.5 時制の取り替え

この節では、4.2 節、4.3 節と同じく、不可能形式の時制を過去形にできるかどうかを基準にこの形式の一体性を考察する。

まず不可能動詞については以下のような例文があった。

(100) 「利江！お前一」

「お父さん」と、利江は言った。

「黙っていられなかったの。一ね。ただ食べていくより大切なものがあるわ。私やお母さんが働いたって、食べていけるわ」

「利江…」 父親が、その場にペタッと座り込んでしまった。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『寝台車の悪魔』)

(101) ここまでの途中の道は一般車と大型トラックに阻まれ全く快適に走れなかったんですが、トラックを追い越してやっと快調に走れると思ったら。。。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『Yahoo!フログ』)

これらの不可能動詞が過去形に変えられるのに対して、禁止の意味では、当然ながら、過去形に変えることができない。

(102) a. ここは泳げない。(禁止)

b. ここは泳げなかった。

c. ここは泳げませんでした。

(102a) が禁止を表せるのに対して、(102b,c) はいずれも禁止の意味がないことがわかる。また、「できない」形式については不可能文としては、以下の例文があった。

(103) 「あたしにも理解ができなかった。でもあんたを見た瞬間にわかったよ。びっくりした。

だって、あんたはおっかさんと瓜二つなんだよ。常磐屋のおかみさんにはちっとも似ていないのに」
(現代日本語書き言葉均衡コーパス『水に映る』)

(104) 「ついこの前、父と母が離婚した。中学の担任のミスで、ぼくは志望校を受験できなかった。」
(現代日本語書き言葉均衡コーパス『男たちは北へ』)

これら不可能を表す「できない」に対して、以下では、禁止の不可能を表す「できない」文には、禁止の意味が現れない。

- (105) a. ここは車庫前につき、駐車できません。
b. ここは車庫前につき、駐車できなかった。
c. ここは車庫前につき、駐車できませんでした。

上記の両形式とも、いずれも過去形には、変えることが可能であるが、禁止表現としては過去形に変えることができない。これは、語としての一体性というより、禁止の意味を表す不可能形式には文脈の制限があり、主語が「一般の人」に限られていて、それら「一般の人」に対して過去形は使えないからである。そのため、この基準に対しては、語としての一体性がないという結論になる。

4.4.3.6 丁寧体の取り替え

不可能形式が語として一体性を調べるために、丁寧体になるかどうかのテストを試みる。

(106) また、ブレーキや反射材のない自電車は道路を走れませんよ。
(現代日本語書き言葉均衡コーパス、『Yahoo!ブログ』)

(107) 関係者以外入れません。

また、「できない」形式の丁寧体には以下の例文がある。

(108) 抽選後の取り下げはできません。
(現代日本語書き言葉均衡コーパス、『ねりま区報』)

(109) ただし、営利目的での利用はできません。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス、『広報かめやま』)

以上から、いずれの形式においても、丁寧体にすることが可能であることがわかる。つまり、この基準に関しても、語としての一体性がないということが言える。

4.4.4 まとめ

以上、不可能形式における禁止表現の文法化の度合いを考察した。結果は以下の表に示す。

意味の希薄化	○
脱範疇化	△
文脈の制限がない	×
時制の取り替えの不可	×
丁寧体の取り替えの不可	×

表 11 不可能形式の文法化の度合い

以上の分析から見て、不可能形式の文法化の度合いは、比較的低いことがわかる。不可能形式の禁止は、語用論的推論によって、禁止の働きの機能を生じていると考えられる。

4.5 否定形式

4.5.1 否定形式の史的変遷

否定の表現は、小林（1968）によれば、「あらず」から「なし」への交替によって、「非存在」を表す意味が拡張し、「否定判断」の意味が生じたという。具体的にはまず、上代には「あらず」があり、主に中古以前においては以下の例文のように、「あり」の一用法として用いられていたという。

(110) 高く－あらず

木に－あらず

(小林 1968 : 46)

また、否定には、「なし」という表現もあり、これは存在をいう「あり」に対して、非存在の意を表すものであったと小林（1968）はいう。

小林（1968）は、万葉集において、非存在の概念を表すには「なし」が広く用いられていたのに対して、「あらず」は30数例ほどあった。それが中古以降になると「あらず」は極めて稀になっていたという。また、「と」のような体現性があるものを受ける場合にも、万葉集では「あらず」と「なし」が共存はしていたが、「あらず」が8例に対して、「なし」は22例と優勢であったと述べている。小林（1968）は、一般に、両形式に差は認められないようであるが、中古以降になると、源氏物語では、「あらず」2例に対して、「なし」は15例であったように、否定表現は次第に「なし」に統一されて、非存在の場合の傾向と一致したと指摘している。

その後の中古、中世（院政期を含む）において、小林（1968）は、「あらず」は慣用的な用法としてのみ残される傾向を見せており、文語的性格の強いものになった。これに対して、「なし」は口語的な性格を持ち、次第に一般化したとしている。小林（1968：58）は、やがてこの「なし」の用法が拡大して、補助用言としての用法を持つようになったと述べている。

そして、現代語における「ない」という形式の用法は、基本的に上記の中世末期頃の用法を受け継ぐもので、辻村（1968：54）は、この「なし」から「ない」への変化は、「不在概念から否定判断へという、詞から辞への移行過程」であるとしている。それは、例えば「花でない」の場合、「花として存在しない」という存在の意味は薄くなり、「ない」は補助動詞としてみることができるという。

この全体的な流れにおいて、「なし」の否定判断の意味合いに注目してみたい。「するな」の変遷を明らかにした細川（1976）でも、文末に来る「なし」は、「強い断定的な意味を有する」として、ここから禁止の意味が生じたとしている。

これらの否定形式の変遷の経路は、Jespersen（1917[2010]）が提唱した「否定辞は一定の周期で変遷する」という通言語的変化の仮説に一致すると考えられる。

The history of negative expressions in various languages makes us witness the following curious fluctuation: the original negative adverb is first weakened, then found insufficient and therefore strengthened, generally through some additional word, and this in turn may be felt as the negative proper and may then in the course of time be subject to the same development as the original word.

(Jespersen 1917:4)

Jespersen (1917[2010]) は、「否定」と「否定判断（または強い断定）」の関係について以下の六段階からなる変化の仮説を立てている。

(111) 否定辞の変遷過程

- 第一段階 否定要素が動詞に先行する
- 第二段階 強調のための語句が付加される
- 第三段階 強調表現が否定副詞となって否定要素と呼応的に使用される
- 第四段階 元々の否定要素の出現が随意的となる
- 第五段階 否定副詞のみで否定が表される
- 第六段階 否定副詞が動詞に先行する否定要素になる

(森 2013 : 7-8)

森 (2013) はこの六段階に対して、さらに以下のような、「するな」の歴史的変遷を段階づけ、Jespersen (1917[2010]) の六段階に照らし合せた。

(112) 「な+動詞+そ」と「動詞+な」にかかわる歴史的変遷

- 第一段階 「な+動詞」
- 第二段階 「な+動詞+そ（＝強調語句）」
- 第三段階 「な+動詞+そ（＝否定副詞）」
- 第四段階 「(な+) 動詞+そ」
- 第五段階 「動詞+そ (な)」

(森 2013 : 9)

森 (2013) は、これらの経路は同じような傾向が見られるとして、細川 (1976) がいう「な+動詞+そ」の変種として「な+動詞」という形式がまず存在し、その「な+動詞」は「な+動詞+そ」の出現に先行するということが確認されているとして、これが上記で述べた第一段階であるとしている。次に、森 (2013) は、「そ」についてはいくつかの説があるが、『日本国語大辞典』によれば、「な+動詞」の意味をさらに強調するために「そ」が添えられて「な+動詞+そ」になったということから、これが第二・第三段階であるとしている。そして、第四・第五段階において、動詞先行の「な」が随意的となって、省略されるようになり、もう一つの

禁止表現の「動詞＋な」の形との類推が起こり、「そ」が「な」に置換され、一元化されたという。このような過程は、Jespersen (1917[2010]) の六段階と同じような変遷の過程であると森 (2013) は言っている。

禁止が否定を伴うとすれば、「行かない」という否定形式が「行くな」の意味として使われるのは、それほど不自然ではない。禁止が「否定＋モダリティ」であるという解釈は、先行研究ですでに述べられていることであるので、下記において紹介する。

時枝 (1941 : 350) は、文の成立を具体的な言語の場における表現の成立と重ねて考えるという立場をとっており、表現の成立は主に文末の活用形や終助詞などの存在に関わるとして、例えば、命令形で終わる文には、その客体的なものを表現する「詞」に、言語主体の直接的な働きを表現する「辞」がついて、「辞」が「詞」を包み、統一するという形で文表現が成立するとしている。時枝 (1941) はこのことを次の図式で説明している。

時枝 (1941) は、「命令文」の典型的な形式の「そこにすわれ」のような形式は、以下の図式にすることができるとしている。

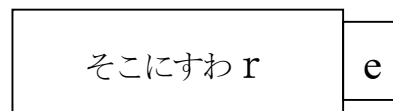


図 9 命令形の意味 (時枝 1941 : 350)

上記の命令文に対して、「そこにすわる。」のような文が命令として機能することは、次のように図式化することができる。

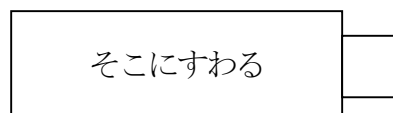
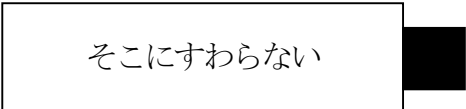


図 10 叙述形式による命令の意味 (時枝 1941 : 350)

時枝 (1941) は、この図における文末の斜線部は、「零記号の辞」と呼んでいて、これが主体の活動である「命令」であり、「詞」を包み、統一して文になっているのだが、それが語形態には現れないというように説明している。この考えを元に、否定形式による禁止表現についても、同じように図式を用いて、下記のように考えることができる。



そこにすわらない

図 11 否定形式による禁止の意味

しかし、このような図式において、斜線部の「零記号の辞」は「命令」というより、
「強調」であり、「するな」の歴史的変遷からみて、「するな」形式も、「な＋動詞＋「強調を
表す辞」」から来ているものであるから、「しない」のような否定形式も、「動詞＋否定＋零記
号の強調」を表しているものだと考えれば、どれも同じような流れに沿って禁止の意味に変化
していると考えることができる。これらの違いは、否定形式の方は、この場合「強調」の意味
は「零記号の辞」によって表されているため、語順の変化などは起きておらず、統語や形態的
な変化も観察されていない。

否定形式の禁止への意味化や文法化に関して、別の側面で、この経路を観察している研究が
ある。例えば、Bybee (1988) の指摘では、prediction は imperative と同じ形式ともつとして、
以下のように述べている。

In some languages the future and the imperative (or optative or hortative) have the same
form, or the gram used for future is also used for imperative.

[...] The use of the future for direct commands is easy to verify in English (*You will go to
bed!*) in other languages, but this type of imperative is usually secondary, and not the
primary means of commanding. Such a use constitutes an indirect speech act, that is, a
prediction is made in the second person, which has the force of an imperative, given the
social context and intonation.

Bybee (1988 : 372)

つまり、Bybee (1988) によれば、聞き手に行為を促す機能は、話し手の予想・願望を表す
表現の間接発話行為からきているのである。肯定や否定のような叙述形式の文には、未来の意
味を帯びているので、prediction として解釈できる。この prediction は、話し手の願望、話し手
の肯定的な判断や否定的な判断ということを含意し、さらに禁止へと変化する。日本語では、
肯定形式にも、命令の機能を持つ文がしばしば見られる。例えば以下のものがある。

(113) そこに座ります。

(114) はいそこ、静かにする。

これらはいずれも、教室で教師が子供に対して使うものであり、命令の意味を持つ。この変化の経路は、Heine & Kuteva (2002) で指摘された Do から OBLIGATION への変化と概ね同じものであると考えられる。つまり Do のような表現には未来という意味が含まれていて、その未来という含意が話し手の願望や話し手の肯定や否定的な判断を表し、さらに命令や禁止として使われるようになることを可能にしている。このような意味の変化には、「主観化」が働いていると考えられる。

主観化の例としては、日本語では「うべ」から「べし」への変化が挙げられる。「べし」は文末では断定的当然のこととして義務を表すものであるが、その古い形として、「うべ」がある。以下がその例である。

(115) 東の市の植木の木垂るまで逢はず久みうべ恋ひにけり。 (万葉集 310)

(東の市に植えた木が、大きく、枝が茂るまで、逢わずにいたことだ。久しく会わないので、本当に恋しいことだ。)

このように「当然だ、もつともだ」という意味を持つ副詞「うべ」＋強調の副助詞「し」の「う」が脱落するとともに助動詞化して、「必然」「推量」の意味を表すようになり、その後、推量の意味を根本として、可能、勧誘、命令などの意味へ発展した (佐伯 1950 : 176)。つまり、「うべ」は、文末の「べし」に文法化されるにつれて、主観性の高い断定や命令を表すようになったのである。肯定形式や否定形式も、もともとは、叙述の「存在」を表す意味から、話し手の肯定や否定的な判断になって、そこからさらに命令や禁止として使われるようになった。この点では、同じく主観化したものであると言えるだろう。以下では、これらの変遷と経路をもとに、否定形式の文法化の度合いを見ていきたい。

4.5.2 文法化の度合い

前節で述べたように、禁止は行為の非実現を聞き手に強制するものである (高梨 2007 : 46) から、「動詞＋[否定要素＋強調要素]」という構造を持つ禁止表現「するな」も、「しない」のような「動詞＋否定要素＋強調要素 (零記号の辞)」の構造も、禁止表現としては同じと考

えることができる。この節では、話し手の「否定判断」や「強調」の意味が文法化のプロセスによって生じていることを、主観化という概念を導入して分析したい。

Traugott (2010 : 33) は、主観化を以下のように定義している。

The term subjectivity refers to the way in which natural languages, in their structure and their normal manner of operation, provide for the locutionary agent's expression of himself and his own attitudes and beliefs.

Traugott (2010: 33)

つまり主観化とは、「話者が自分自身のことや、自分の態度・信条を述べるための、自然言語がその構造や通常の利用の中で備えているさま」をいう。

Traugott (2010:34) によれば、表現は次のような主観性の漸次的推移性 (cline) に沿って組織化できるという。

(116) 表現の推移性

non-subjective > subjective > intersubjective
(非主観的 > 主観的 > 間主観的)

(Traugott 2010:34)

さらに、Traugott (2010:35) では、主観化、間主観化は、以下のようなメカニズムとしてまとめられている。

(117) 主観化と間主観化のメカニズム

- a. meaning are recruited by the speaker to encode and regulate attitudes and beliefs (subjectification).

(意味が話し手の主観的な信念状態・態度を表すようになる (主観化))

- b. once subjectified, may be recruited to encode meanings centred on the addressee(intersubjectification).

(意味が話し手の主観的な信念状態・態度を表すようになる (主観化))

(Traugott 2010:35)

この主観化には *promise* がしばしば例としてあげられる。Traugott (1997) の分析によれば、*promise* は動詞から認識的意味を持つようになり、脱範疇化を起こし、疑似法助詞化していった。この過程は主観化の過程であると一般的に認識されている。この節では主にこの観点から否定形式の文法化の度合いを考察する。

一般に、話し手の意志性は主観的なものとして考えられる。否定形式の話し手の意志性に関しては、「ほら」という感動詞との共起によって判別できる。大島 (2001) は、「ほら」は聞き手目当ての意味を持つとしている。

- (118) a. よそ見しない！
b. ほら、よそ見しない！

(富樫・中沢 2007 : 2)

否定形式の禁止は、「ほら」との相性がかなり高く、「ほら」と共起することで、禁止表現において、聞き手目当てとの親和性が高くなる。

(117a) のような、話し手の主観的な信念、態度を表す主観性を持つようになったということを、以下に幾つかの例文でその変化を示す。まず、(119) のような平述文において、「していない」に比べて、「しない」のほうが話し手の意志が含意されている。つまり、「僕は論文を書くつもりはない」という意志表現の文の意味合いを持っている。

- (119) a.僕は論文を書いていない。
b.僕は論文を書かない。

この意志性は、二人称主語の文では分かりにくいですが、人称がなくなると、現在形に比べて、未来形では、話し手の行為要求の意思が読み取れるようになる。(120a) が否定の存在文というある現象に対する描写であり、(120c) のような主語を表さない文は禁止として機能する文になる。

- (120) a. 君は遊んでいない。
b. 君は遊ばない。
c. 遊ばない。

4.5.2.1 意味の希薄化

意味の希薄化は元の意味が消失することもあるが、その意味が抽象化（desemanticization）してしまうことを指す場合もある。

否定形式は、本来は動詞の否定の叙述であるが、その基本的意味は、動詞の非存在を表すものである。それらの例を次のように示す。

- (121) a. トレイシーももはや我慢できなくなり、トイレを使った。水を流そうとしてみたが、壊れていて作動しない。

（現代日本語書き言葉均衡コーパス『明日があるなら』）

- b. 第一項から第四項までの規定は、平成六年分の確定申告書にこれらの規定の適用を受けようとする旨及びこれらの規定により必要経費に算入される金額の記載がない場合には、適用しない。

（現代日本語書き言葉均衡コーパス、『阪神・淡路大震災の被災者等に係る国税関係法律の臨時特例に関する法律』）

しかし、禁止を表す場合、否定形式は意味が抽象的になってしまい、これらの動詞の非存在の意味が希薄化する。特に、聞き手に向かって発話される場合には、以下のように、動詞の非存在ではなく、話し手の意思という意味合いが強くなる。

- (122) a. これは最高の手段です。とにかく話をしない。「どうしたの？最近変だよ」といわれても返事をしない。

（現代日本語書き言葉均衡コーパス『フランス人の手づくり恋愛生活』）

- b. 「あとで後悔するようなことはしない！」わたしは呼びかけた。

（現代日本語書き言葉均衡コーパス『沈黙のセールスマン』）

これらの例文のように、禁止を表す場合の否定形式は、非存在の意味が抽象化している。しかし、この抽象化は、第2章で分析したように、否定形式が文否定を表す場合、全般的に心理的な否定であり、話し手のなんらかの情意が込められていることが読み取られるのも否定全般に言えることで、禁止表現の場合に限られたものではない。そのため、この基準に関しては、禁止として文法化されているとは言えない。

4.5.2.2 脱範疇化

脱範疇化 (desemanticization) は、ある語のもとのカテゴリーに属する語の減少・消失という観点から確認できる。では、否定形式のもとのカテゴリーを見てみよう。

否定形式には以下のようなものがある。

(123) 現代日本語否定形式

- a. しない
- b. しません
- c. しねえ (口語形式)
- d. 動詞の連用形+ん (方言)

これらの形式は、いずれも禁止を表せる。以下の例文を用いてこれらの形式をそれぞれ禁止の機能を表す文を示す。

(124) 現代日本語否定形式による禁止

- a. 走らない。
- b. 廊下を走りません。
- c. 漫画なんか読まねえ。
- d. 走らん。

これらの例に見られるように、いずれの形式も禁止の機能を持つことが可能である。そのため、否定形式による禁止は、カテゴリーに属する形式の減少が見られないため、脱範疇化は起こっていないといえる。

4.5.2.3 文脈による制限

否定形式による禁止には、語用論的な条件や文脈の制限が大きい。不可能形式ほど制限されてはいないが、話し手と聞き手の上下関係や発話場面が限られている。具体的な文法化の度合いについては、以下で前節と同じような考え方で考察していきたい。

まず、叙述文の否定形式には、以下のようなものがある。

(125) 「しない」形式の叙述文の格選択

- [ハーヲ] 格：太郎は論文を書かない。
[ガーヲ] 格：太郎が論文を書かない。
[ハーハ] 格：太郎は論文は書かない。
[ハーデ (ハ) ーヲ] 格：太郎は学校で (は) 論文を書かない。
[ハ] 格：論文は書かない。
[ハーマデ (ハ)] 格：太郎は学校まで (は) 行かない。
[ハーカラ (ハ)] 格：太郎は学校から (は) 行かない。
[ハーヲーニ] 格：太郎は花子を相手にしない。

...

否定形式は、以上すべての形式において、聞き手あてに主語を表さずに禁止の意味になることができる点では、不可能形式よりも自由である。

(126) 「しない」形式の叙述文の格選択

- [ヲ] 格：論文を書かない。
[ハ] 格：論文は書かない。
[デ (ハ) ーヲ] 格：学校で (は) 論文を書かない。
[ハ] 格：論文は書かない。
[マデ (ハ)] 格：学校まで (は) 行かない。
[カラ (ハ)] 格：学校から (は) 行かない。
[ヲーニ] 格：花子を相手にしない。

...

以上の格に関しては、文法化の度合いの高い「するな」形式や「してはいけない」形式も、以上すべての格を取ることができる。

(127) 「しない」形式の叙述文の格選択

- [ヲ] 格：論文を書くな／書いてはいけない。
[ハ] 格：論文は書くな／書いてはいけない。

[デ (ハ) ーヲ] 格：学校で (は) 論文を書くな／書いてはいけない。

[ハ] 格：論文は書くな／書いてはいけない。

[マデ (ハ)] 格：学校まで (は) 行くな／行ってはいけない。

[カラ (ハ)] 格：学校から (は) 行くな／行ってはいけない。

[ヲーニ] 格：花子を相手にするな／してはいけない。

...

しかし、第3章で述べたように、目の前のことをすぐ止めてもらう場合や緊急時の場合や地位が上位の人が下位の人あてに使うなど、場面や話し手と聞き手の上下関係が限られているので、この点では文脈の制限が大きい。文法化は、ある文脈においてのある形式の語用論的な含意が、次第にその形式の意味になっていき、他の文脈においてもその意味が感じ取れることから確認されるので、このように否定形式の禁止は文脈に制限されているため、この基準に関しては、文法化が起こっているとは言えない。

4.5.2.4 過去形の取り替え

この節では、4.2 節、4.3 節、4.4 節と同じ方法、つまり、否定形式の時制を過去形にできるかどうかによって、この形式の語の一体性を考察する。

否定形式については以下のような例文があった。

(128) a. 「じゃあな、ぼうや」

そして、行ってしまった。シスター・バーバラは、ひと言も発しなかった。ただ、ぼくに向かってドアの一つを指さすと、事務室にもどっていった。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『ぬいぐるみを檻に入れられて』)

b. 彼は、わたしのアドバイスを受け入れ、「今夜はやばいらしい」と言って、一人だけ走らなかった。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『本気で君を信じたい』)

上記の例文から見てわかるように、否定形式は、過去形にすることが可能である。過去形であるので当然ながら禁止の意味は持たないが、否定形式に過去形があることは間違いないので、語としての一体性は低いということが言える。

4.5.2.5 丁寧体

丁寧体にできるかどうか、否定形式が語として一体化しているか否かを調べるテストになる。動詞の否定形式を丁寧体にすると次のようになる。

- (129) a. オスは、特定種のシクリ科でないと、子育てしません。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『Yahoo!知恵袋』)

- b. ガス給湯器から水だけを出す場合はガスは消費しません。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス、『賢治のトランク』)

このように、丁寧体の否定形式は存在する。問題はこの「ません」形式が禁止の意味を持つかどうかである。この点は人によって容認度の差が大きいのであるが、近年、この「ません」形式による禁止表現は、徐々に広まりつつあり、幼稚園児や低学年の子供に対して使われることが多くなっている。例えば、以下の例文のように使われる。

- (130) a. (幼稚園で先生が) 廊下走りません。

- b. (プールの掲示) プールに飛び込みません。

このような例はまだ少なく、限られた場面において使われ、また、人によって容認度の差も大きい。

4.5.2.6 まとめ

以上、否定形式における文法化の度合いを考察した。その結果は以下の表にまとめることができる。

意味の希薄化	×
脱範疇化	×
文脈の制限あり	×
現在形のみ	×
常体のみ	×

表 12 否定形式の文法化の度合い

以上の分析から見て、否定形式による禁止表現の文法化の度合いは、全体的に低いということがわかる。否定形式による禁止も不可能形式による禁止と同様、語用論的推論によって、禁止の機能が生じている。つまり語用論的推論であり、文法化に関しては進んでいないということが言える。否定は、いろんな意味分野と関わるため、禁止への関わりに関しても、その用法の拡大のうちの一つで、語用論的な用法である。

否定形式による禁止には、もうひとつ「するんじゃない」という複合形式がある。この形式の文法化の度合いについては次節で詳しく検討する。

4.5.3 「するんじゃない」の文法化の度合い

「するんじゃない」は、「動詞の連体形」＋「の」＋「で」「は」「ない」からなる複合形式である。この複合形式が文法化されて、統合的に順応（adaptation）が起こり、音韻的に「の」「で」「は」が「んじゃ」に変化している。

「のではない」や「んじゃない」の形式は、もともと、強調的な否定として用いられる。ここではまず、その例を挙げる。

- (131) a. 「事実を隠してるんじゃない。あんたの見こみ捜査がおかしな方向にすっ飛んで
いってるから、ついていけないだけだよ」

「止せ、二人とも」 久保田が割って入った。

（現代日本語書き言葉均衡コーパス『水辺の通り魔』）

- b. そんなことをいってるんじゃない。早い話、おれは魔法使いではない、他人の心をのぞき読むなんてできっこないんだ。おれにできるのは聞かされた話の裏付けを取り、矛盾点やあいまいな箇所、ありそうもない話がないか耳をすましていることだけだ。

（現代日本語書き言葉均衡コーパス『わが故郷に殺人鬼』）

以上の例文はいずれも、「んじゃない」が強調的な否定として用いられている。しかし、この強調の否定に、動詞の連用形を付けて、二人称の行為者あてに発話することが定型化した「するんじゃない」という形は、禁止の意味を含む。その例に以下のようなものがある。

- (132) 「そんなこというんじゃない。」

この複合形式は、「言う」という行為を否定しながら、禁止の意味をも含んでいる。これと同じように、下記の例文においても、例えば、(133c)では、「口にする」ということを強く否定しながら、禁止をしているのである。これらの文法化している例文では、強調的な否定の意味が希薄化して、禁止の意味のみを表す。

(133) a. 廊下を走るんじゃない。

b. 何もなかったと強調する必要は無い。これからはホテルのことで勝手に行動するんじゃない。お疲れ様。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『シナリオ・フォト book』)

c. 「そういう言いかたはよせ、マディ。責任うんぬんを口にするんじゃない。まさかそんなことを向こうに言ったわけじゃないだろうな？」ダグは厳しい口調で聞いた。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『ベビーシッター殺人事件』)

これらの例は、いずれも強調の否定の意味が希薄して、行為の実現に対して、話し手が行為の実現を止めるように禁止をもちかけているものである。つまり、「するんじゃない」という形式が禁止として頻繁に使われる中で文法化を起こしていると考えられる。この文法化の度合いについては、以下ではさらに、この複合形式の統合的性質、つまり、一語としての一体化の度合いを、前の節でも用いた花園(1999)の用言認定テスト等を用いて、検証していく。

花園(1999)の条件形複合用言形式の認定については「してはいけない」の文法化の分析の節においてすでに紹介した。ここでは、「否定形式+のだ」との組成について先行研究に基づいて述べる。

「のだ」形式は、節を受けて名詞化する助詞「の」と、判定詞の「だ」という組み合わせによって生じている。これを単なる「の」+「だ」としては扱えないことについては多くの先行研究で述べられている(三上 1953、野田 1997 など)。そのため、この「のだ」がついた否定形式の「するんじゃない」を一つの形式として認めるためには、その意味の変化と共に、形式的な一体性についても考えなければならない。

本研究では花園が用いたテストなどを用いて、「するんじゃない」形式の統語的、意味的特徴を考察して、その禁止用法における文法化の度合いを考察する。具体的には、以下のテストを通して、「してはいけない」形式がひとつの語として一体化しているかどうかを見ていく。

(134) 「のだ」形の複数回使用

- a. 倒置の可能性
- b. 程度副詞の挿入
- c. 形式の取り替え
- d. 時制の取り替え
- e. 丁寧体の取り替え

4.5.3.1 「の」形の複数回使用

「するんじゃない」の「ん」は、助詞の「の」であり、判定詞の「だ」および否定辞の「ない」と組み合わせ、そこからさらに「じゃない」と音声変化しつつ、もとの意味が薄れ、複合した形式の「んじゃない」になった。そのもとの意味の希薄化については、文末の「の」と共起することからわかるので、以下の例文において示す。

- (135) 「こわがるんじゃないの。もどればいいんだから」おタエがそう言って、三人でもどろうとすると、それでもやっぱりもりからでられなかった。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『山道あるき歌いだし』)

これに対して、肯定形式の「のだ」は文末の「の」とは共起できない。その例文は以下のようになる。

- (136) a. *座るんだの。
b. *座るんの。

「するんじゃない」の「の」と文末の「の」が共起できるという結果から、「するんじゃない」は語として一体化していると言える。

4.5.3.2 倒置の可能性

花園（1999：44）は、倒置の可能性も一体性を見るテストになり得るとする。本節でも、このテストを適用してみよう。

- (137) a. *ない、走るんじゃ。
 b. *じゃない、{走るん／走るの}。
 c. * {ん／の} じゃない、走る。
 d. *のではない、走る。

「するんじゃない」形式については、上記のように倒置すると非文になる。このことから、「するんじゃない」形式が、全体として一語になっていると言える。

4.5.3.3 程度副詞の挿入

花園（1999：44）によれば、条件用言が表面的な形式どおり、「条件形＋用言」という二語としての分離性を保っているのなら、挿入が可能なのはであるが、「～しなければならない」などの形式は一体化されているため、挿入が不可能である。では、「するんじゃない」に「絶対に」挿入できるであろうか。

- (138) a. ジョージ、ばかなことをするんじゃない。
 （現代日本語書き言葉均衡コーパス『フェイマス・ファイブ』）
 b. ?ジョージ、ばかなことをするんじゃ絶対にない。 （作例）

この例文のように、「するんじゃない」形式の中に副詞を挿入することは非常に難しい。したがって、「するんじゃない」はひとつの単位、ひとつの語になっていることがわかる。

4.5.3.4 形式の取り替え

花園（1999：43）は認識的モダリティ形式として認定されている「にちがいない」「かもしれない」は、後半部を入れ替えて肯定の形（「*にちがいある」「*かもしれない」）にすることはできないのはこれらの形式が固定化しているためだと述べている。では、このテストを「するんじゃない」形式にも適用してみよう。

- (139) a. 廊下を走るんじゃない。
 b. 廊下を走るんだ。

このテストでは、「するんじゃない」の後半部を肯定の形にすることができた。興味深いことに、肯定形は命令を、否定形は禁止を表す。そのため、「するんじゃない」という形式による発話行為上の意味は、否定だけではなく、その説明のモダリティ「のだ」に由来し、この説明のモダリティは、命令の発話行為を表しうるということである。

つまり、命令の「のだ」を否定にすることによって、禁止の「のではない」ができ、それが頻繁に使われることで音韻的な変化が生じ、文法化された禁止の「するんじゃない」になったと考えられる。

4.5.3.5 時制の取り替え

次に、時制を過去形の時制における検索で、「するんじゃない」形式の語の一体性を考えて見る。

- (140) a. エデンの顔から血の気がうせた。ああ、頼まれるままに彼女をかばったりするんじゃないかった。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『恐れに満ちた再会』)

- b. 「なあんだ。それを知ってたら真ッさき駆けるんじゃないかった。」

(現代日本語書き言葉均衡コーパス『ひかり北地に』)

これらの例文のように、「するんじゃない」形式は、禁止としては機能しないものの、過去形に変換できる。文法化は、その語が活用や派生できなくなることから確認されるのだが、この基準に関しては、「するんじゃない」形式について、その一語化はあまり進んでいないということが言える。

4.5.3.6 丁寧体との交替

「するんじゃない」が語としての一体化を分析するために丁寧体のテストを適用してみると、禁止の意味を保ったまま、「するんじゃない」形式は丁寧体にすることができる。

- (141) a. 廊下を走るんじゃない。
b. 廊下を走るんじゃないありません。

したがって、このテストでは一語化していないことになる。

4.5.3.7 連文における省略

4.3.2.8 節で述べたように、花園（1999）は（47）のように、連文における省略が複合的形式を構成する要素が語としての資格を失っているかどうかのテストフレームを「なければならない」に試した。このテストを「するんじゃない」形式にしてみよう。

まず、以下の例文のように、連文の後部を省略して反復させることはできる。

- (142) a. 廊下を走るんじゃない、走るんじゃ。
b. 走っちゃダメだ、走っちゃ。
c. 走ってはいけない、走っては。

しかし、以下のように、「するんじゃない」形式は、連文においては、その帰結部の省略が不可能である。

- (143) a. 廊下を走るんじゃない。はしゃぐんじゃない。
b. *廊下を走るんじゃ、はしゃぐんじゃない。

上記の作例のように、「してはいけない」形式とは異なり、「するんじゃない」形式は、反復であれば省略できるが、連文においては、「しちゃだめ」形式と同じく、省略ができない。このテストでは、「んじゃない」という複合形式の一語化が進んでいるということが言える。

4.5.3.8 まとめ

以上のテストを用いた分析に基づいて、「するんじゃない」という形式の語としての一体化を考察した。結果は、次ページの表にまとめることができる。

このように、「するんじゃない」は「してはいけない」、「しちゃだめ」形式よりも文法化されている。この形式を複合形式として見た場合、その一体化については、「してはいけない」形式、「しちゃだめ」形式よりもさらに固定化の度合いが進んでいることがわかる。つまり、「するんじゃない」という形式は、禁止への文法化がその両形式よりも少し進んでいると言える。

文末の「の」の複数出現	○
倒置の不可	○
程度副詞の挿入の不可	○
否定型のみ可	×
現在形のみ可	×
丁寧体への交替の不可	×
連文における省略の不可	○

表 13 「するんじゃない」形式の一体化

4.5.4 まとめ

否定形式は、上記で見てきたように、不可能形式や評価の形式よりも文法化の度合いが低い。それは、第2章で分析したように、否定形式が、もともと抽象的な表現であるからだと考えられる。文法化は、具体的な表現から抽象的な表現へ変化していく。否定形式は、すでに抽象的な表現であるため、さらに文法化をすることは難しいのであろう。ただし、「のだ」と複合した形式の否定形「するんじゃない」に関しては、複合の一語化の度合いが高く、禁止として多く使われる。

4.6 第4章のまとめ

この章では、文法化の観点から、歴史的・共時的に、禁止の典型的な「するな」形式と比較しながら、それぞれの形式において意味的な変容と語としての一体性を考察した。全体的に、単一の形式の文法化の度合いは、以下の表のように、全体的に低い。

	不可能	否定
意味の希薄化	○	×
脱範疇化	△	×
文脈の制限がない	×	×
時制の取り替えの不可	×	×
丁寧体の取り替えの不可	×	×

表 14 単一形式の文法化の比較

表で示したように、単一形式の文法化の度合いは全体的に低い。それらを比べた場合、以下のような順で、語用論的に拡張されているということが言える。

(144) 単一形式の語用論的拡張の順

不可能形式 > 否定形式

また、複合形式に関しては、以下のように、語の一体性のまとめをすることができた。

複合形式	してはいけない	しちゃだめ	するんじゃない
形式の複数出現	○	○	○
倒置の不可	×	×	○
程度副詞の挿入の不可	×	×	○
形式の取り替え不可	○	○	×
時制の取り替えの不可	×	×	×
丁寧体の取り替えの不可	×	×	×
連文における省略の不可	○	○	○

表 15 複合形式の文法化の比較

上の表で示したように、複合形式の文法化の度合いは単一形式よりも高い。それらの一体化を比べた場合、以上の表でまとめたように、以下のような度合いの順に文法化されているということが言える。

(145) 複合形式の文法化の度合いの順

するんじゃない > しちゃだめ = してはいけない

本章において、禁止表現のそれぞれの形式の文法化の度合いを考察した。そうすることで、禁止表現の通時的な変化や禁止と関わるモダリティ・カテゴリーが明確になり、禁止というカテゴリーの全体像が見えてきた。

さらに、先行研究においてすでに他言語で考察された経路が、日本語の禁止表現においても

存在することが確認された。

- (146) ①SUITABLE>OBLIGATION (Heine&Kuteva2002:285)
②ABILITY>PERMISSIVE (Heine&Kuteva : 27-28)
③CIRCUMSTANTIAL POSSIBILITY>POSIBILITY (Bybee 1994: 193-194; Narrog 2012: 121-122)
④Do>OBLIGATION (Heine&Kuteva2002:285)

①の経路は、「してはいけない」の禁止への文法化の経路である。②の経路は、不可能形式の能力不可から禁止への経路、③は、状況不可から禁止への経路である。そして④の経路は、否定形式の禁止への経路である。

①の経路に関して、赤塚（1998：78-81）によれば、日本語は許可の概念を基本として、その延長線上に、義務、禁止、免除（不必要）の概念が現れるとしている。そして、②③④の経路からも、本研究においてその次の禁止への経路が考察されたので、それらの延長線上に、禁止という機能が発展されるということが言えるであろう。

これらの経路は、歴史的変遷においても、現代語の共時的観点から見ても、合致していることが観察されたことから、日本語において、禁止を参照点としてみたときに、一般的な経路であり、禁止表現においては、日本語も通言語的な経路と同じプロセスで変化しているということがわかる。

また、本章において文法化の観点から考察することで、日本語の通時的な変遷において、ポライトネスが変化の原因のひとつであるということが明らかになった。日本語は、敬意を必要とするため、その時代の表現の敬意が低減してくると、それに代用される表現が次々と生まれていくのである。このことが、日本語の特徴であると言えるだろう。

第5章 結論

本研究は現代日本語の禁止表現の実態を分析し、典型的な禁止の「するな」形式の使用実態だけでなく、使われなくなった原因について分析し、さらに聞き手に対する配慮（ポライトネス）から、禁止表現として使われるようになった諸形式において、否定評価の「してはいけない（しちゃいけない）」「しちゃだめ」、不可能形式「られない」「することができない」、否定形式の「しない」「するんじゃない」をそれぞれ語用論的観点、歴史的変遷、文法化の度合いを通して全面的に考察した。これらの分析において、文法化の度合いが高いほど典型的な禁止の「するな」形式に語用論的な用法が近づくということが明らかになった。詳しくは、以下の表において、第3章で語用論的観点から分析した用法と第4章で共時的文法化の観点分析した文法化の度合いを照らし合せてそれらのつながりを見ていこう。

まず、典型的な「するな」がもっとも文法化されていて、以下の全ての用法で使うことが可能である。

(1) 典型的な「するな」の用法

- ①「予防的禁止」
- ②「制止的禁止」
- ③「願望」
- ④「不満」
- ⑤「社会的望ましさの規範による禁止」
- ⑥「私的望ましさの規範による禁止」

第4章において、文法化の度合いを分析した結果、「するんじゃない」形式がもっとも文法化の度合いが高いことを明らかにしたが、この表現は上の六つの用法全てにおいて、「するな」と同じように使われる。「するんじゃない」より文法化の程度が低い形式「してはいけない」や「しちゃいけない」では、語用論的な観点からみても、「するんじゃない」より制限が多く、これらの用法に当てはまらない。

さらに、文法化されていない「しない」のような否定形式や「できない／られない」のような不可能形式は、用法がさらに限られていた。これらの語用論的な用法と文法化の度合いのつながりを、下記の表においてまとめる。

するな	するんじゃない	しちゃだめ	してはいけない	不可能形式	否定形式
①	○	○	○	○	
②	○	○	○	○	○
③	○				
④	○				
⑤	○	○	○		
⑥	○	○	○（上位）		

表 16 語用論的用法と文法化の度合いの関係

この表からわかるように、本研究において考察した表現では、文法化の度合いは、上記の表では左から右へと順に低くなっていく。それにあわせて、語用論的な用法も、左から右にいくほど、「するな」形式との違いが大きくなる。すなわち、文法化の程度と用法の幅には相関関係が見られるのである。

このようにこの二側面からの考察によって現代日本語の禁止表現というカテゴリーの全体像が明らかになった。また、このように様々な禁止表現が生まれる背景には、聞き手に対する配慮（ポライトネス）が関わっている。たとえば、「するな」は「配慮なしにあからさまに発話行為を行う」表現であり、そのために使用できる状況が非常に限られる。これに対して「食べられません」のような不可能表現は間接発話行為であり、禁止はあくまで含意にとどまる。そのため相手の面子を脅かす危険が低くなる。

このように、日本語の変化の原因のひとつにポライトネスがあることが分かった。

5.1 語用論的な違い

典型的な「するな」形式には、「不満」の意味合いが出やすいため、使われる状況が非常に限られていて、用いにくい。その代わりに、本研究で述べたそれ以外の形式が語用論的に使われ、そのうち使用頻度の高いものにおいて、「してはいけない」「してはだめ」では、条件部の「しては」が文法化されて音韻的变化もおこり、縮約形の「しちゃいけない」「しちゃだめ」のような形ができた。そのため、「しちゃだめ」は「してはいけない」よりも主観的な面があり、より評価のモダリティとして定着しており、そのため「するな」と同様な使用条件で使われる。一方、聞き手にとって、「するな」形式のような「不快感」を与えにくい、つまり聞き手のフェイスを脅かす危険が相対的に低いというポライトネス上の特徴を持っていて、現代

語では「するな」形式よりも多く使われる。

「してはいけない」形式の禁止は、「するな」禁止に比べて、社会的共通認識によって禁止される事態が望ましくないことであるかのようにいう表現であるので、「するな」よりも、少し遠回しな言い方でありながら、聞き手には選択権を与えずに行為をしないよう働きかけることができる。

不可能形式については、その不可能の原因に、能力不可と状況不可がある。そのうち、能力不可は聞き手の能力を否定することになるので、あまり使われない。能力不可が禁止として使用される場合は、聞き手のために行為の禁止をする場合のみである。また、状況不可による禁止は、「してはいけない」形式よりも婉曲的な表現で、聞き手に選択権を与えないながら、聞き手のメンツを潰さないように禁止される事態について、聞き手が知らないかのようにふるまって、その情報の提供によって、「不許可」「禁止」という機能をするのである。これは非常に遠回りした言い方であるが、一方その禁止される事態には公共におけるルールや規則によって持ち掛けるという面では、聞き手に選択権を与えないものである。不可能形式には、この二側面の特徴があって、不可能形式による禁止表現は、公共の場において、使われやすい表現になったのである。

否定形式による禁止は上記の二形式よりも強い言い方である。そこには背後に、話し手と聞き手の共通認識において当該行為がするべきでない行為であることを両者とも知っているという前提があるからだと考えられる。否定形式には話し手の否定の判断や意志が含まれていて、その判断を聞き手に提示することでしないよう働きかけるのである。否定形式は、ほかの形式と違って、当該行為がすでに実行されている場合、つまり制止の禁止にしか使われない。そして、その意味には、今すぐにやめさせたいという意味がいが含まれている。また、否定の複合形式において「するんじゃない」形式がある。この形式は、強調の意味を含んでいる。そのため、強い禁止として使われる。

5.2 文法化の度合い

本研究の考察で、評価の形式の複合形式や否定形式の複合形式において、禁止への文法化が進んでいるものが確認できた。また、禁止の機能は、不可能形式や否定形式における語用論的な拡張からも確認できた。

Traugott (2003) は、文法化は、形式がある範疇から他の範疇へ移動する際に、突然起こる変化ではなく、各段階を経て徐々に変化していく過程であると述べている。本研究において考

察したそれぞれの形式は、まさに禁止への文法化の各段階に位置している。

文法化は、語用論的な推論が強まることから始まる。本論文では、それぞれの形式における禁止の用法の語用論的な条件を分析した。それらの条件のもとで、会話の含意が頻繁に現れることによって、習慣化し、あるいは意味化して、多義が生じる。さらに、もとの意味が希薄化して、もとの意味カテゴリーから比較的小さなカテゴリーへ移動することも本研究において捉えることができた。この段階は、本研究で分析した単一形式、つまり不可能形式や否定形式の現在の段階である。

文法化は一般的には一方向であり、そしてやがて統語構造が変化し、音韻的な変化も発生する。音韻や統語的摩擦や縮約の変化が起こっている形式はさらに文法化、主観化が進んでいるということが言える。本研究で分析した複合形式の「ちゃ」や「んじゃない」は、この音韻的な変化である。また、複合した形式は、一体化が進み、分解できなくなると、文法化の度合いが高く、使用上の制限も少なくなる。本研究において分析した複合形式は、文法化の度合いが単一の形式よりも高いのであり、単一の形式よりも分解が難しいことが確認できた。

また、先行研究において、通言語的に考察された文法化の経路があるが、本研究の考察において、日本語にも同じ文法化のプロセスがあることがわかった。

- (2) ①SUITABLE > OBLIGATION (Heine&Kuteva2002:285)
- ②ABILITY > PERMISSIVE (Heine&Kuteva : 27-28)
- ③CIRCUMSTANTIAL POSSIBILITY > POSIBILITY (Bybee 1994: 193-194; Narrog 2012: 121-122)
- ④DO > OBLIGATION (Heine&Kuteva2002:285)

①の経路は、「してはいけない」の禁止への文法化の経路である。②の経路は、不可能形式の能力不可から禁止への経路、③は、状況不可から禁止への経路である。そして④の経路は、否定形式の禁止への経路である。

①の経路に関して、赤塚（1998：78-81）によれば、日本語は許可の概念を基本として、その延長線上に、義務、禁止、免除（不必要）の概念が現れるとしている。そして、②③④の経路からも、本研究においてその次の禁止への経路が考察されたので、それらの延長線上に、禁止という機能が発展されるということが言えるであろう。

これらの経路は、歴史的変遷においても、現代語の共時的観点から見ても、合致していることが観察されたことから、日本語において、禁止を参照点としてみたときに、一般的な経路で

あり、禁止表現においては、日本語も通言語的な経路と同じプロセスで変化しているということがわかる。

5.3 今後の課題

一般的に、日本語において否定表現のほうが肯定表現よりも主観的であり、言語変化をする場合でも、その主観性が先に現れて、肯定形より進んだ変化を示すとされている。本研究では、禁止表現を考察し、それらの全体図と文法化の経路を明らかにしたが、肯定表現の命令においても同じことが言えるかという問題については、今後の研究課題としたい。

さらに、本研究において、日本語の文法化のプロセスには、ポライトネスが大きくかかわっていることが分かった。今後は、敬語の変化のプロセスを考察し、日本語の変化を見ていきたいと考えている。

参考文献

- 青木博史（1996）「可能動詞の成立について」『語文研究』（81）45-56
- 赤塚紀子（1998）「条件文と Desirability の仮説」赤塚紀子・坪本篤郎『モダリティと発話行為』研究社，1-97.
- 秋元実治（2004）『コーパスに基づく言語研究—文法化を中心に—』ひつじ書房
- 安達太郎（2002）「命令・依頼のモダリティ」宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃（著）『新日本語文法選書 4 モダリティ』くろしお出版，42-78.
- 池上嘉彦（2000）『「日本語論」への招待』講談社
- 今井邦彦（2001）『語用論への招待』大修館書店
- 井島正博（2000）「可能文の多層的分析」『日本語のボイス多動性』くろしお出版，149-189.
- 井上優（1993）「発話における「タイミング考慮」と「矛盾考慮」—命令文・依頼文を例に—」『国立国語研究所報告 105 研究報告集 14』秀英出版，333-360.
- 遠藤潤一（1984）「四国における禁止の一表現法—「言ワレン・捨テラレン」の系譜について—」平山輝男博士古稀記念会編『現代方言学の課題第 3 巻 史的研究編』明治書院，405-432.
- 王志英（2005）『命令・依頼の表現—日本語・中国語の対照研究—』勉誠出版
- 大島弘子（2001）「「ほら」の機能について」『日本語教育』108 日本語教育学会，34-41.
- 尾崎奈津（2007）「日本語の否定命令文をめぐる——「スルナ」を述語とする分の特性と機能——」『日本語の研究』3（1）日本語学会，65-78.
- 尾上圭介（1977）「語列の意味と文の意味」『国語学と国語史：松村明教授還暦記念』（松村明教授還暦記念会編）明治書院，987-1004.
- 尾上圭介（1981）「「は」の係助詞性と表現機能」『国語と国文学』58（5），102-118.
- 尾上圭介（2001）『文法と意味 1』くろしお出版
- 小野正樹（2010）「現代日本語の命令形について—日本語学習者の習得と意識」『国際日本研究』2，79-98.
- 笠万裕美（2015）「動詞否定形＋ヨ・バイ・ゾ」形式による禁止表現—福岡県における使用状況および禁止表現体系上の位置づけ—」『早稲田日本語研究』20，58-69.
- 影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房
- 加藤重弘（2003）「語用論的に見た「可能」の意味」『富山大学人文学部紀要』38，87-98.

- 加藤重広（2004）『日本語語用論のしくみ』研究社
- 加藤正信（1973）「全国方言の敬語概観」『敬語講座 6 現代の敬語』明治書院，25-83.
- 河上誓作（1996）『認知言語学の基準』研究社出版
- 小林賢次（1968）「否定表現の変遷—「あらず」から「なし」への交替現象について—」『国語学』75，45-62.
- 神尾昭雄（1990）『情報の縄張り理論—言語の機能的分析—』大修館書店
- 神部宏泰（1978）「九州方言の可能表現—その存立と特性—」『兵庫教育大学研究紀要』7，1-17.
- 菊池康人（2000）「「のだ（んです）」の本質」『東京大学留学生センター紀要』10，25-51.
- 北野浩章（1993）「日本語の終助詞「ね」の持つ基本的な機能について」『言語学研究』12，73-88.
- 金水敏・工藤真由美・沼田善子(2000)『時・否定と取り立て（日本語の文法2）』岩波書店
- 工藤真由美（1979）「依頼表現の発達」『国語と国文学』56（1），46-63.
- 黒滝真理子（2005）『Deontic から Epistemic への普遍性と相対性—モダリティの日英語対象研究—』くろしお出版
- 小柳智一（1996）「禁止と制止—上代の禁止表現について—」『国語学』184，1-13.
- 佐伯梅友（1950）『奈良時代の国語』三省堂
- 渋谷勝己（1988）「江戸語・東京語の当為表現—後部要素イケナイの成立を中心に—」『大阪大学日本学報』7，99-119.
- 渋谷勝己（1993）「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33，1-262.
- 渋谷勝己（2005）「日本語可能形式にみる文法化の諸相」『日本語の研究』1（3），32-46.
- 蔣家義（2010）「モダリティの体系と認識のモダリティ」杏林大学大学院博士論文
- 鈴木睦（1989）「聞き手の私的領域と丁寧表現—日本語の丁寧さは如何にして成り立つか」『日本語学』8（2）明治書院，58-67.
- 高梨信乃（2002）「評価のモダリティ」宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃（著）『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版，80-120.
- 高梨信乃（2007）「評価のモダリティと実行のモダリティ」『神戸大学留学生センター紀要』13，35-54.
- 高橋太郎（2003）『動詞九章』ひつじ書房
- 田中寛（1989）「タイ語の可能表現」文教大学『言語と文化』2，71-107.
- 田中寛（2004）『日本語複文表現の研究：接続と叙述の構造』白帝社
- 田野村忠温（1992）『現代日本語の文法1：「のだ」の意味と用法』和泉選書

- 玉地瑞穂（2005）「日本語と中国語のモダリティの対照研究」『高松大学紀要』44, 17-54.
- 玉地瑞穂（2008）「応用認知言語学の観点から見たモダリティの意味変化の類型論的研究」『高松大学紀要』49, 59-77.
- 辻村敏樹（1968）「いわゆる敬讓の助動詞について」『国語学』72, 47-55.
- 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- 東郷雄二（1998）「フランス語の話し言葉の特徴—談話方略を中心に」『話し言葉のフランス語に見る文法の形成過程の研究』1-33.
- 富樫純一・中沢紀子（2007）「否定言い切り形による行為要求（禁止）について」『第95回関東日本語談話会』学習院女子大学, 1-11.
- 時枝誠記（1941）『国語学原論』岩波書店
- ナロック・ハイコ（2002）「意味論的カテゴリーとしてのモダリティ」大堀壽夫（編）『シリーズ言語科学3 認知言語学2 カテゴリー化』東京大学出版会
- 仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』くろしお出版
- 野田春美（1997）『「の（だ）」の機能』くろしお出版
- 花園悟（1999）「条件形複合用言形式の認定」『国語学』197, 39-53.
- 濱田敦（1948）「肯定と否定—うちとそと—」『国語学』1, 44-77.
- 早川知江（2012）「日本語のモダリティ：「主観的」表現と「客観的」表現」『名古屋芸術大学研究紀要』33, 285-301.
- 百留康晴・百留恵美子（2012）「古代日本語におけるナル表現」『認知言語学会論文集』12, 543-548.
- 福田翔（2016）「中国語可能補語の許可用法：文法化の観点から」『富山大学人文学部紀要』65, 308-328.
- 細川英雄（1972）「禁止表現形式の変遷—「なー」「なーそ」「一な」について」『国文学研究』48, 87-98.
- 細川英雄（1976）「禁止表現形式の歴史的関係について—その表現上の差異を手がかりに—」『国文学研究』60, 54-66.
- 細川英雄（1977）「中古散文資料における「ナーソ」・「一ナ」の差異について」『国文学研究』62, 35-48.
- ウィリアム・S・ハウエル、久米昭元（1992）『感性のコミュニケーション—対人融和のダイナミズムを探る—』大修館書店

- マクグロイン・H・直美 (1984) 「談話・文章における「のです」の機能」『言語』13-1, 254-260.
- 前坊香菜子 (2014) 「「必ず」「絶対」「きっと」の文体的特徴：『現代日本書き言葉均衡コーパスの調査から』『一橋大学国際教育センター紀要』5, 93-104.
- 益岡隆志 (1989) 「モダリティの構造と疑問・否定のスコープ」『日本語のモダリティ』, 193-210.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版
- 益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティの探究』くろしお出版
- 松下大三郎 (1928) 『改撰標準日本語』中文館書店
- 三上章 (1953) 『現代語法序説—シンタクスの試み』くろしお出版
- 三木悦三 (2009) 「疑問文の語用論」『西川盛雄教授退職記念論文・随筆集』英宝社, 36-50.
- 三宅知宏 (2005) 「現代日本語における文法化—内容語と機能語の連続性をめぐって—」『日本語の研究』1 (3), 61-76.
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 (2002) 『モダリティ』くろしお出版
- 宮下博幸 (2006) 「文法化研究とは何か」『早稲田言語研究会会報第10号』, 20-47.
- 宮地裕 (1952) 「否定表現の一考察」『西京大学学術報告』人文2, 44-57.
- 村上三寿 (1993) 「命令文—しろ、しなさい—」『ことばの科学』6 むぎ書房, 67-115.
- 森英樹 (2013) 「日本語否定命令文の歴史的変遷」『福井県立大学論集』40, 1-13.
- 森勇太 (2013) 「近世上方における連用形命令の成立—敬語から第三の命令へ—」『日本語の研究』9 (3), 1-16.
- 山岡政紀 (2006) 「発話機能論の原理—命令・服従を例として—」『日本語日本文学』16, 1-17.
- 山岡政紀 (2008) 「発話機能論の歴史」『日本語日本文学』18, 49-64.
- 山田小枝 (1990) 『モダリティ』同学社
- 山田政通 (2007) 「語用論から見た否定の世界：談話機能の視点から」『拓殖大学語学研究』114, 37-58.
- 山田政通 (2010) 「談話分析から見た否定：談話機能を探る」『否定と言語理論』開拓社, 378-397.
- 李楠 (2016) 「从语法化角度分析日语「な」的历史变迁」『白城师范学院学报』7, 71-74.
- Brown, P., & Levinson, S. (1987) *Politeness*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bybee, J. (1985) *Morphology: a study of the relation between meaning and form*. Typological studies in language 9. Amsterdam: John Benjamins.
- Bybee, J. (1988) The diachronic dimension in explanation. In J. Hawkins (ed.) *Explaining language universals*. Oxford: Basil Blackwell. 350-379.

- Bybee, J., Revere, P., & William, P. (1994) *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the language of World*. Chicago: University of Chicago Press.
- Croft, W. (2003) *Typology and universals*. 2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press.
- Givón, T. (1971) Historical syntax and synchronic morphology: an archaeologist's field tri. *Chicago Linguistic Society* 7, 294-415.
- Givón, T. (1978) Negation in Language: Pragmatics, Function, Ontology. *Syntax and Semantics* 9: Pragmatics, P. Cole, ed., 69-112. New York: Academic Press.
- Halliday, M. (1970) Language Structure and Language Function. J. Lyons (ed.) *New Horizons in Linguistics*, 65-140. Harmondsworth: Penguin.
- Halliday, M., & Hasan, R. (1976) *Cohesion in English*. London: Longman.
- Heine, B., & Kuteva, T. (2002) *World Lexicon of Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Heine, B., & Narrog, H. (2010) *The Oxford Handbook of Linguistic Analysis*. Oxford University Press.
- Hopper, P. J., & Traugott, E. C. (2003) *Grammaticalization*, Cambridge University Press.
- Jespersen, O. (1917[2010]) *Negation in English and Other Languages*. Copenhagen: A. F. Høst.
- Jespersen, O. (1924) *The Philosophy of Grammar*. London: George Allen & Unwin.
- Kohnen, Thomas. (2008) Directives in Old English Speech Acts in the History of English. ed. by Andreas H. Jucker and Irma Taavitsainen, 27-44. John Benjamins. Amsterdam/Philadelphia.
- Kopytko, R. (1995) Linguistic Politeness Strategies in Shakespeare's Plays. *Historical Pragmatics: Pragmatic Developments in the History of English*. ed. by Andreas H. Jucker, 515-540 John Benjamins. Amsterdam/ Philadelphia.
- Labov, W. (1972) *The Transformation of Experience in Narrative Syntax*. *Language in the Inner City*, 96-354 Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press.
- Leech, G. (1983) *Principles of Pragmatics*. London / New York: Longman.
- Lehmann, C. (1995) *Thoughts on grammaticalization*. Unterschleissheim: Lincom.
- Lyons, J. (1977) *Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Matsumoto, Y. (1988) From bound grammatical markers to free discourse markers: history of some Japanese connectives. *Berkeley Linguistic Society* 14, 340-351.
- Narrog, H. (2009) *Modality in Japanese: The layered structure of the clause and hierarchies of functional categories*. John Benjamins Publishing Company

- Narrog, H. (2012) *Modality, Subjectivity, and Semantic change*. Oxford University Press
- Nina, Y. (2006) An analysis of Negative Nominalized Predicates as Prohibitives in Japanese Discourse. *Japanese/Korean Linguistics*. Volume 14, 434-446. Center for the Study of Language
- Palmer, F. (1986) *Mood and modality*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Searle, J. (1969). *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sweetser, E. (1990) *From etymology to pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sweetser, E. (1991) *From etymology to pragmatics*. Metaphorical and cultural aspects of semantic structure, 76-86. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, E. (1982) From propositional to textual and expressive meanings: some semantic-pragmatic aspects of grammaticalization. *Perspectives on historical linguistics*, 245-271. Benjamins.
- Traugott, E. (1995) Subjectification in grammaticalisation. D. Stein / S. Wright (eds.) *Subjectivity and subjectivization: Linguistics perspectives*, 31-35. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, E. (1997) Subjectification and the Development of Epistemic Meaning: The Case of promise and threaten. *Modality in Germanic Languages: Historical and Comparative Perspectives*. ed. by Swan, T. and O. J. Westvik, 185-210. Mouton de Gruyter, Berlin.
- Traugott, E. (2003) Constructions in grammaticalization. *The Handbook of Historical Linguistics* ed. By Brian, d. Joseph and Richard, D. Janda, 624-647. Oxford: Basil Blackwell
- Traugott, E. (2005) *Lexicalization and Language Change*. Cambridge: Cambridge University Press
- Traugott, E. (2010) Revisiting subjectification and intersubjectification. Kristin Davidse, Lieven Vandelanotte, and Hubert Cuyckens, eds., *Subjectification, Intersubjectification and Grammaticalization*, 29-71. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Talmy, L. (1988) Force dynamics in language and cognition. *Cognitive Science* 12. 49-100
- Vanderveken, D. (1990) *Meaning and Speech Acts*. Cambridge University Press.
- Wilson, D., & Sperber, D. (1988) Mood and the analysis of non-declarative sentences. J. Dancy, J. M. E. Moravcsik, & C. C. Taylor (eds.), *Human Agency: Language, Duty and Value*, 77-101. Stanford: Stanford University Press.
- Masamichi, Y. (2003). *The Pragmatics of Negation: Its Functions in Narrative*. Tokyo: Hituzi Syobo Publisher.

参考資料

1. ドラマ『スペック〜翔』 2012 年 4 月 1 日放送
2. 『広辞苑 第六版』(2008) 岩波書店
3. 『日本語語感の辞典』(2011) 岩波書店
4. 『明鏡国語辞典 第二版』(2010) 大修館書店
5. 『語源由来辞典』(2005)
6. 『万葉集』
7. 『源氏物語』
8. 『竹取物語』
9. 『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』 国立国語研究所
70. 『坂井輪の子ども』 <http://www.sakaiwa-e.city-niigata.ed.jp/kimari/27kimari.pdf>

謝辞

本研究を進めるにあたり始終あたたかいご指導と激励を賜りました、ここに深く感謝の意を表します。

特に、指導教授である東北大学国際文化研究科中本先生、ナロック先生には長い期間にわたり、研究の進め方や論文の書き方など、ひとかたならぬご指導を賜りました。どれほど言葉を尽くしても足りないほど、感謝しております。最後まで本当にありがとうございました。また、小野先生には、研究に向かう姿勢や研究に関する困難克服のための具体的な方策まで丁寧に教えていただきました。心からお礼を申し上げます。論文の審査にあたっては、副島先生からのいろいろご丁寧に貴重なアドバイスいただき、多くの的確なご指導を賜りましたことに御礼申し上げます。

言語コミュニケーション論講座の方々には、多くの激励をいただき大変深く感謝しております。特に先輩の張蘇さん、北京外国語大学から交換留学でいらした鄧超群さんには、多くのことを教えていただきました。また、同研究室の曽曾さんにも多く激励のことばをいただきました。留学生活では友達の余玉嬌さんにもお世話になりました、皆様のご支援に心から感謝申し上げます。

最後に、これまで自分を育ててくれた両親に感謝いたします。今後も研究を通じての社会貢献に向かって努力をしていきたいと思いをします。